

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第157集

# 物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書

第三北上中部工業用水道施設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書

第三北上中部工業用水道施設関連遺跡発掘調査

# 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、工業の振興による拠点的な開発を目指した内陸型工業地帯を形成することは、雇用機会の拡大と県民所得の向上を図るうえで重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

第三北上中部工業用水道事業に関連する二子城跡の一部である物見崎遺跡と監物館跡は、北上市街地北東の北上川西岸に立地し、平成元年の発掘調査により縄文・弥生時代から中近世までの遺構と遺物が発見され、貴重な資料を提供することができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書の作成に御協力、御援助を賜りました岩手県企業局、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成2年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

## 例 言

1. 本報告書は、北上市北上工業団地 120—1 ほかに所在する物見崎遺跡と、同市北上工業団地 301—13ほかに所在する監物館跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 発掘調査は、岩手県企業局による第三北上中部工業用水道施設建設に伴って遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的に実施した緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と岩手県企業局との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 遺跡の岩手県遺跡番号と調査略号は、次のとおりである。

物見崎遺跡	遺跡番号 ME 46—2214	調査略号MM—89
監物館跡	遺跡番号 ME 46—2214	調査略号KM—89
4. 発掘調査面積は物見崎遺跡 1,945㎡、監物館跡 300㎡であり、野外調査は平成元年4月7日から6月20日まで、斎藤博司・光井文行・斎藤實が担当した。室内整理は平成元年12月1日から平成2年3月31日まで実施し、本報告書の執筆・編集には斎藤實があたった。
5. 遺跡の基準点測量は、株式会社吉田測量設計に委託した。
6. 石質鑑定は佐藤地質工学研究所の佐藤二郎氏に、炭化材の樹種鑑定は岩手県木炭協会の早坂松次郎氏に依頼した。
7. 野外調査及び本報告書作成にあたり、佐藤嘉広（岩手県立博物館）、菊池啓治郎（北上市考古学会）、沼山源喜治・稲野裕介・杉本良・稲野彰子（北上市教育委員会）、桐生正一・高橋亜貴子（滝沢村教育委員会）の各氏から御指導・御助言をいただいた。
8. 野外調査にあたっては、北上市教育委員会及び地元の方々の御協力をいただいた。
9. 土層観察及び出土遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1967）を参考にした。
10. 本報告書に掲載した実測図の縮尺については各図中にスケールを付した。写真図版の縮尺は不定である。実測図の凡例については、『Ⅱ．調査方法と整理方法』に掲載している。
11. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

序  
例 言

## [本 文]

I. 調査に至る経過	3	土塁状遺構	53
II. 遺跡の立地と環境		柱穴群	54
1. 遺跡の立地と地形	3	集石状遺構	55
2. 地質	4	V. 監物館跡から検出された遺構	56
3. 基本層序	4	VI. 遺構外出土遺物	
4. 周辺の遺跡	5	1. 土器	58
III. 調査方法と整理方法		2. 陶磁器	66
1. 野外調査	6	3. 土製品	66
2. 室内整理	9	4. 石器	67
IV. 物見崎遺跡から検出された遺構と遺物		VII. まとめ	
1. 竪穴住居跡	10	1. 遺構について	86
2. 土坑・炭窯跡	42	2. 遺物について	89
3. 溝跡	47	3. まとめ	92
4. その他の遺構	53		

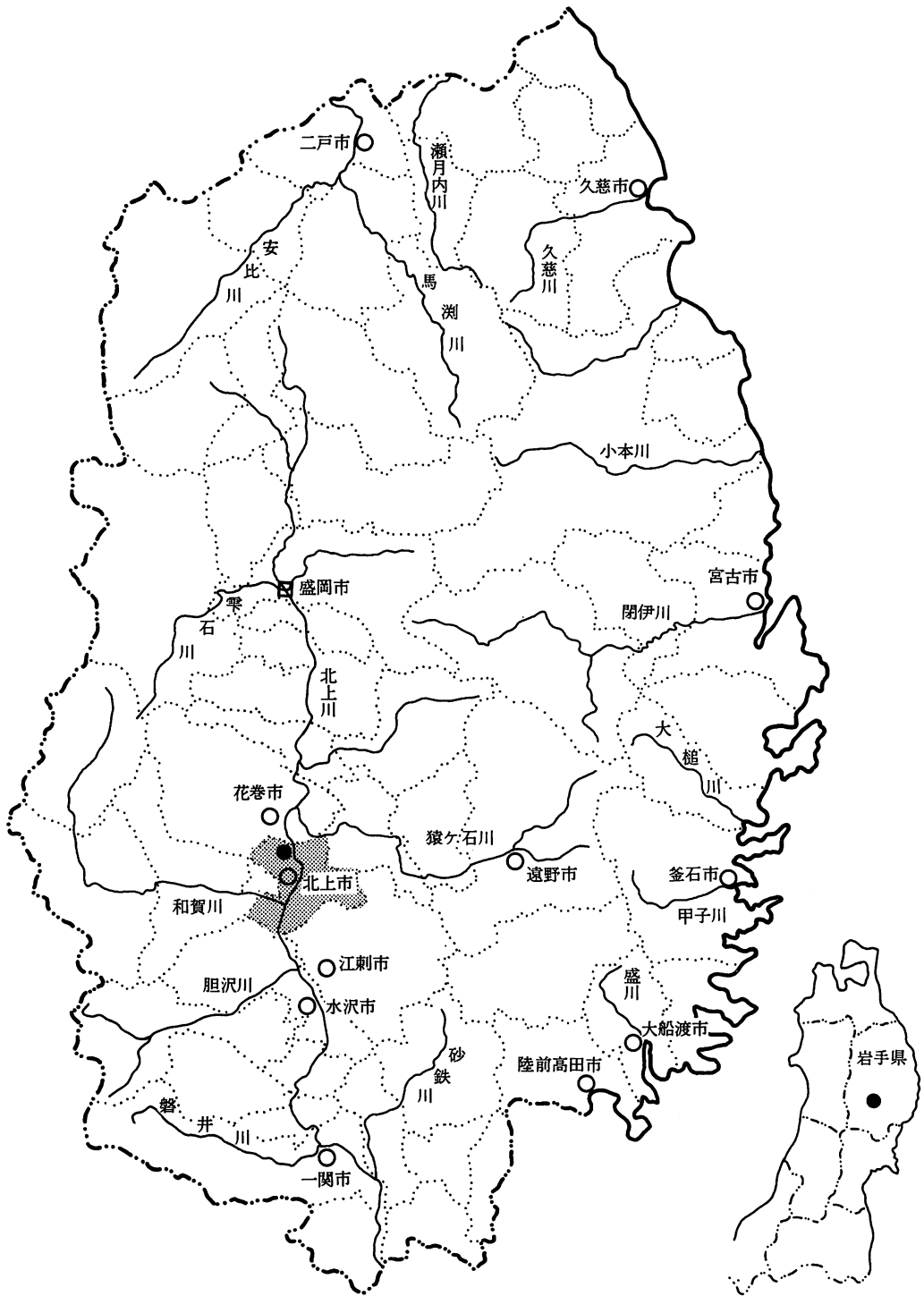
## [図 版]

第1図 岩手県全図	1	第10図 D 9住居跡・出土遺物	19
第2図 遺跡位置図	2	第11図 E 4住居跡	20
第3図 基本層序	5	第12図 E 6住居跡	21
第4図 遺構配置図	7	第13図 E 7住居跡	22
第5図 B 11住居跡	10	第14図 E 7住居跡出土遺物	23
第6図 B 11住居跡出土遺物	12	第15図 F 4-1住居跡・出土遺物	25
第7図 C 10住居跡	13	第16図 F 4-2住居跡	27
第8図 C 13住居跡・出土遺物	15	第17図 F 6住居跡・出土遺物	29
第9図 D 8住居跡・出土遺物	17	第18図 F 15住居跡	30

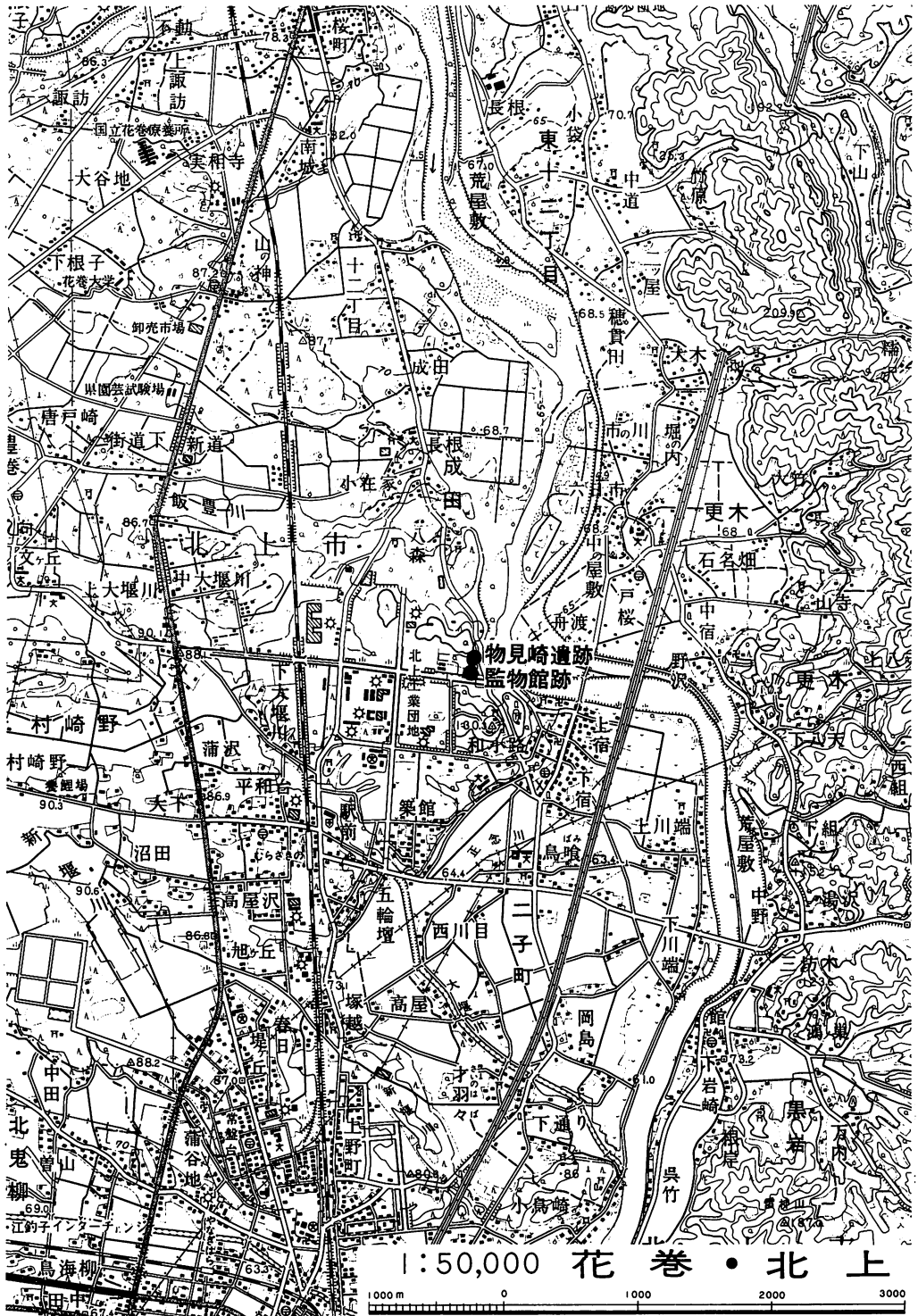
第19図	F 16住居跡・出土遺物	32	第37図	監物館跡溝跡	57
第20図	G 5住居跡	34	第38図	縄文土器(1)	70
第21図	G 5住居跡出土遺物	35	第39図	縄文土器(2)	71
第22図	G 10住居跡・出土遺物	36	第40図	縄文土器(3)・弥生土器(1)	72
第23図	G 14住居跡	37	第41図	弥生土器(2)	73
第24図	G 15住居跡・出土遺物	39	第42図	弥生土器(3)	74
第25図	H 11住居跡・出土遺物	41	第43図	弥生土器(4)	75
第26図	H 8土坑・出土遺物	43	第44図	陶磁器	76
第27図	C 13炭窯跡	44	第45図	土製品	77
第28図	G 7-1炭窯跡・出土遺物	45	第46図	石鏃・石錐・石匙(1)	78
第29図	G 7-2炭窯跡	45	第47図	石匙(2)・石篋・ピエスエスキーユ ・不定形石器(1)	79
第30図	H 6炭窯跡	46	第48図	不定形石器(2)	80
第31図	H 7炭窯跡	47	第49図	不定形石器(3)	81
第32図	溝跡	49	第50図	不定形石器(4)	82
第33図	溝跡出土遺物(1)	50	第51図	不定形石器(5)・石錘	83
第34図	溝跡出土遺物(2)	52	第52図	打製石斧・礫器・磨石(1)	84
第35図	土壘状遺構	53	第53図	磨石(2)・凹石・砥石	85
第36図	柱穴群	55			

### [写真図版]

図版 1	遺跡全景	97	図版 16	土壘状遺構・集石状遺構	112
図版 2	物見崎遺跡	98	図版 17	監物館跡溝跡	113
図版 3	監物館跡	99	図版 18	遺構内出土遺物	114
図版 4	B 11・C 10住居跡	100	図版 19	遺構内出土遺物	115
図版 5	C 13・D 8住居跡	101	図版 20	縄文土器(1)	116
図版 6	D 9・E 4住居跡	102	図版 21	縄文土器(2)・弥生土器(1)	117
図版 7	E 6・E 7住居跡	103	図版 22	弥生土器(2)	118
図版 8	F 4-1・F 4-2住居跡	104	図版 23	陶磁器	119
図版 9	F 6・F 15住居跡	105	図版 24	土製品	120
図版 10	G 5住居跡	106	図版 25	石鏃・石錐・石匙・石篋・ピエス エスキーユ・不定形石器(1)	121
図版 11	G 10住居跡	107	図版 26	不定形石器(2)	122
図版 12	F 16・G 14住居跡	108	図版 27	不定形石器(3)・石錘・打製石斧	123
図版 13	G 15・H 11住居跡	109	図版 28	礫器・磨石・凹石・砥石	124
図版 14	土坑・炭窯跡	110			
図版 15	溝跡	111			



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図



## I. 調査に至る経過

第三北上中部工業用水道事業は、北上工業団地の立地済企業における工業用水の需要拡大と今後の立地企業に対する工業用水の確保のため、昭和61年から平成11年にかけて工業用水道施設の建設を行う事業である。

工業用水道建設用地及び周辺には二子城跡とこれに関連する加賀館跡、坊館跡、監物館跡等の周知の遺跡があり、これにかかわる埋蔵文化財の取扱いについては岩手県企業局と岩手県教育委員会との間で協議された。

昭和62年12月18日付けで県企業局から調査の依頼をうけた県教育委員会文化課は、同年12月22日に現地確認を実施し、坊館跡にかかる用地内全域の発掘調査を実施する必要がある旨回答した。さらに調査結果にもとづいて両者間で協議が重ねられ、県教育委員会文化課は昭和63年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業として調整を行った。その後、県企業局は同事業の計画変更に伴い、昭和63年11月9日付け「企業建築101号」により、物見崎遺跡及び監物館跡にかかる用地内の確認調査を県教育委員会に依頼した。これをうけて県教育委員会文化課は昭和63年11月18日に試掘調査を実施し、縄文時代の竪穴住居跡を確認した。県教育委員会は昭和63年11月22日付け「教文455号」により用地内の本調査が必要である旨、県企業局に回答し、本調査については調整のうえ平成元年度における岩手県文化振興事業団の受託事業とした。

これにより、当埋蔵文化財センターは平成元年度4月1日付け委託契約によって発掘調査に着手することになった。

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地と地形

物見崎遺跡および監物館跡は、東日本旅客鉄道東北本線村崎野駅の北東約2km、北上駅の北北東約6.2kmに所在し、国土地理院発行5万分の1地形図「北上」NJ—54—14—13（一関13）図幅中の北緯39度19分57秒、東経141度8分16秒付近に位置する。遺跡は北上川西岸の標高78～86mの河岸段丘上に立地し、東側を流れる北上川との比高は18～26mである。両遺跡は小沢を

挟んで、北に物見崎遺跡、南に監物館跡と隣接し、物見崎遺跡の北側には『物見ヶ崎』と呼ばれる標高 111.2m の高台があり、金刀比羅宮が祀られている。さらに、西側約150mに堀跡が、北側の隣接地には土塁と思われる盛土が認められる。今回の調査区域は、『物見ヶ崎』と呼ばれる高台の南東斜面の中腹から裾野に当たる区域であり、斜面と比較的平坦な区域とに分かれている。現況はいずれも山林である。

## 2. 地 質

南流してきた北上川は、花巻市と北上市の市境付近で大きく東に流れを変えて、ほどなくして再び南流する。遺跡は大きく蛇行する北上川西岸の河岸段丘上に位置するが、遺跡周辺の北上川西岸には河岸低地と段丘群が広範囲にわたり発達している。この段丘群の主要なものは、古期から西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘があり、中川久夫他（1962）による段丘区分によると、物見崎遺跡・監物館跡が立地するのは村崎野段丘上に突出する残丘であり、その山体は稲瀬安山岩と呼ばれる第三系の安山岩質凝灰角礫岩～凝灰岩から構成されている。

村崎野段丘の段丘構成層及び段丘面を被覆する火山灰は黒沢尻火山灰である。構成層は、砂及び粘土を基質とする礫層（飯豊礫層）で層厚は数10mにもなり、各所で植物質薄層を挟んでいる。黒沢尻火山灰は、花巻の南方から前沢の南方まで分布するが、北上川沿いの地域では黒沢尻～大堰川付近で最も厚く250～300cmにも達する。この付近の黒沢尻火山灰主部は黄灰色粒浮石（村崎野浮石）で上方に茶褐色火山灰を伴う。村崎野浮石は大堰川で180cmとなり、その北方山神付近で急に薄失する。火山灰直下の部分は、一般に暗茶褐色を呈している。豊沢川・和賀川間の村崎野段丘上に突出する飯豊森・飛勢森は、第三系に属する安山岩及び同質凝灰角礫岩・凝灰岩（稲瀬安山岩）から成る残丘である。

上述の村崎野浮石の区分については、その後の吉田充・金原光男・大上和良（1980）、井上克弘・小沼敦（1981）、金原光男・吉田充・大上和良（1980）、大上和良・吉田充（1980）の研究調査により予察どおりに2分されている。しかし、2分された浮石層は研究者によって上下関係が逆の結果となっていることなどからさらに検証が必要である。

## 3. 基本層序（第3図）

両調査区内では、基本的には左図に示すような層序が観察される。部分的には後世の攪乱、土砂の移動、木根などのために層序が乱れる所もみられるが、基本層序は以下のように大別される。

第Ⅰ層 黒褐色土（7.5Y R  $\frac{3}{2}$ ）シルト質表土である。

マツ、スギなどの草木細根の未分解植物質に富む黒褐色土層である。特に上部の5

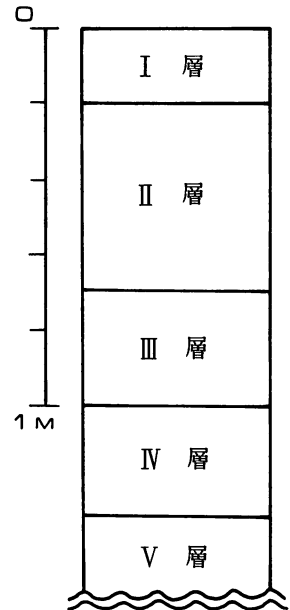
cm前後は未分解植物の集積部であり、調査区全域に認められる。埋土はさらさらしており、しまり・粘性はない。層厚は15～30cmである。

第Ⅱ層 黒褐色土 (10Y R 2/3) シルト質 遺物包含層である。平坦部から東側と南側の斜面上に認められる。堆積状況は、西側斜面下端から平坦部では浅く、東側と南側の斜面では厚さが80cm、南側斜面では多量の礫が混入し、西側に至っては30～40cm前後となる。中位から下位で遺物が出土している。層厚は10～80cmである。

第Ⅲ層 褐色土 (10Y R 4/4) シルト 遺構検出面である。西側斜面上から平坦部にかけて、平均して堆積している。層厚は10～40cmである。

第Ⅳ層 褐灰色土 (10Y R 5/1) シルト 褐色の粘性シルトを含み、固くしまっている。第Ⅲ層褐色土から第Ⅴ層灰白色土シルトへの漸移層である。層厚は10～40cmである。

第Ⅴ層 灰白色土 (10Y R 7/1) シルト 第Ⅳ層の褐灰色土の粘性シルトからシルトへと変換し、下部では角礫を含む岩盤となる。



第3図 基本層序

#### 4. 周辺の遺跡

両遺跡を包含する二子城跡は、北上川右岸の村崎野段丘にある標高 100m を超える残丘及び周囲の段丘上に立地する。飛勢公園（二子城詰丸比定地）を中心とした地域には、縄文時代の土器片、石器、平安時代の土師器や須恵器の破片などが採集され、また、中世の和賀地方を支配した和賀氏の居城「二子城」であることなどから、各時代にわたる複合遺跡として古くから注目されている。周辺には二子城館跡を示す平場跡・土塁跡・堀跡など数々の遺構がみられる。両遺跡の東側には坊館跡があり、その南東側には北上川に合流する小沢を挟んで加賀館跡が、さらに南には飛勢森館跡がある。

二子城館跡の発掘調査は、北上市教育委員会によって実施されている。昭和50年には加賀館跡の一部が調査されている。さらに昭和52年に坊館跡の一部が調査され、縄文時代早期の土器片、石器等が検出されている。また、昭和60年には加賀館跡の一部の試掘調査が行われ、縄文時代の石器、溝跡と炭窯跡の遺構が検出されている。昭和62年には遺跡の北側にある轡清水遺跡の一部が調査され、土塁跡・堀跡・掘立柱建物跡など二子城館跡にかかわるとされる遺構

が検出されている。昭和63年には岩手県企業局による第三北上中部工業用水道施設建設に伴い、当センターが坊館跡の発掘調査を行い、縄文時代後期の竪穴住居跡、時代不明の土坑群などが確認されている。これまでの二子城跡にかかわる調査の結果、縄文時代早期の遺構から中世の二子城跡に関連すると思われる平場・土塁・堀などの遺構が検出されている。

#### 《参考・引用文献》

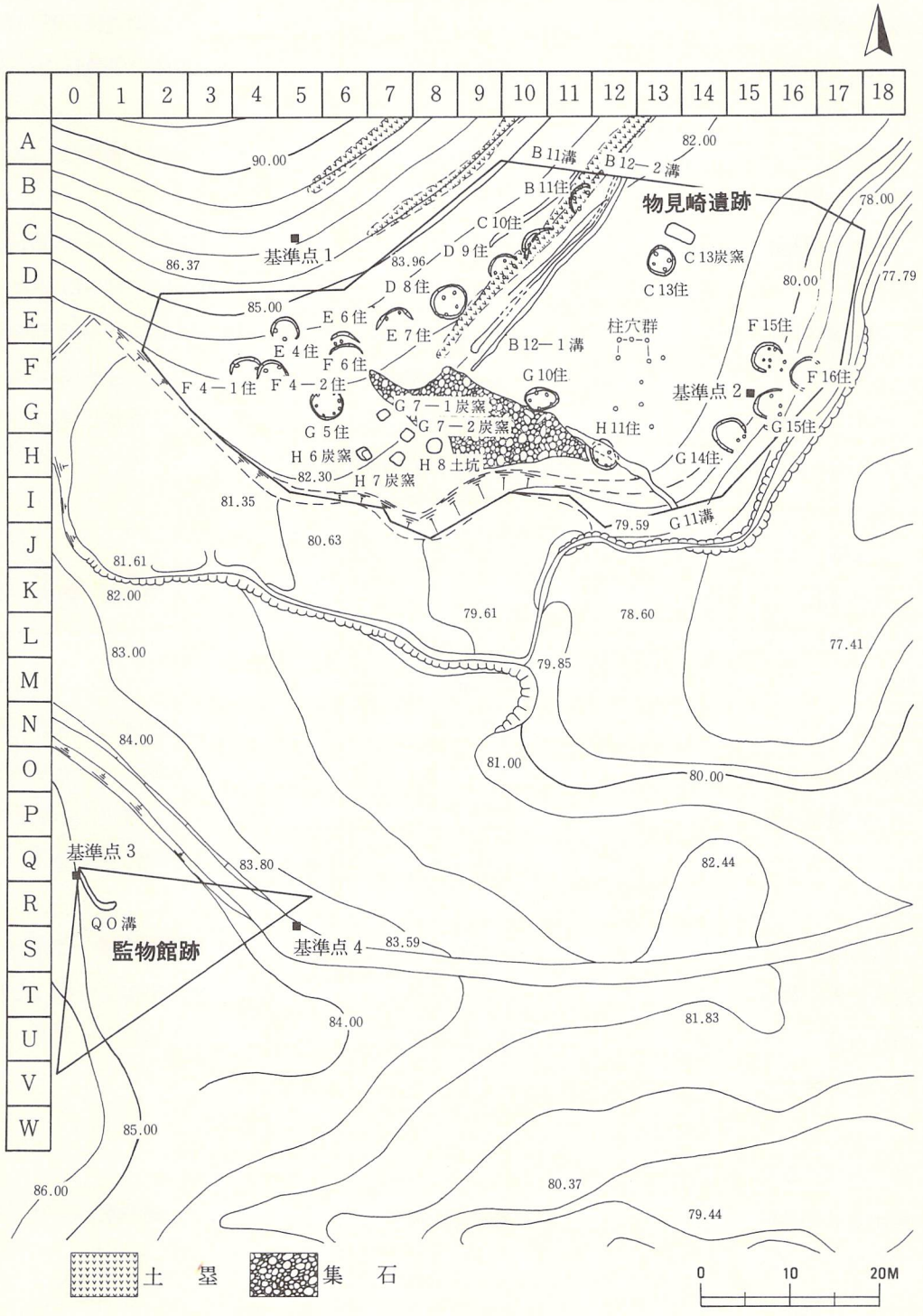
- 北上市史刊行会（1970） 「北上市史第一巻」  
北上市史刊行会（1970） 「北上市史第二巻」  
北上市史刊行会（1970） 「北上市史第三巻」  
北上市教育委員会（1977） 「二子城跡坊館遺跡調査報告書」 北上市文化財調査報告書第21集  
北上市教育委員会（1986） 「北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ」（口内地区）  
北上市文化財調査報告書第43集  
北上市教育委員会（1990） 「くつわ清水遺跡調査報告書」 北上市文化財調査報告書第51集  
岩手県教育委員会（1986） 「岩手県中世城館跡分布調査報告書」  
岩手県文化財調査報告書第82集  
中川久夫他（1963） 「北上川上流沿岸の第四系および地形」 地質学雑誌第69巻第811号  
吉田充・金原光男・大上和良（1980） 「胆沢扇状地における火山灰層序について」  
日本地質学会第87年学術大会講演要旨  
金原光男・吉田充・大上和良（1981） 「いわゆる“村崎野浮石”について」  
日本地質学会東北支部会報No11  
大上和良・吉田充（1984） 「北上川中流域・胆沢扇状地における火山灰層序」  
岩手大学工学部研究報告第37巻

### Ⅲ．調査方法と整理方法

#### 1．野外調査

##### (1) 調査区の設定（第4図）

調査対象地域は、物見崎遺跡が東西約79m、南北約42mの不整形をした区域であり、監物館跡は南北約23m、東西約36mの三角形をした区域である。物見崎遺跡は調査区内の西側に斜面があり、東側には沢に向かう斜面とその中間部分が平坦面である。このことから、東側斜面上部に



第4図 遺構配置図

1点、調査区外の北西斜面上に1点と任意の点を2点設定した。監物館跡は、調査区が狭いため、三角形の底辺部分に任意の2点を設定し、基準となる中心線が可能な限り調査区内に含まれるように設定した。

基準点1・2、監物館跡の基準点3・4の平面直角座標第X系による成果値と標高は、以下のとおりである。

物見崎遺跡	基準点1	X = -74,027.553m	Y = 26,243.847m	H = 87.675m
	基準点2	X = -74,046.089m	Y = 26,294.032m	H = 81.102m
監物館跡	基準点3	X = -74,098.880m	Y = 26,219.831m	H = 85.094m
	基準点4	X = -74,104.300m	Y = 26,234.385m	H = 83.614m

グリッドの設定にあたっては、基準点1・基準点2を基準として、南北に5m毎に区切り、北から南へA～W、東から西へ01～18を与え、A02・D11などのように呼称した。

## (2) 粗掘りと遺構検出

物見崎遺跡では、調査区北端・西側に幅2mのトレンチを設定し、表土を10～20cm除去したが、遺構の存在が確認されなかった。さらに、調査区の平坦面中央部に2×30mのトレンチを設定した結果、北側のⅡ層上部から遺構の一部と思われる黒色土が検出された。また、調査区の平坦面は開墾の際に削平をうけ、南側の斜面に耕作のためと思われる盛土と集石状遺構が確認された。さらに、調査区の平坦面中央部に2×30mのトレンチを設定した結果、盛土であることが判明した。特に東側の斜面には80～100cmの黒色土が堆積し、また、Ⅱ層上位から遺物が出土することを確認した。この結果から、調査区域について重機による表土除去を行い、その後、人力により検出面までの掘り下げを行い、遺構検出を行った。

監物館跡では雑物撤去後に、調査区北端に幅2mのトレンチを設定したが、遺構の存在が確認されず、遺物の出土もみられなかった。さらに、Ⅱ層黒褐色土での遺構検出作業を行ったが、同様の結果であった。このことから、重機による表土除去を行い、その後人力によって掘り下げ、遺構検出を行った。

## (3) 遺構の命名

検出された遺構の大部分は、その大半が流失し、遺存状態は良好ではない。遺構名はグリッド名を付して遺構名とし、以下のとおり呼称した。

住居跡 B11～ 土坑 H8～ 炭窯跡 G7～ 溝跡 B11～

#### (4) 精査と実測

住居跡は4分法、土坑類・炭窯は2分法、溝跡は適宜ベルトを残して精査を実施した。遺構実測図は、1mメッシュを基本とする簡易遣り方を設定し、20分の1の縮尺を用いて行った。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

#### (5) 写真撮影

現場での写真撮影は、35mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7判cmモノクロ1台を使用した。

## 2. 室内整理

### (1) 作業内容

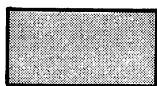
遺物の処理は、水洗・注記を行い、種類ごとに分類・仕分け、接合復元、実測、トレース、拓本、写真撮影の順に作業を実施した。

### (2) 図版

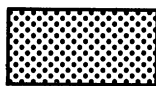
遺構実測図の縮尺は住居跡・土坑・炭窯跡の平面図と埋土土層断面図は40分の1、住居跡に伴う炉の土層断面図は20分の1、溝跡・土塁状遺構等は、適宜縮尺を示した。方位は磁北を示した。

遺物実測図の縮尺では、土器実測図・拓影を遺構内2分1・遺構外3分の1、特に大きいものは4分の1・6分の1で示し、陶磁器の実測図は原寸大である。また、土製品実測図は2分の1である。石器の実測図では剥片石器は2分の1、礫石器は3分の1で示した。

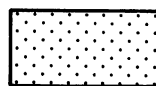
写真図版は縮尺は、土器・石器ともに3分の1であるが、小さいものは2分の1、大きいものは6分の1である。遺物に付した番号は、土器・陶磁器・土製品・石器は各種別に連番とした。



地山



焼土



焼土  
(埋土混入)



礫

#### 掲載図版凡例

## IV. 物見崎遺跡から検出された遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡18棟、土坑1基、炭窯跡5基、溝跡4条などである。遺構に伴って出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、剥片石器などである。土器は、縄文時代前期と弥生時代のものが主体である。

### 1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、調査区の北東側の南東向き斜面上に4棟、北西側から西側の南東から南向き斜面上に10棟、平坦面では4棟が検出された。遺構の時期は、出土遺物から縄文時代の竪穴住居跡16棟（前期14・後期2）、弥生時代の住居跡2棟である。

#### B 11住居跡

遺構（第5図 写真図版4）

調査区の東北端部より南東向き斜面の下部にあたるB 11・C 11グリットに位置する。C 10住居跡とは南西部で隣接する。黒褐色土とそれからやや離れたところに焼土が検出されたことから、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

平面形は遺構の南東部約2分の1が流失しているため明確ではないが、おおよそ円形を呈するものと思われる。規模は径334cm、壁は全体的にほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北西壁で18cmであるが、南東側に傾斜して消滅する。床面は比較的平坦で固くしまっている。埋土は暗褐色土のシルトを主体に構成されている。炉は地床炉で、ほぼ中央部に位置するものと思われる。約78×60cmの範囲に焼土が広がり、少量の木炭が混入している。柱穴は3個検出されており、深さは20cm前後であり、埋土は褐色土のシルトが主体である。炉の南側付近の床面からは、不定形石器12点が一括して出土している。

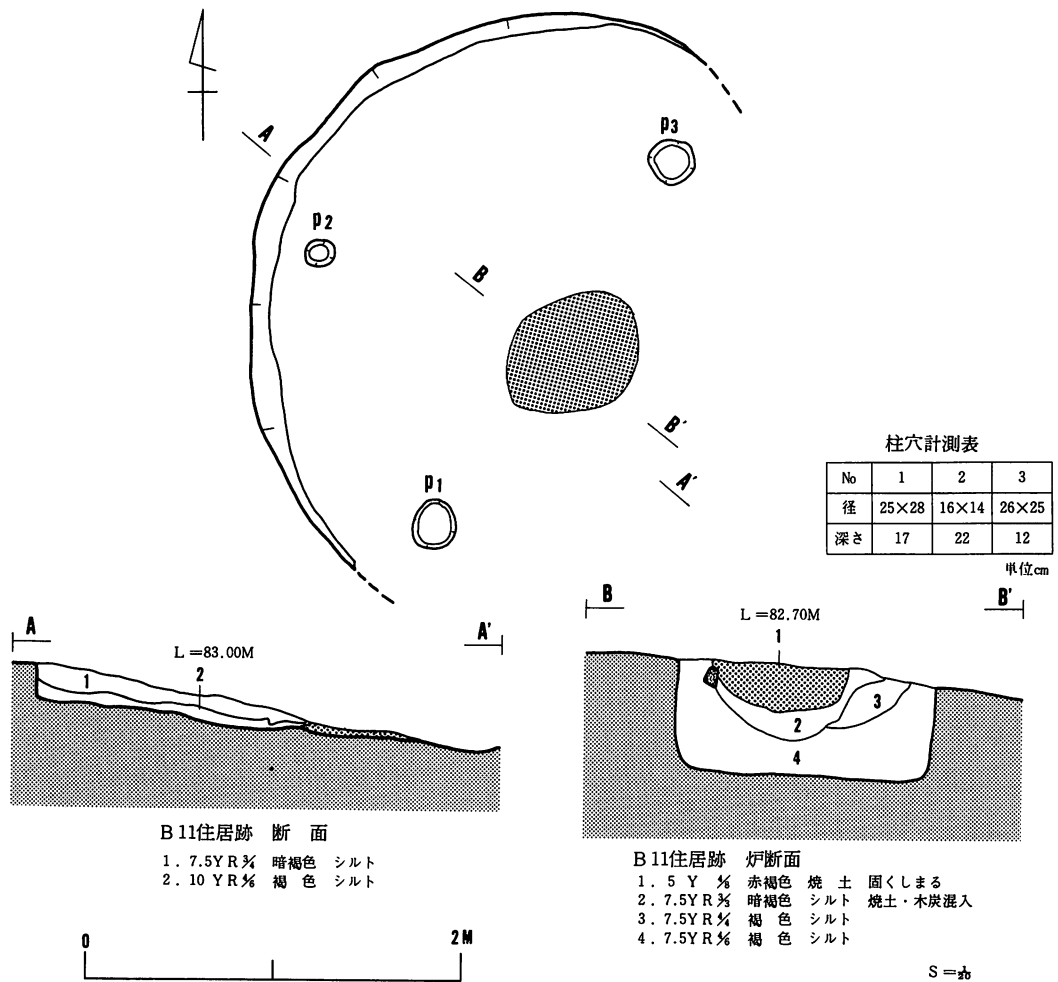
遺物（第6図1～6 写真図版18）

出土遺物は、床面から石器が出土している。1は両面加工により刃部を作り出して、全体の形が短冊形に成形された石篋である。2～6は2側縁に微細な調整痕の認められる不定形石器である。そのうち2と6が接合する。また、遺構の周辺からは、植物性繊維が混入している縄文土器片が出土している。

時期

出土遺物、遺構の規模・形態から、縄文時代前期前葉に比定される。





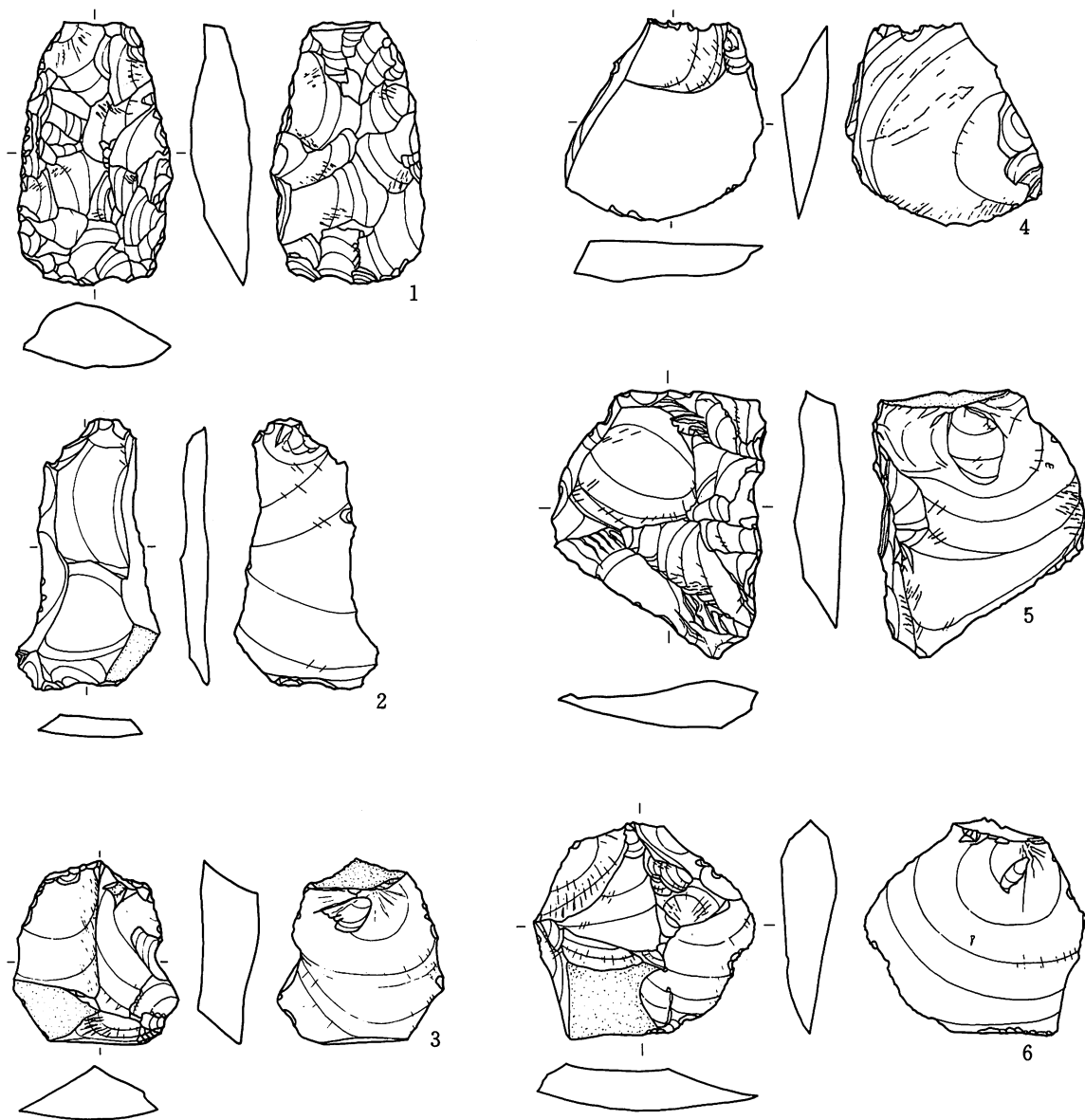
第5図 B11住居跡

### C10住居跡

遺構（第7図 写真図版4）

調査区北東端部よりの南東向き斜面の下部C10・C11グリットに位置する。B11住居跡とは北東側で、D9住居跡とは南西側で隣接する。黒褐色土とそれからやや離れたところに焼土が検出されたことから、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の南東部約3分の2が欠損しているため形状は明らかではないが、不整の楕円形を呈するものと思われる。規模は径384cm、全体的にほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北西壁で20cmであるが南東側に傾斜して消滅する。床面は比較的平坦で固くしまっている。埋土は褐色土のシルトを主体に構成されている。炉は地床炉でほぼ中央部に位置するものと思われ、約60×28cmの範囲に焼土が広がり、少量の木炭が混入している。柱穴は2個検出されており、深さは20cm前後、埋土は褐色土のシルトが主体である。



S-4

番号	出土地点・層位	器種	法 皿 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写 真 図 版
			長 さ	幅	厚 さ					
1	B11住 床面埋土	石 匱	7.2	4.2	1.7	55.6	硬質泥岩		(4)-2	18-1
2	B11住 床面埋土	不定形	7.6	4.1	0.6	18.25	硬質泥岩	M. F.	(6)-II-4	18-2
3	B11住 床面埋土	不定形	5.2	4.7	1.6	29.75	凝灰質硬質泥岩	M. F.	(6)-II-4	18-3
4	B11住 床面埋土	不定形	5.6	5.6	1.3	34.0	凝灰質硬質泥岩	M. F.	(6)-II-4	18-4
5	B11住 床面埋土	不定形	7.5	6.1	1.3	51.1	凝灰質硬質泥岩	M. F.	(6)-II-4	18-5
6	B11住 床面埋土	不定形	6.1	6.2	1.5	47.8	硬質泥岩	M. F.	(6)-II-4	18-6

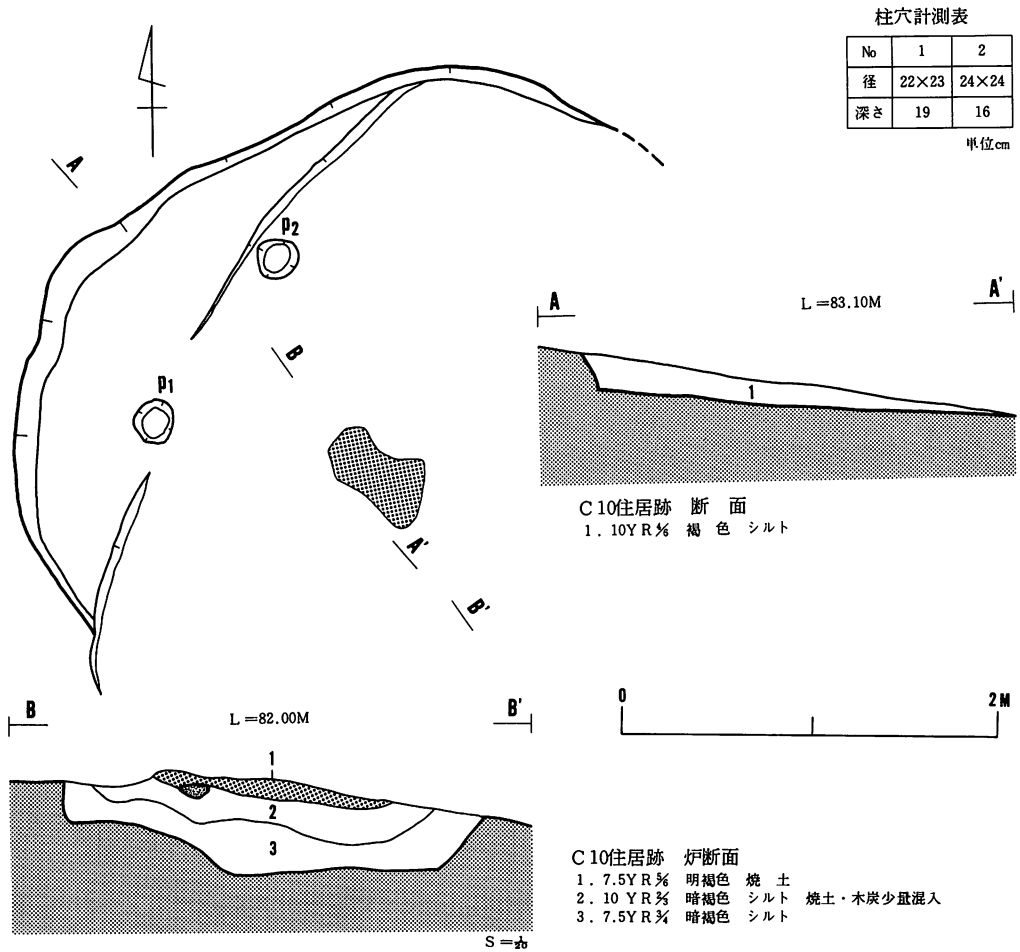
第6図 B11住居跡・出土遺物

遺物

遺構に伴う遺物は出土していないが、周辺からは縄文時代の植物性繊維が混入している土器片が出土している。

時期

構築面や形状、規模周辺から出土する遺物などから縄文時代前期前葉に比定される。



第7図 C10住居跡

### C 13住居跡

#### 遺構（第8図 写真図版5）

調査区東北部の平坦部にあたるC 13・D 13グリットに位置する。C 13炭窯跡とは北東側で隣接する。検出面はⅢ層上面である。

規模は径314×278cm、壁高は10cmである。不整な楕円形を呈し、壁は全体にほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で固くしまっている。埋土は黒褐色土のシルトを主体に構成されている。遺構の南西部よりに位置する炉は地床炉であり、焼土は約94×50cmの広範囲に広がっている。柱穴は4個検出されており、深さは10cm前後である。埋土は黒褐色土～暗褐色土のシルトが主体である。

#### 遺物（第8図1・2 写真図版18）

遺物は、土器片が出土している。1・2は深鉢形土器の胴部破片である。胎土に植物性繊維が混入し、地文に単節斜縄文が施文されている。いずれも(1)―I―1―a に分類される。

#### 時期

遺構の出土遺物から縄文時代前期前葉に比定される。

### D 8住居跡

#### 遺構（第9図 写真図版5）

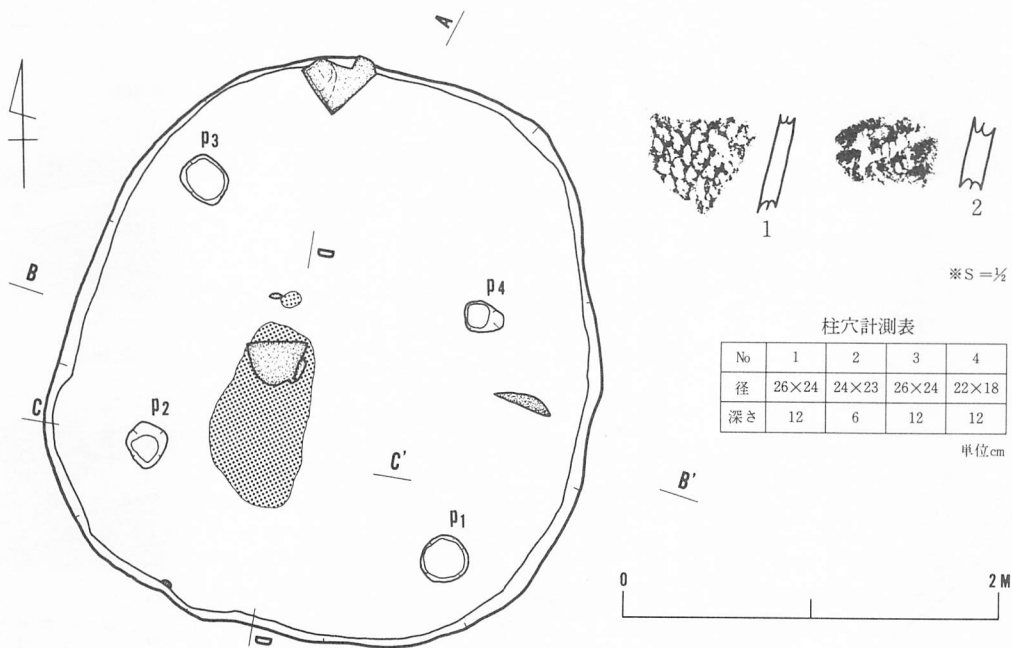
調査区ほぼ中央部の南東向き斜面下部にあたるD 8・E 8グリットに位置する。D 8グリットから南側平坦部にかけて黒色土が広がっていることから、斜面下部にトレンチをいれたところ、黒色土下部から焼土が検出され、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。D 9住居跡とは東北部で、E 7住居跡とは南西部で隣接する。

平面形はほぼ円形をし、規模は径353cmである。壁は全体的にほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北西壁で56cmである。床面は平坦で固くしまり、僅かに南側に向かって傾斜をしている。埋土は暗褐色土～黒褐色土のシルトが主体であり、斜面上方からの流れ込みによる堆積状況がみられる。炉は地床炉であり、遺構の中央部からやや南西部よりに位置し、約60×50cmの範囲に焼土が広がり、焼土には木炭が少量混入している。柱穴は4個検出されており、深さは10cm前後である。埋土は暗褐色土のシルトが主体である。

#### 遺物（第9図3・4・7 写真図版18）

遺物は、埋土から土器片と石器が出土している。

土器：3は甕形土器である。厚手で口縁部を篋状工具で削り、頸部から体部には単節斜縄文が施文されている。(2)―VI―3に分類される。4は鉢形土器である。口縁部には単節斜縄文の他、埋土中の上位からは甕形土器の破片が出土しているが、いずれも脆弱で拓本に耐えられ

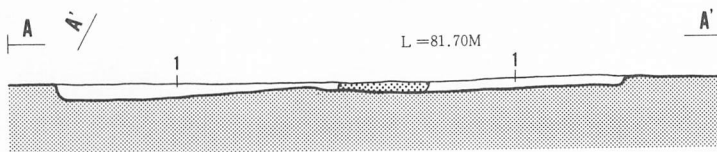


※S = 1/2

柱穴計測表

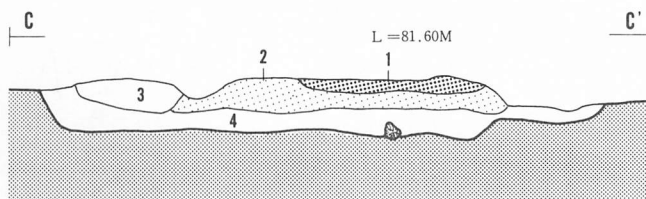
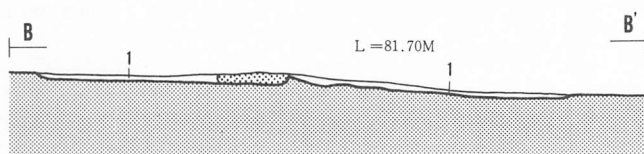
No	1	2	3	4
径	26×24	24×23	26×24	22×18
深さ	12	6	12	12

単位cm



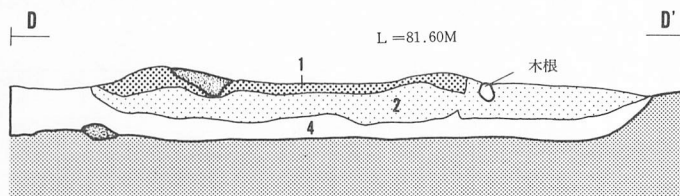
C13住居跡 断面

1. 10Y R 1/2 黒褐色 シルト



C13住居跡 炉断面

- 1. 10Y R 1/2 黒褐色 シルト
- 2. 5Y R 1/2 暗赤褐色 シルト
- 3. 5Y R 1/2 極暗赤褐色 シルト
- 4. 7.5Y R 1/2 褐色 シルト



S = 1/2

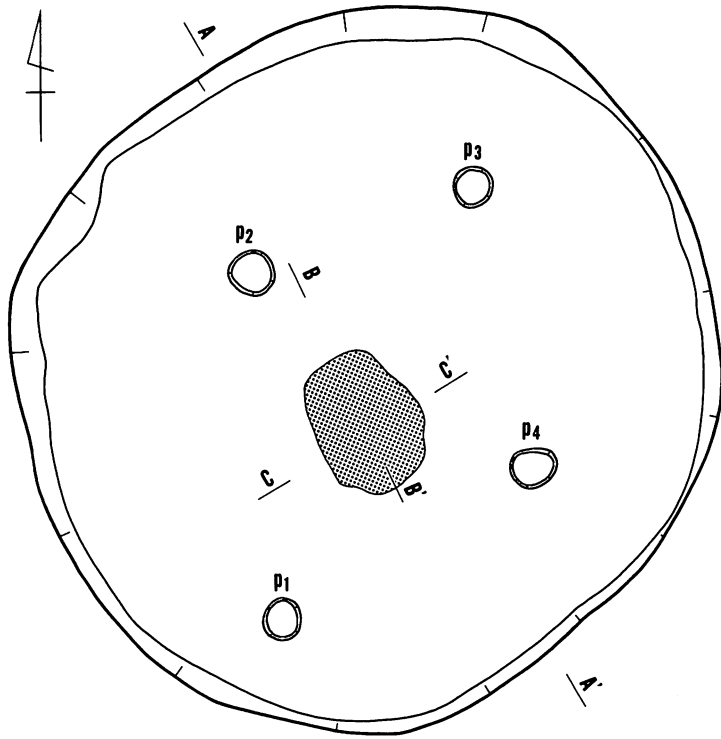
番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
1	C13住 埋土	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		18-1
2	C13住 埋土	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		18-2

第8図 C13住居跡・出土遺物

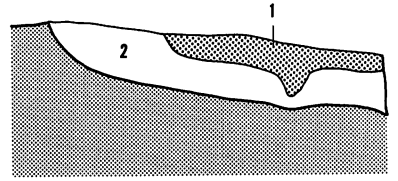
柱穴計測表

No	1	2	3	4
径	20×22	25×24	22×23	26×22
深さ	30	17	23	22

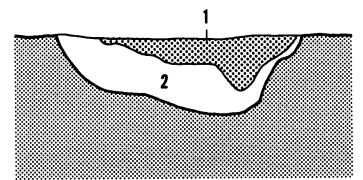
単位cm



B L=82.80M B'



C L=82.80M C'

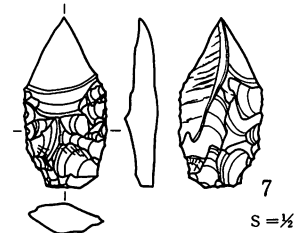
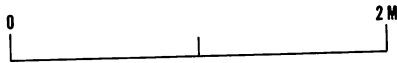
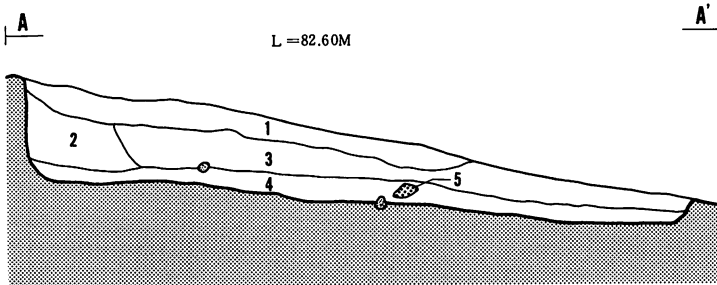


D 8 住居跡 炉断面

1. 5 Y R 赤褐色 焼土 木炭混入
2. 7.5 Y R 極暗褐色 シルト 木炭少量混入

D 8 住居跡 断面

1. 7.5 Y R 暗褐色 シルト
2. 7.5 Y R 極暗褐色 シルト
3. 10 Y R 黒色 シルト
4. 10 Y R 黒褐色 シルト
5. 5 Y R 赤褐色 焼土 木炭混入



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
3	D 8 住 埋土	甕	口縁部	単節斜縄文	ミガキ		(2)-VI-3		18-3
4	D 8 住 埋土	鉢	胴部	単節斜縄文 口縁部沈線	ミガキ		(2)-III-4		18-4

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写 真 図 版
			長さ	幅	厚さ					
7	D 8 住	石 鏃	4.6	2.2	0.85	7.4	硬質泥岩	木葉形をした尖頭器状を呈する	(1)-II-2	18-7

第9図 D 8 住居跡・出土遺物

るものは少ない。いずれも斜面上方からの流れ込みにより混入したものと思われる。

石器：7は木葉形の無茎基の石鏃である。(1)―Ⅱ―2に分類される。その他、フレークやチップ類が出土している。

#### 時期

規模や形状、構築面から縄文時代前期に比定される。

#### D 9 住居跡

##### 遺構 (第10図 写真図版6)

調査区北端部よりの南東向き斜面下部のD 9・D 10グリットに位置する。C 10住居跡とは南西側で、D 8住居跡とは南西側で隣接する。黒褐色土とそれからやや離れたところに焼土が検出されたことから、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の南東部約3分の2を欠いているため形状は明確ではないが、ほぼ円形を呈するものと思われる。推定される規模は径350cm、壁高は北西壁で24cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南東側に傾斜して消滅する。床面は固くしまっているが、僅かに南東方向へ緩やかに傾斜している。埋土は暗褐色土のシルトが主体である。炉は地床炉で、形状から推測するとほぼ中央部に位置するものと思われ、約80×70cmの範囲に焼土が広がる。柱穴は4個検出されており、深さは20cm前後である。埋土は暗褐色土のシルトが主体である。

##### 遺物 (第10図5・6 写真図版18)

遺物は、土器片が出土している。5・6は深鉢形土器の胴部破片である。単節斜縄文が施文され、胎土に植物性繊維が混入する。5は単節斜縄文が施文された後に篋状工具により器表面が調整され、胎土に混入している植物性繊維は少量である。いずれも(1)―Ⅰ―1―aに分類される。その他、石器ではフレークやチップ類などの小破片が出土している。

#### 時期

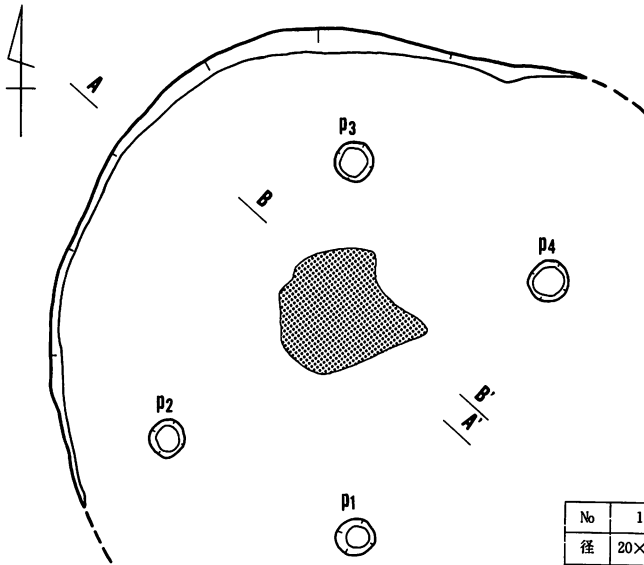
出土遺物から縄文時代前期前葉に比定される。

#### E 4 住居跡

##### 遺構 (第11図 写真図版6)

調査区北端部よりの南東向き斜面上のE 4・E 5グリットに位置する。C 10住居跡とは南西側で、D 8住居跡とは南西側で隣接する。検出状況は黒褐色土の中に焼土が広がって検出されたことから、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

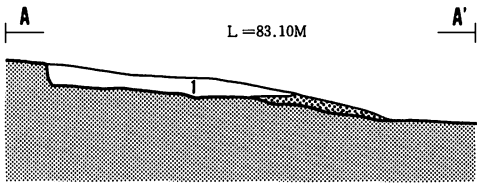
平面形は斜面上にあるため流出し、遺構の南東部約3分の1を失っているため形状は明らか



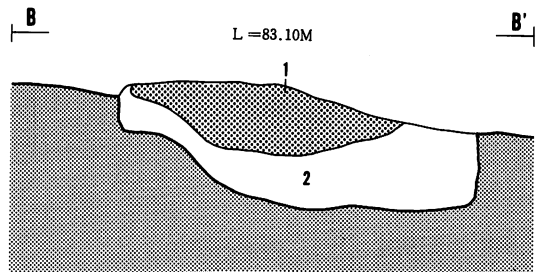
柱穴計測表

No	1	2	3	4
径	20×21	20×20	21×22	22×22
深さ	20	13	12	12

単位cm

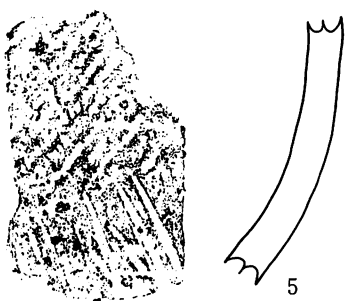


D 9 住居跡 断面  
1. 10Y R% 褐色 シルト

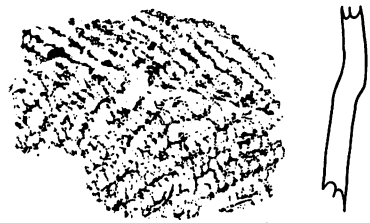


D 9 住居跡 炉断面  
1. 5 Y R% 明赤褐色 焼土 固くしまる  
2. 7.5Y R% 褐色 シルト

S=1/4



5



6

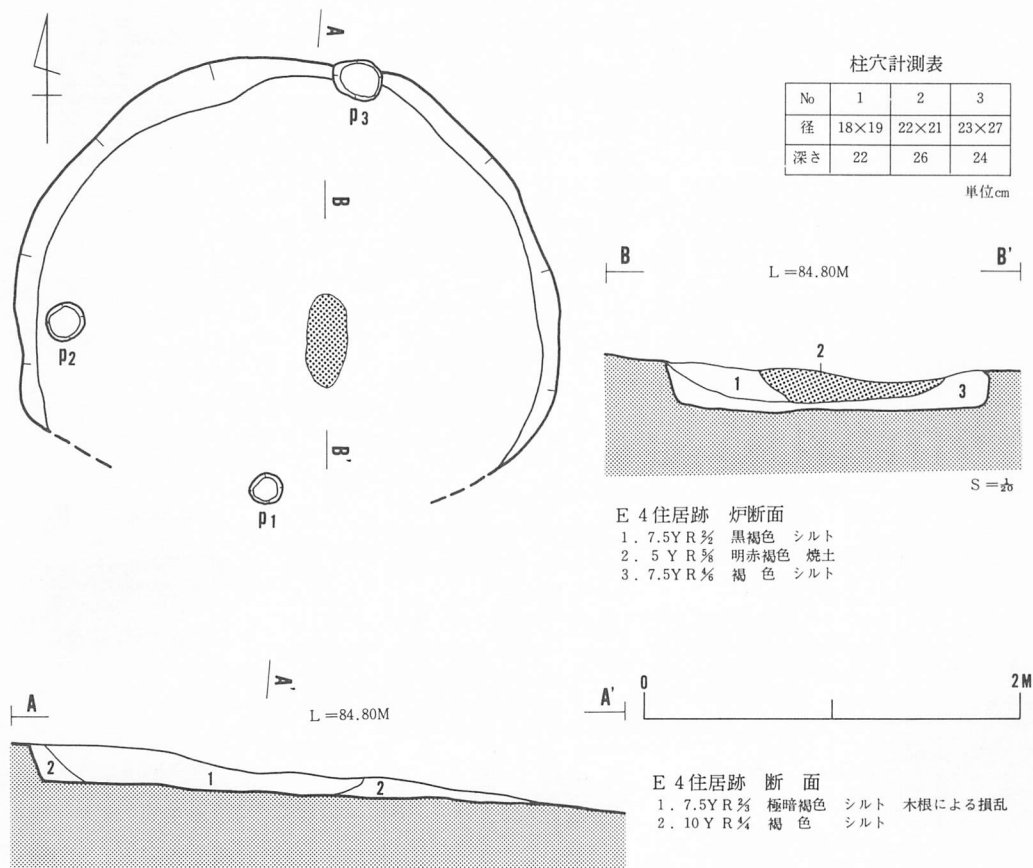
S=1/2

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
5	D 9 住 埋土	深鉢	胴部	単節斜縄文→ヘラナデ	ナデ	繊維(少)	(1)-I-1-a		18-5
6	D 9 住 埋土	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		18-6

第10図 D 9 住居跡・出土遺物



ではないが、ほぼ円形を呈するものと思われる。推定される規模は径294cm、壁高は北西壁で21cmと小規模である。壁はほぼ垂直に直ち上がるが、南側に傾斜して消滅する。床面は比較的平坦で固くしまっているが、僅かに南方向へ緩やかに傾斜している。埋土は木根による攪乱を受けているが、極暗褐色土～褐色土のシルトを主体に構成されている。炉は地床炉で、形状から推測するとほぼ中央部に位置するものと思われる。84×40cmの範囲に焼土が広がる。柱穴は3個検出されており、そのうちの1個は北壁にある。深さは25cm前後である。埋土は暗褐色土のシルトが主体である。



第11図 E 4 住居跡

遺物

遺構に伴う遺物は出土していない。

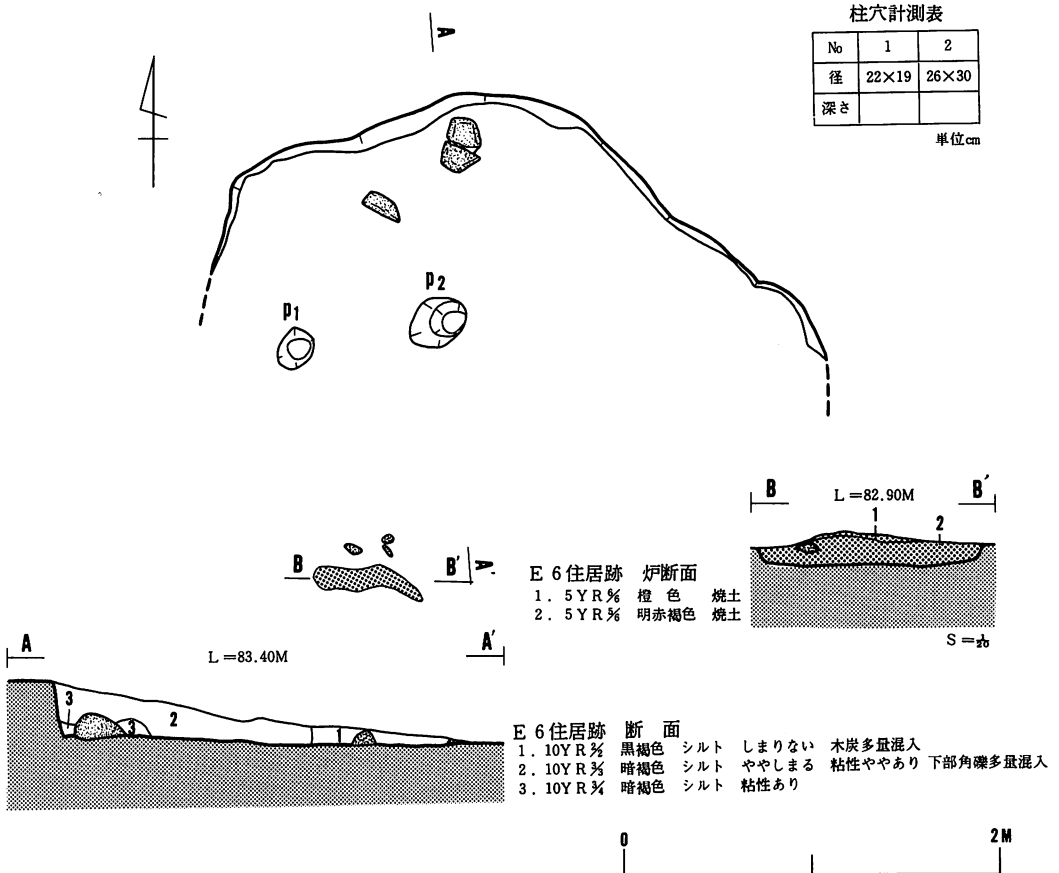
時期

形状と規模などから推定すると、縄文時代前期に比定される。

E 6 住居跡

遺構 (第12図 写真図版7)

調査区西部の斜面のE 6グリットに位置する。F 6住居跡とは南側で重複関係にあり、北東側ではE 7住居跡と、西側ではE 4住居跡と隣接する。黒褐色土とそれからやや離れたところに焼土が検出されたことから、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。



第12図 E 6 住居跡

平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の南側約3分の2を欠いているため形状は明らかではないが、ほぼ円形を呈するものと思われる。推定規模は径330cm、壁高は北壁で28cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、南側に傾斜して消滅する。床面は比較的平坦で固くしまっているが、僅かに南方向へ緩やかに傾斜している。埋土は暗褐色土のシルトを主体に構成されている。埋土の1層には多量の木炭が含まれており、重複関係にあるF6住居跡の埋土の一部でもある。2・3層は斜面からの流れ込みによる堆積層である。床面と思われる部分には小礫が多く混入し、凹凸が激しく、整地した痕跡は認めにくい。炉は地床炉であり、約15×50cmの範囲に焼土が広がり、木炭が混入している。柱穴は2個検出されており、深さは20cm前後である。埋土は暗褐色土のシルトが主体にある。

#### 遺物

遺構に伴う遺物の出土はないが、周辺の地区からは弥生時代初頭の土器片が出土している。石器ではフレークの破片1点が出土している。炉の埋土から出土した木炭は、樹種鑑定の結果、針葉樹（スギ?）とナラである。

#### 時期

遺構に伴う遺物はないが、規模や形状構築面など、周辺の状況から、縄文時代前期に比定される。しかしF6住居跡と重複関係にあり、本遺構が切られていることから、弥生時代初頭の可能性もある。

#### E7住居跡

##### 遺構（第13図 写真図版7）

調査区西部の斜面下端のE6グリットに位置する。北東側ではD8住居跡と、西側ではE6住居跡と隣接する。黒褐色土とそれからやや離れたところに焼土が検出されたことから、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

平面形は斜面上にあるため流失し、さらに木根等によりかなり攪乱を受けている。このため、遺構の南側約2分の1を欠いており形状は明らかではないが、平面形は不整の楕円形を呈するものと思われる。

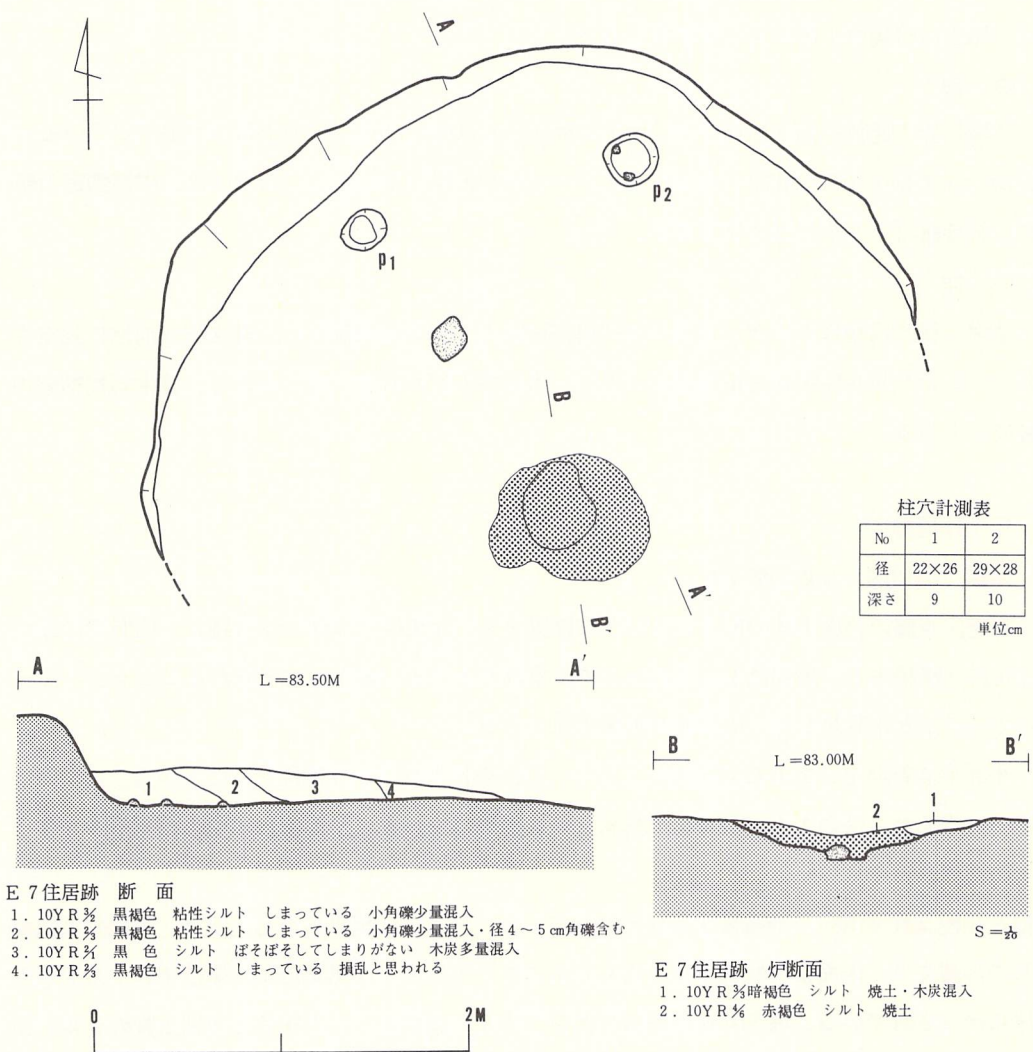
推定規模は径419cm、壁高は北西壁で21cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南東側に傾斜して消滅する。床面は比較的平坦で固くしまっている。埋土は黒褐色土～黒色土のシルトを主体に構成されている。埋土は自然堆積状況を示すが、壁面近くは黒褐色土の粘土質のシルトが、また斜面からの流れ込みによって混入した小角礫や径4～5cmの角礫が少量含まれる。床面と思われる部分には小礫が多く混入し、凹凸が激しく、住居として整地した痕跡は認められない。炉は地床炉であり、約70×80cmの範囲に焼土が広がり、木炭が混入している。柱穴は2個検出

されており、深さは10cm前後である。埋土は黒褐色土のシルトを主体に構成されている。

遺物 (第14図7~10 8・9 写真図版18)

遺物は、土器片と石器が出土している。

土器：7・8・10は鉢形土器の胴部破片である。地文に単節斜縄文が施文されている。7は変形工字文が、口縁部の内側には沈線が1本施文されている。10は底部付近の破片である。いずれも(2)―Ⅲ―4に分類される。9は深鉢形土器の胴部破片であり、縦位方向に撚糸文が施文されている。(1)―Ⅲ―1に分類される。いずれの土器片も、内面はミガキ調整されている。斜



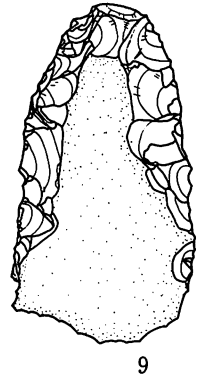
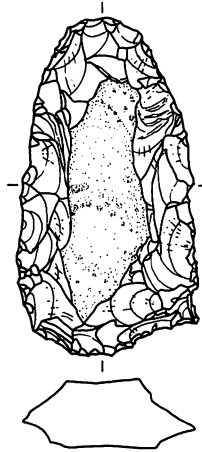
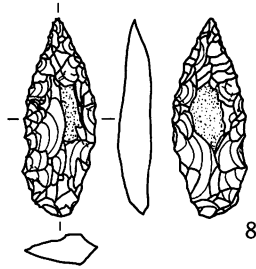
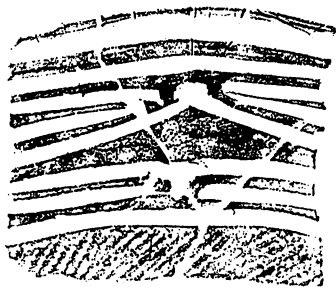
E 7 住居跡 断面

1. 10Y R 8/ 黒褐色 粘性シルト しまっている 小角礫少量混入
2. 10Y R 8/ 黒褐色 粘性シルト しまっている 小角礫少量混入・径4~5cm角礫含む
3. 10Y R 8/ 黒色 シルト ぼそぼそしてしまりが無い 木炭多量混入
4. 10Y R 8/ 黒褐色 シルト しまっている 損乱と思われる

E 7 住居跡 炉断面

1. 10Y R 8/ 暗褐色 シルト 焼土・木炭混入
2. 10Y R 8/ 赤褐色 シルト 焼土

第13図 E 7 住居跡



S=+

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
7	E 7 住 Q <sub>2</sub> 埋土 II 層	鉢	胴部	単節斜縄文 変形工字文 口唇部内側沈線 1 本	ミガキ		(2)-III-4		18-7
8	E 7 住 床面	鉢	胴部	単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-4		18-8
9	E 7 住 床面	深鉢	胴部	縦方向撚糸文	ミガキ		(2)-III-4		18-9
10	E 7 住 Q <sub>2</sub> 埋土 II 層	鉢	胴部	単節斜縄文 底部付近?	ミガキ		(2)-III-4		10-10

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
8	E 7 住 床面	石 鉢	5.2	1.9	0.9	7.65	硬質泥岩	木葉形をした尖頭器状を呈する	(1)-II-2	18-8
9	E 7 住 床面	打製石斧	9.0	4.6	1.8	92.0	粘板岩ホルンフェルス		(8)-II-4	18-9

第14図 E 7 住居跡・出土遺物

面からの流れ込みにより混入したものと思われる。

石器：8は木葉形をした石鏃であり、茎部が欠損している。(1)―Ⅱ―2に分類される。9は両面加工により刃部のみを作り出して、全体の形が短冊形に成形されている打製石斧である。(8)―Ⅱに分類される。

炉の埋土から出土した木炭は、樹種鑑定の結果、針葉樹（スギ?）である。

#### 時 期

遺構内の埋土はかなりの攪乱をうけており、出土遺物から時期の比定は難しく、規模や形状と構築面など周辺の状況などから縄文時代前期に比定される。しかし、埋土からの出土土器片を考慮すると弥生時代初頭に比定される可能性もある。

#### F 4-1 住居跡

##### 遺構（第15図 写真図版8）

調査区西部の斜面下端のF 4グリットに位置する。F 4-2住居跡とは重複関係にあり、北東側ではE 4住居跡と隣接する。埋設土器の上部が出土したことから検出作業を進めたところ、住居跡のプランと焼土が検出された。検出面はⅢ層上面である。

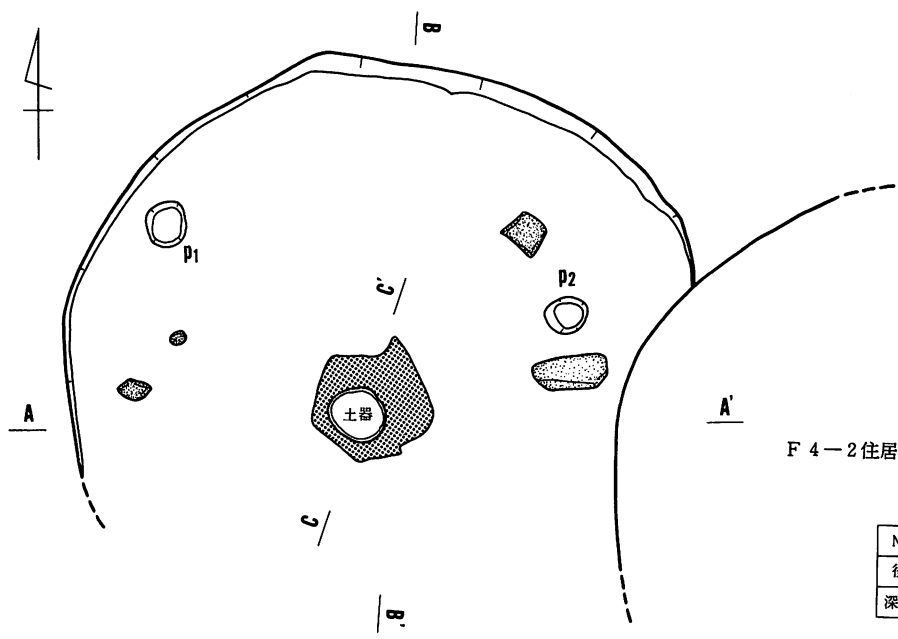
平面形の形状は遺構の南側約2分の1を欠いているため明らかではないが、ほぼ円形を呈するものと思われる。推定される規模は径340cm、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北壁で28cmである。南側にあった壁は、工事用取付け道路建設のためか既に消滅しており、遺構の全容を把握することは不可能であった。床面は比較的平坦で固くしまっている。埋土は暗褐色土～明褐色土のシルトを主体に構成されている。炉は土器埋設炉で、形状から推測するとほぼ中央部に位置するものと思われる。埋土の状況から土器を埋設するために掘込み、埋め込んで安定させたことが確認された。土器埋設炉を中心に約70×64cmの範囲に焼土が広がり、焼土からは少量の木炭が検出されている。柱穴は2個検出されており、深さは20cm前後である。埋土は暗褐色土～褐色土のシルトが主体である。F 4-2住居跡とは、東側で重複関係にある。

##### 遺物（第15図11 写真図版18）

11は埋設炉に使用された土器である。深鉢形土器であり、地文は縦位方向に不整の撚糸文が施文されている。焼成はよく硬い。内面はミガキ調整されている。(1)―Ⅲ―1に分類される。

#### 時 期

埋設炉に使用された土器から、縄文時代後期前葉に比定される。F 4-2住居跡と重複関係にあり、F 4-2住居跡に切られていることからこれよりはやや古いものと思われる。

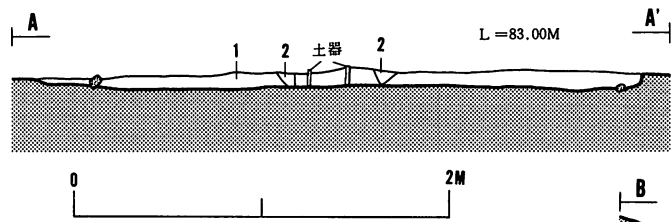


F 4-2 住居跡

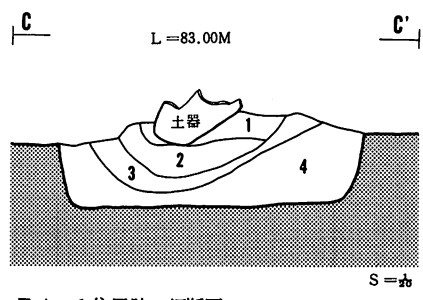
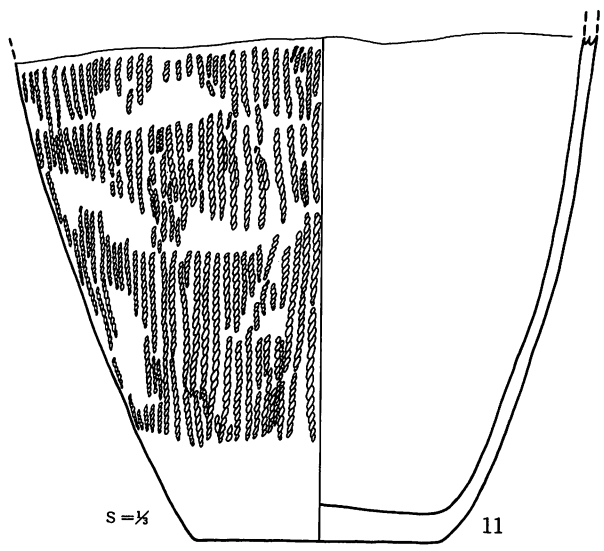
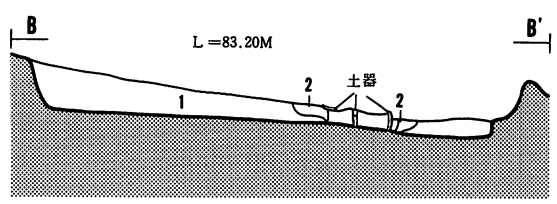
柱穴計測表

No	1	2
径	23×26	24×20
深さ	10	16

単位cm



F 4-1 住居跡 断面(1・2)  
 1. 7.5YR 暗褐色 シルト  
 2. 7.5YR 明褐色 焼土



F 4-1 住居跡 炉断面  
 1. 5YR 赤褐色 焼土  
 2. 7.5YR 暗褐色 シルト 固くしまる  
 3. 7.5YR 褐色 シルト 固くしまる  
 4. 10YR 黄褐色 シルト 固くしまる

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
11	F 4-1 住居設炉	深鉢	胴部	縦位燃糸文→ナデ	ナデ		(1)-III-1	埋設炉	18-11

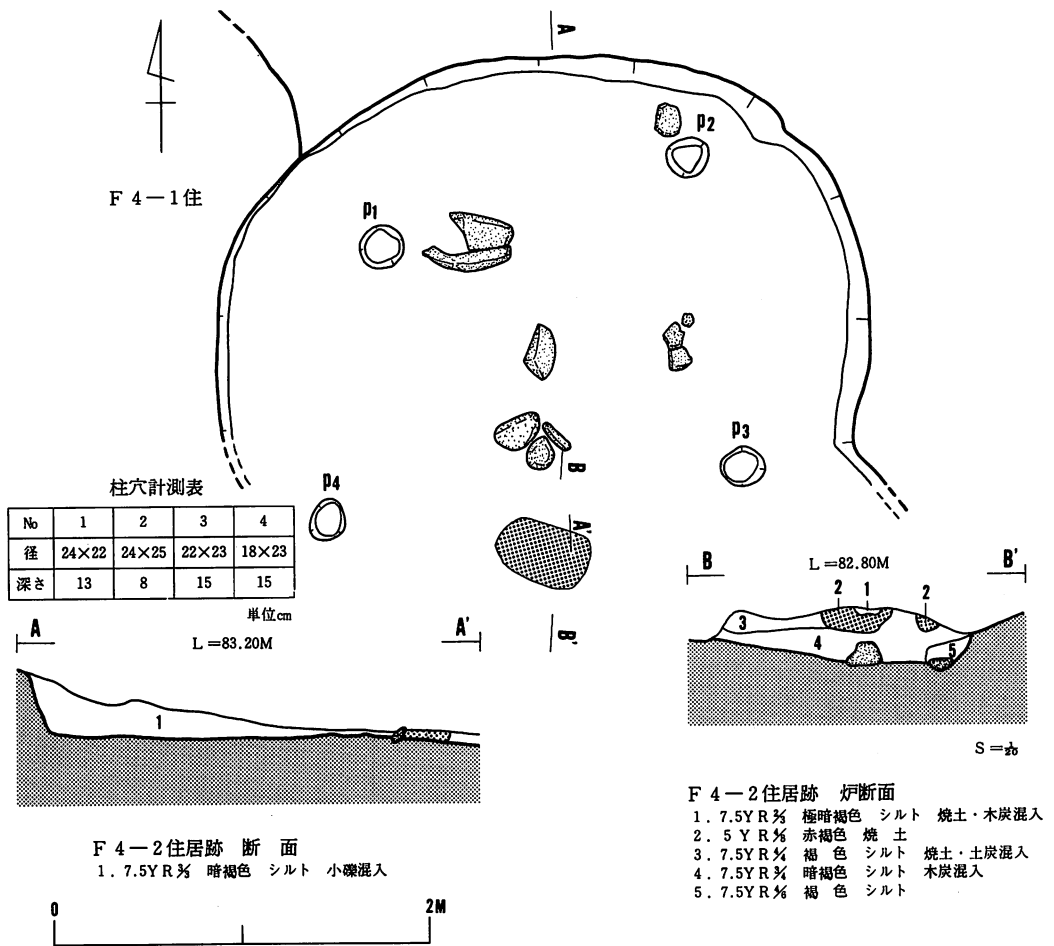
第15図 F 4-1 住居跡・出土遺物

F 4-2 住居跡

遺構 (第16図 写真図版8)

調査区西部の土塁状斜面下端のF 4・F 5グリットに位置する。F 4-1住居跡とは重複関係にあり、北側ではE 4住居跡と、南東側ではG 5住居跡と隣接する。F 4-1住居跡の精査中に東側の壁の状況が不自然なプランを示すことから、重複関係にあることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

遺構の南側約2分の1が不明であるが、平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。規模は径 342cm、壁高は北壁で32cmである。壁は全体的にほぼ垂直に立ち上がるが、南側に傾斜して削平されて消滅している。床面は平坦で固くしまっている。埋土は暗褐色土のシルトを主体に構成されている。炉は地床炉で、形状から推測するとやや南側に位置するものと思われ、約50



第16図 F 4-2 住居跡



×30cmの範囲に焼土が広がり、焼土には木炭が多量に混入している。柱穴は4個検出されており、深さは15cm前後である。埋土は暗褐色土のシルトを主体としている。

後である。埋土は暗褐色土のシルトを主体としている。

#### 遺物

遺構に伴う遺物は出土していない。

#### 時期

F 4—1住居跡と重複関係にあり、F 4—1住居跡を切って構築されているが、時期的にはほぼ同様と思われ、縄文時代後期前葉に比定される。

#### F 6住居跡

##### 遺構 (第17図 写真図版9)

調査区南西部よりの南向き斜面下部のF 6グリットに位置する。E 6住居跡とは重複関係にあり、E 6住居跡を切って構築されている。E 4住居跡とは北西側で、E 7住居跡とは北東側で隣接する。E 6住居跡の検出作業中に、黒褐色土の中の焼土と埋土から住居跡と判明した。検出面はⅢ層下面である。

平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の約3分の2が不明であるが、ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は径392cm、壁高は北西壁で18cmである。壁は全体的にほぼ垂直に立ち上がり、南側に傾斜して消滅する。床面には小礫が多く混入している。埋土は木根による攪乱が認められ、全体に締まりがなく、黒色土～黒褐色土のシルトが主体である。埋土の上位は、斜面からの崩壊土の砂質土が堆積し、中位から下位には木炭が多量に混入している。炉は地床炉で、形状から推測するとほぼ中央部に位置するものと思われ、約44×28cmの範囲に焼土が広がり、焼土からは少量の木炭が出土している。柱穴は検出されていない。

##### 遺物 (第17図12・13 写真図版19)

床面直上より甕形土器と、壺形土器の口縁部が出土している。12は甕形土器であり、口縁部がやや外反し、肩部で緩やかに膨み、単節斜縄文が器面全体に施文されている。器厚は薄く、焼成も良好である。底部には植物の葉脈痕がある。底部内面は円錐形状に盛り上がっている。(2)―Ⅵ―3に分類される。13は高坏の脚部であり、器表面全体がミガキ調整されており、脚部下端部分がいくらか厚くなり、そこに2本の沈線が巡らされている。(2)―Ⅴ―1に分類される。いずれも、内面はミガキ調整されている。炉の埋土から出土した木炭は、樹種鑑定の結果、針葉樹(スギ?)である。

#### 時期

床面直上より遺構に伴う遺物が出土しており、弥生時代初頭に比定される。

## F 15住居跡

### 遺構 (第18図 写真図版9)

調査区南東部の南東向き斜面下部のF 15・F 16グリットに位置する。F 16住居跡とは南東側で、G 15住居跡とは南側で隣接する。斜面上の黒色土下約80cmのところから検出された。検出面はⅢ層上面である。

平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の約2分の1が不明であるが、不整の楕円形を呈するものと思われる。規模は径355cm、壁高は北西壁で14cmである。壁は全体的にほぼ垂直に立ち上がり、南東側に傾斜して消滅する。床面は固くしまっており、南東側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色土のシルトが主体である。柱穴は7個検出され、そのうちの2個は南東側斜面下の遺構に接すると思われるところにある。深さは20cm前後である。埋土は暗褐色土～明黄褐色土のシルトを主体としている。住居跡に伴うものか不明である。炉は検出されなかった。

### 遺物

遺構に伴う遺物は出土していないが、遺構の周辺より胎土に植物性繊維の混入した縄文土器片が多量に出土している。

### 時期

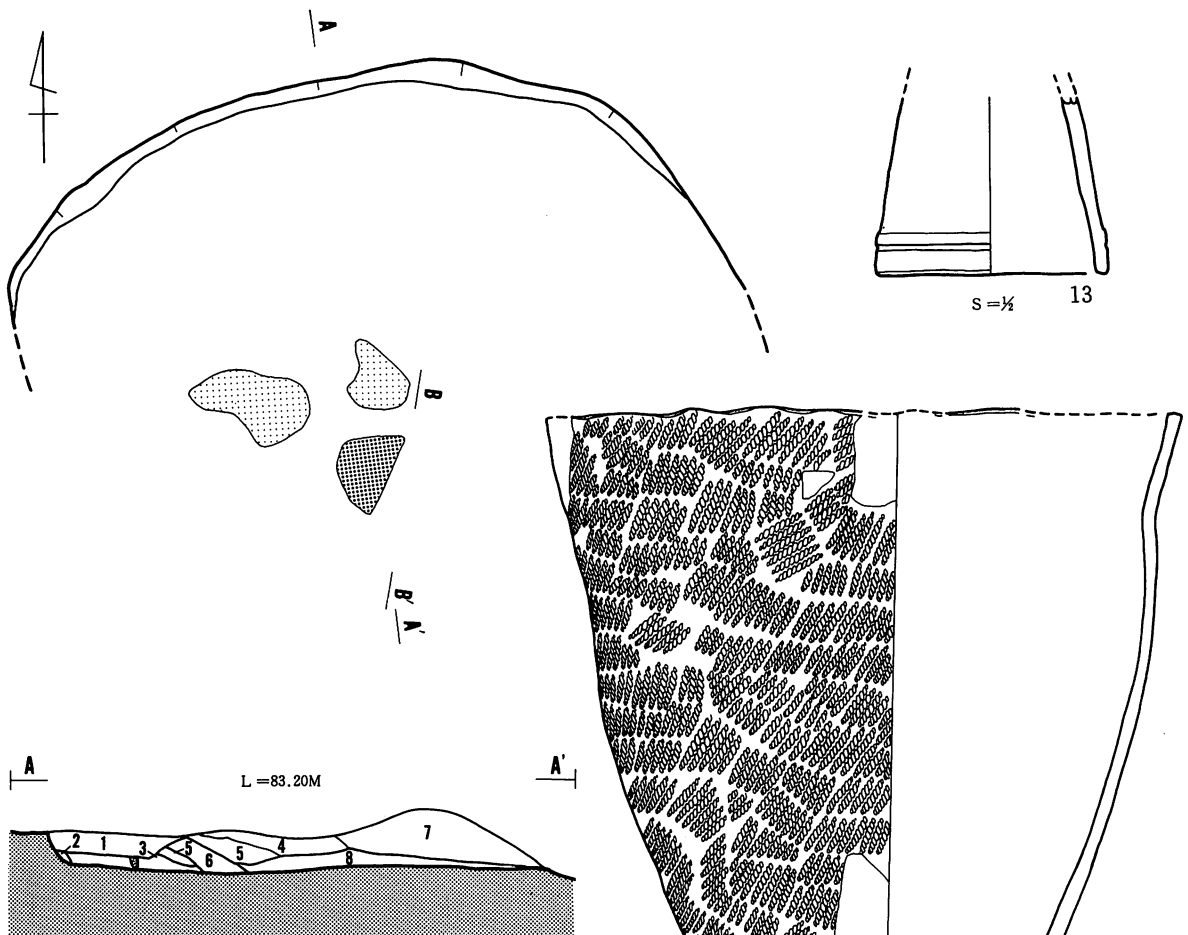
遺構に伴う遺物の出土はないが、形状や規模と構築面、遺構の周辺からの遺物の出土などから推測すると、縄文時代前期前葉に比定される。

## F 16住居跡

### 遺構 (第19図 写真図版12)

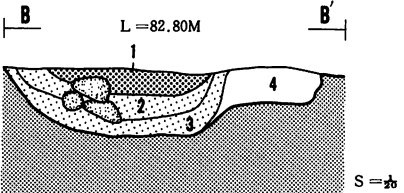
調査区南東部の南東向き斜面のF 16グリットに位置する。F 15住居跡とは北東側で、G 15住居跡とは南西側で隣接する。斜面上の最下位の黒色土下面から検出された。検出面はⅢ層上面である。

平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の約3分の2が欠損しているため形状は明らかでないが、ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は径362cm、壁高は北西壁で22cmである。壁の立上りは全体的にほぼ垂直に立ち上がり、南東側に傾斜して消滅する。床面は固くしまっており、南東側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒色土～黒褐色土のシルトを主体に構成されている。炉は地床炉であり、遺構の北東部よりに位置し、約54×40cmの範囲に焼土が広がっている。柱穴は検出されなかった。



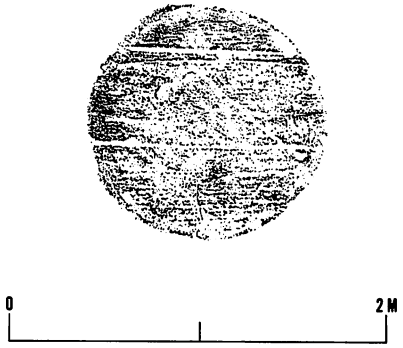
F 6 住居跡 断面

1. 10 Y R ㄨ 黒色 シルト しまりない 木根による損乱
2. 10 Y R ㄨ 黒褐色 シルト しまりない 壁の崩壊土
3. 7.5 Y R ㄨ 黒色 シルト しまりない
4. 10 Y R ㄨ 黒色 シルト しまりない 焼土・木炭混入
5. 10 Y R ㄨ 暗褐色 粘性シルト ややしまっている 木炭多量混入
6. 2.5 Y R ㄨ 極暗赤褐色 粘性シルト ややしまっている
7. 10 Y R ㄨ 黒色 シルト ややしまっている 木炭少量混入
8. 10 Y R ㄨ 黒褐色 シルト ややしまっている 木炭少量混入



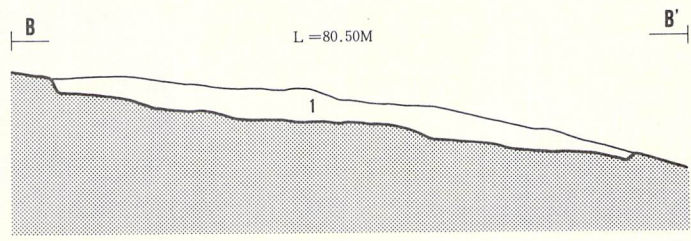
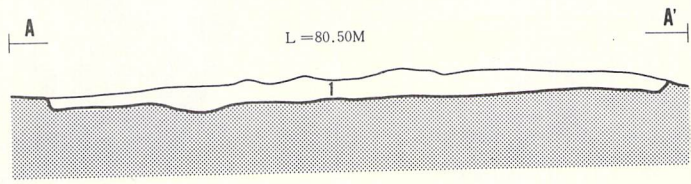
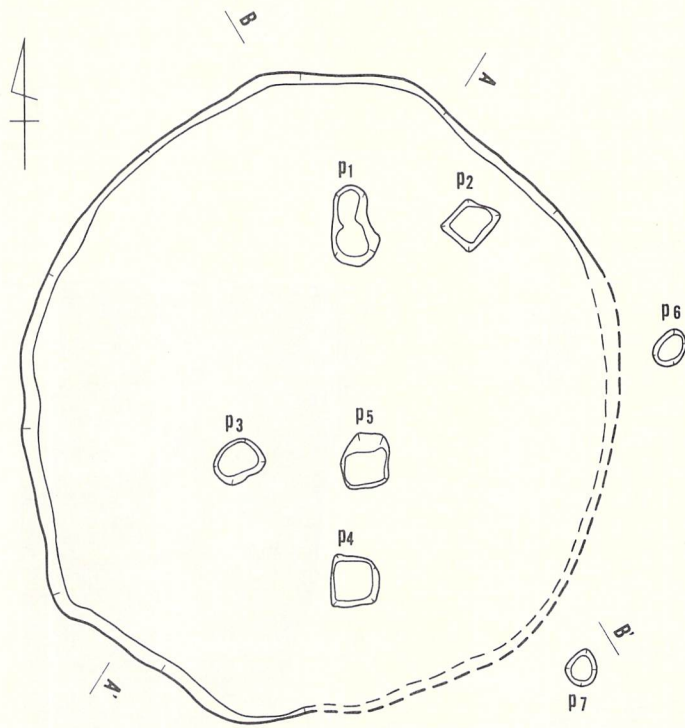
F 6 住居跡 炉断面

1. 5 Y R ㄨ 橙色 焼土
2. 10 Y R ㄨ 黒褐色 シルト
3. 7.5 Y R ㄨ 暗褐色 シルト
4. 10 Y R ㄨ 黒色 シルト

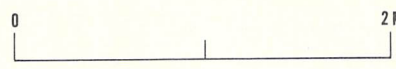


番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
12	F 6 住 Q床面	甕	口縁~底部	単節斜縄文 底部葉脈痕	ミガキ		(2)-VII-3	ほぼ完形	19-12
13	F 6 住 Q床面	高塚	脚部	脚部下端沈線文 外面ミガキ	ミガキ		(2)-V-1		19-13

第17図 F 6 住居跡・出土遺物



F 15住居跡 断面  
 1. 7.5Y R 5/ 黒褐色 シルト

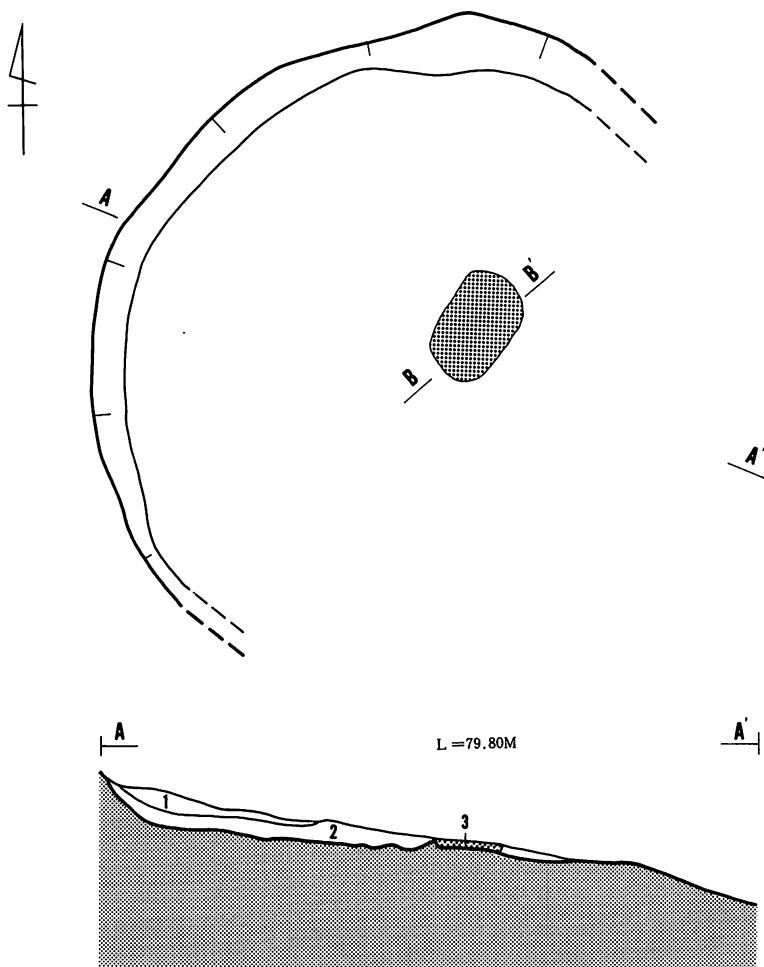


柱穴計測表

No	1	2	3	4	5	6	7
径	26×44	26×24	27×22	28×26	31×27	21×17	20×17
深さ	14	19	18	22	18	10	10

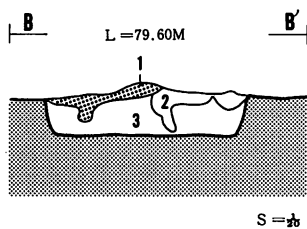
単位cm

第18図 F 15住居跡



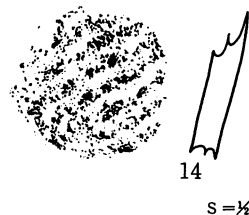
F 16住居跡 断面

1. 7.5Y R<sup>2</sup>/4 黒色 シルト
2. 7.5Y R<sup>2</sup>/4 黒褐色 シルト
3. 5 Y R<sup>2</sup>/4 明赤褐色 焼土



F 16住居跡 炉断面

1. 5 Y R<sup>2</sup>/4 明赤褐色 焼土
2. 10Y R<sup>2</sup>/4 褐色 シルト
3. 10Y R<sup>2</sup>/4 黄褐色 シルト 固くしまっている



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
14	F16住 埋土	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		18-14

第19図 F 16住居跡・出土遺物

#### 遺物 (第19図14 写真図版18)

遺物は、土器片が出土している。14は床面から出土した深鉢形土器の胴部破片であり、地文に単節斜縄文が施文され、胎土には多量の植物性繊維が含まれている。(1)―Ⅰ―1―a に分類される。石器は、フレーク類の小破片が出土している。

#### 時 期

出土遺物から縄文時代前期前葉に比定される。

#### G 5 住居跡

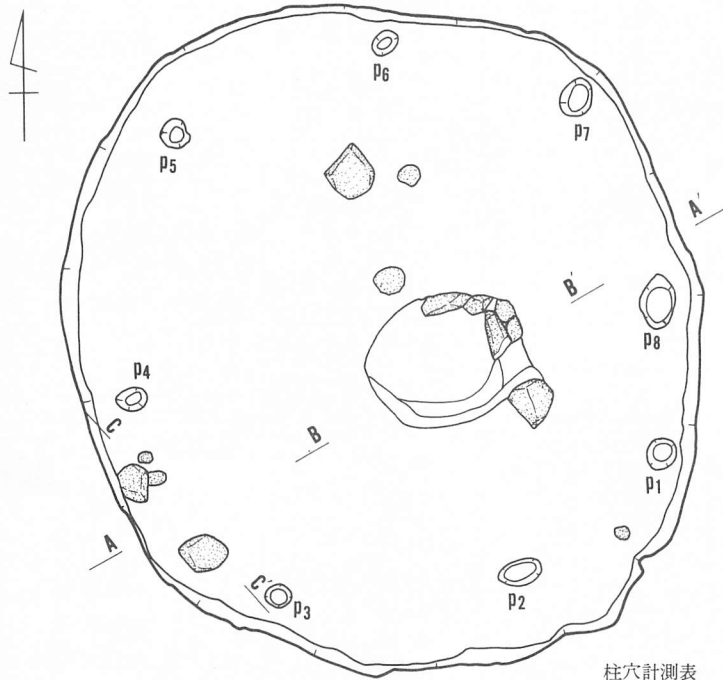
##### 遺構 (第20図 写真図版10)

調査区南西部よりの平坦部のG 5・G 6グリットに位置する。北側斜面上にはF 6住居跡が、北西側にはF 4―2住居跡が隣接する。検出状況は木根により攪乱されており、当初は焼土遺構であろうと考えられたが、石囲炉であることを確認し、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は径 350cm、壁高は約 8～10cmである。壁の立上りは、ほぼ垂直に立ち上がるが、全体に削平されており、構築された当時壁はもっと高かったものと思われる。床面は平坦で、固くしまっている。埋土は暗褐色土のシルトを主体に構成されている。炉は石囲炉であり、遺構の南側よりに位置している。規模は径96×88cmである。炉の埋土は暗褐色土のシルトが主体であり、炭化材が検出されている。柱穴は壁面に沿って 8個検出されており、深さは10cm前後である。埋土は暗褐色土～黄褐色土シルトを主体としている。遺構の南西側部分には特に床面が固くしまっており、壁面近くには大きな礫が約40cmの間隔で置かれていることから、断ち割りにより精査したところ、床面の埋土とは異なる褐色土を検出した。このことから、出入口状の施設と推測される。

##### 遺物 (第21図15～22・58 写真図版18)

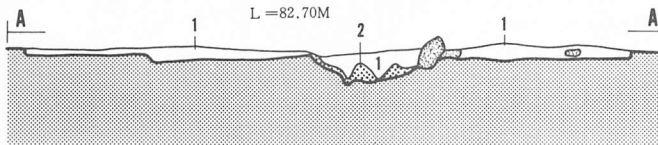
遺構の埋土中から弥生時代初頭の土器が出土している。15は完形の小型壺(袖珍土器)である。地文は無文でミガキ調整されている。口縁部は直立気味に立上り、やや内湾する。頸部に細い棒状工具による沈線が巡り、体部には浅い波状沈線文が施文されている。(2)―Ⅱ―3 に分類される。16は壺形土器の口縁部である。(2)―Ⅱ―1 に分類される。口縁部には 2本の平行沈線文が巡り、横位方向にミガキ調整され、内側に 1本の沈線文が巡る。17～21は鉢形土器である。17～20は口縁部である。17・18は平縁であり、変形工字文と地文に単節斜縄文が施文されている。(2)―Ⅲ―4 に分類される。19・20は波状口縁である。19は(2)―Ⅲ―2 に分類され、20は(2)―Ⅳ―3 に分類される。21は胴部の破片であり、変形工字文と地文に単節斜縄文が施文されている。内面には黒色の付着物がみられる。(2)―Ⅲ―4 に分類される。22・58は、甕形土



柱穴計測表

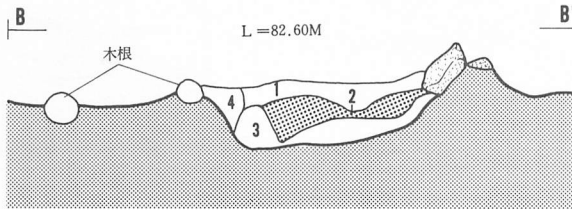
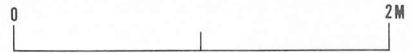
No	1	2	3	4	5	6	7	8
径	17×19	15×24	14×14	18×14	17×14	12×18	22×18	20×30
深さ	10	10	8	12	12	9	12	14

単位cm



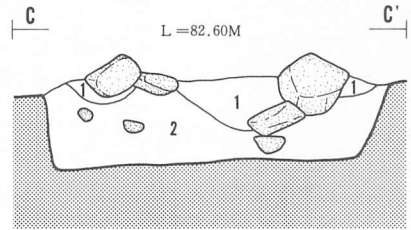
G 5 住居跡 断面

- 1. 7.5Y R 3/4 暗褐色 シルト
- 2. 5 Y R 5/6 明赤褐色 焼土



G 5 住居跡 炉断面

- 1. 10 Y R 3/4 暗褐色 シルト 焼土混入
- 2. 5 Y R 5/6 明赤褐色 焼土
- 3. 7.5Y R 5/6 明褐色 シルト 焼土混入
- 4. 10 Y R 5/6 黄褐色 シルト

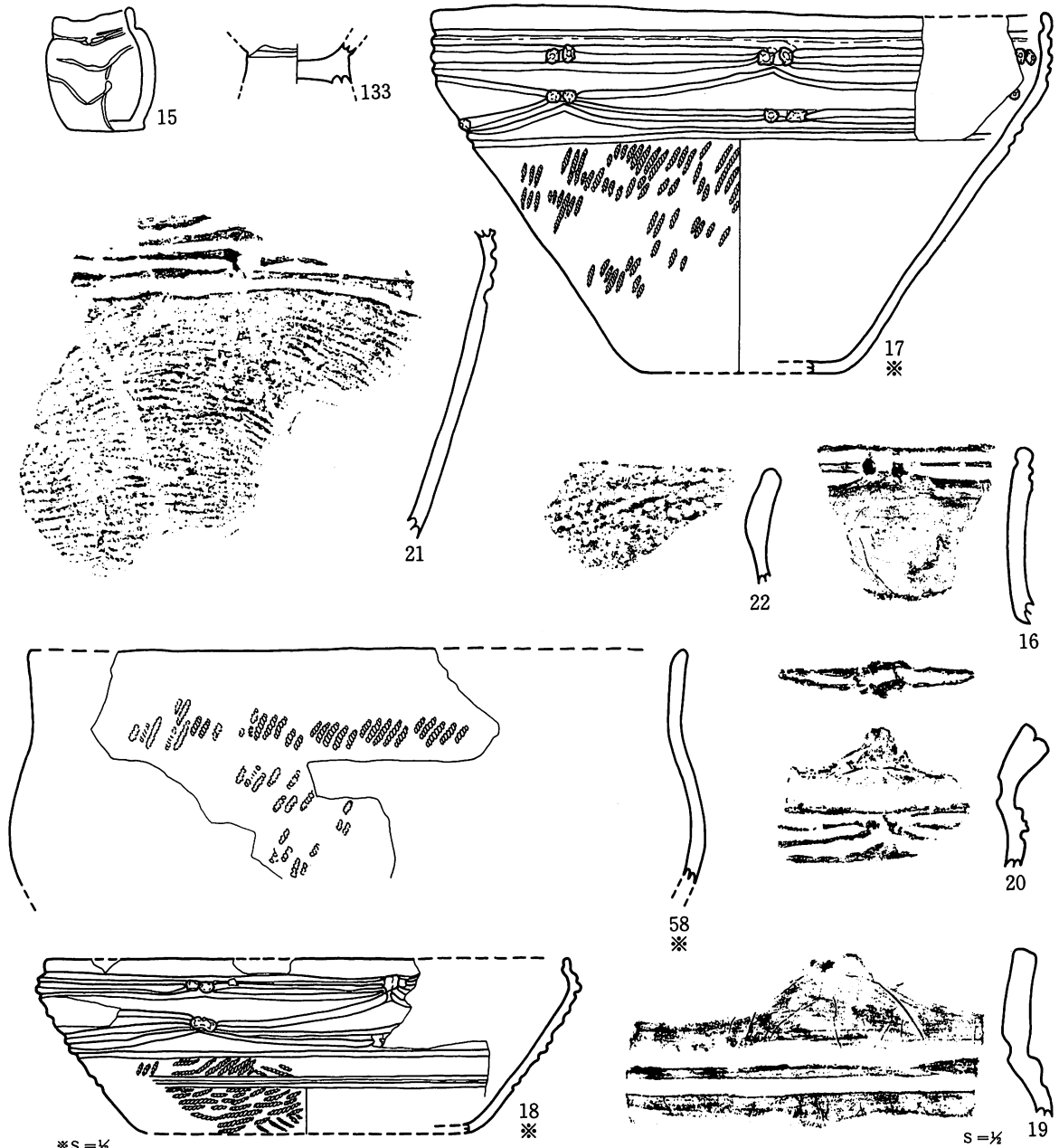


G 5 住居跡 出入口状施設断面

- 1. 10Y R 3/4 褐色 シルト
- 2. 10Y R 5/6 黄褐色 シルト

S=土

第20図 G 5 住居跡



※S=1/2

S=1/2

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
15	G 5住	埋土	壺	口縁部 無文 沈線文	ナデ		(2)-II-2	彩影ア	18-15
16	G 5住E	埋土	壺	口縁部 無文 口縁部平行沈線文 口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-II-1		18-16
17	G 5住	埋土	鉢	口縁部 変形工字文→単節斜縄文 口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-4		18-17
18	G 5住	埋土	鉢	口縁部 変形工字文→単節斜縄文 口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-4		18-18
19	G 5住E	埋土	鉢	口縁部 液状口縁	ミガキ		(2)-III-2		18-19
20	G 5住	埋土	鉢	口縁部 液状口縁 変形工字文	ミガキ		(2)-III-3		18-20
21	G 5住	埋土	鉢	胴部 変形工字文→縄文	ミガキ		(2)-III-4	内面スチ着	18-21
22	G 5住E	埋土	甕	口縁部 口唇部ナデ→縄文	ナデ		(2)-VI-3		18-22
58	G 5住		甕	口縁部 無文→単節縄文	ナデ		(2)-VI-3		18-58
133	G 5住		蓋	くびれ部 くびれ部に沈線	ミガキ		(2)-I-1		18-133

第21図 G 5住居跡・出土遺物



器の口縁部である。口縁部は篋状工具でケズリ調整され、頸部からは単節斜縄文が施文されている。(2)―Ⅵ―3に分類される。133は蓋形土器である。把手から身にかけてのくびれの部分である。形状は円形であり、径が約3cm程度である。把手に身の部分を接合後に剝離した痕跡がみられる。(2)―Ⅰ―1に分類される。

遺構の上位にある木根を中心として、F 6・G 5・G 6グリット付近の埋土Ⅰ層・Ⅱ層から、斜面からの流れ込みなどにより堆積した縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭にかけての鉢・甕などの土器片が多量に出土している。石器は、フレーク類などが出土している。

#### 時 期

出土遺物から、弥生時代初頭に比定される。

#### G 10住居跡

##### 遺構 (第22図 写真図版11)

調査区南東部の平坦面のG 10・G 11グリットに位置する。検出面はⅢ層上面である。

平面形は不整の楕円形を呈する。規模は径360×246cm、壁高は全体に約10cm前後である。壁の立上りは、全体的にほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、固くしまっている。埋土は黒褐色土～明褐色土のシルトを主体に構成されている。埋土には、フレークやチップ類などの小破片が多量に含まれている。炉は石囲炉で、中央部からやや西よりに位置する。炉の埋土は暗褐色土のシルトが主体であり、約60×50cmの範囲に焼土が広がり、少量の木炭が検出されている。柱穴は5個検出され、深さは20cm前後である。埋土は褐色土～明黄褐色土のシルトが主体である。

##### 遺物 (第22図23 写真図版19)

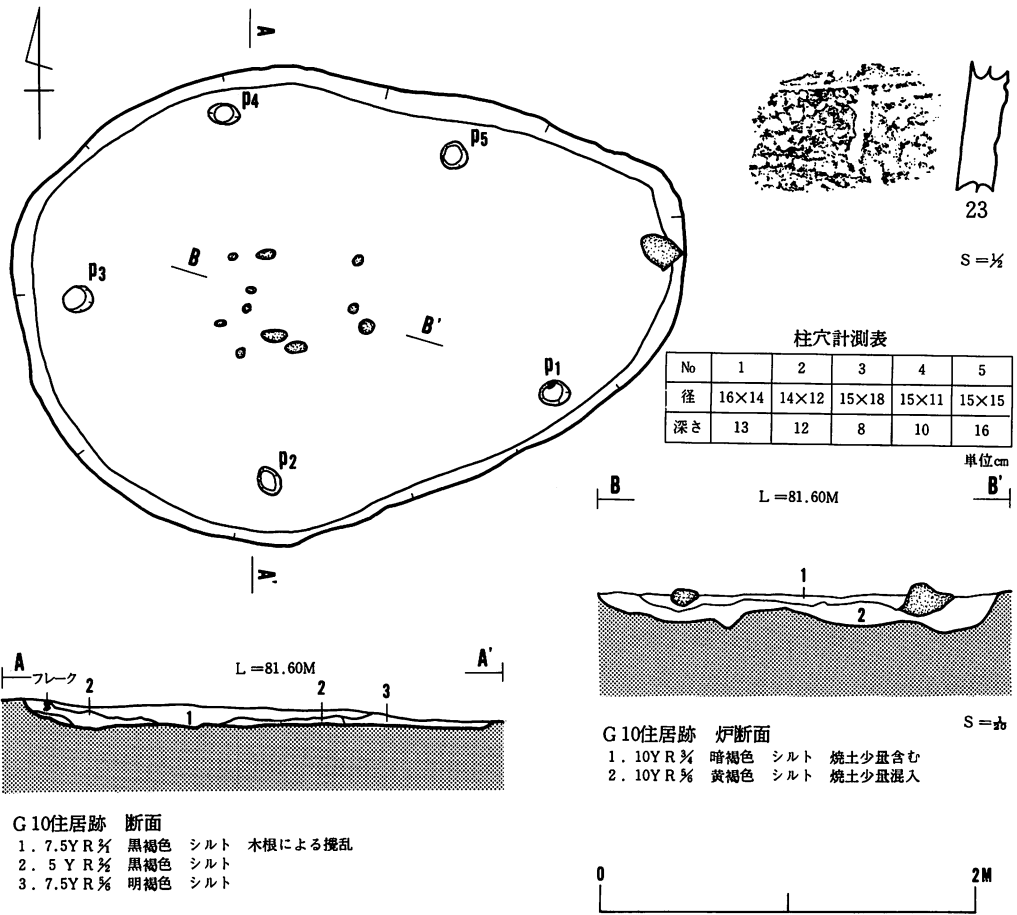
遺物は土器片と石器が出土している。

土器：23は床面から出土した深鉢形土器の口縁部であり、地文に綾絡文が施文されている。(1)―Ⅰ―2―aに分類される。

石器：埋土1層から41片、2層から77片、床面から19片のフレークやチップ類などの小破片が多量に出土している。

#### 時 期

遺構に伴う遺物が大木6式に比定され、縄文時代前期後葉と思われる。



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
23	G10住	床直	深鉢 口縁部	綾結文	大木6式	ナデ	(1)-I-2-a		19-23

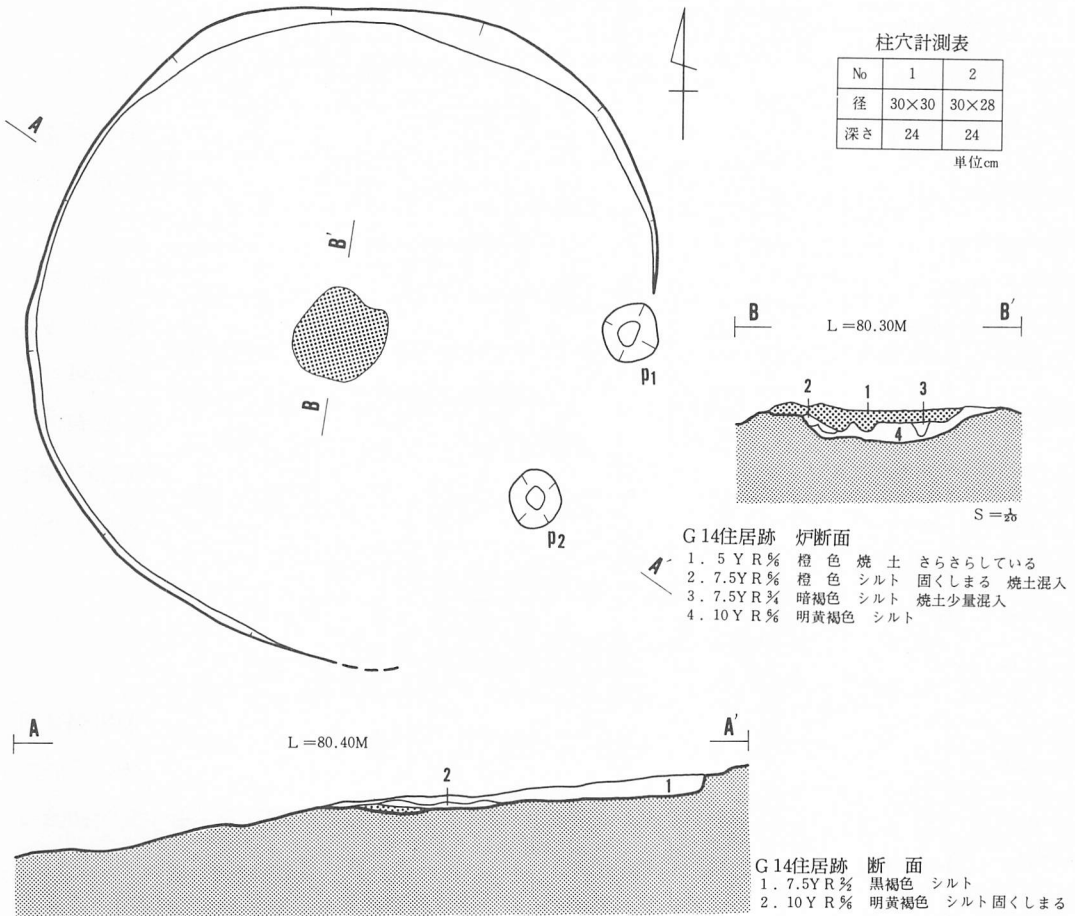
第22図 G10住居跡・出土遺物

G 14住居跡

遺構 (第23図 写真図版12)

調査区南東部の南東向き斜面下部のH 14・G 14・G 15グリットに位置する。G 15住居跡とは北東側で隣接する。斜面上黒色土の堆積状況の把握を目的にトレンチをいれたところ、住居跡のプランを示すレンズ状の黒色土が、斜面下部からは焼土が検出された。検出面はⅢ層上面である。

平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の約3分の1が欠損しているため形状は明らかではないが、ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は径348cm、壁高は北西壁で15cmである。壁の立上りは全体的にほぼ垂直に立ち上がり、南東側に傾斜して消滅する。埋土は黒褐色土～明黄褐色のシルトを主体に構成されている。床面は固くしまっており、南東側に向かって緩やか



第23図 G

に傾斜している。遺構の北西側に木根があり、埋土に攪乱の痕跡が認められる。炉は地床炉で、ほぼ中央部に位置するものと思われ、約40×40cmの範囲に焼土が広がっている。木炭が混入している。柱穴は2個検出されている。深さは24cm前後であり、埋土は褐色土のシルトが主体である。

#### 遺物

遺構の周辺及び埋土上位からは胎土に植物性繊維を含む縄文土器が出土しているが、いずれも脆弱であり、拓本に耐えうるものはない。石器はフレーク類のほかに、床面から小粒の水晶が出土している。

#### 時期

出土遺物、遺構の規模や形態と構築面などから、縄文時代前期前葉に比定される。

### G 15住居跡

#### 遺構（第24図 写真図版13）

調査区南東部の南東向き斜面下部のG 15・G 16グリットに位置する。F 15住居跡とは北側で、G 14住居跡とは南西側で、F 16住居跡とは北東側で隣接する。住居跡のプランを示すレンズ状の黒色土が、斜面下部からは焼土が検出された。検出面はⅢ層上面である。

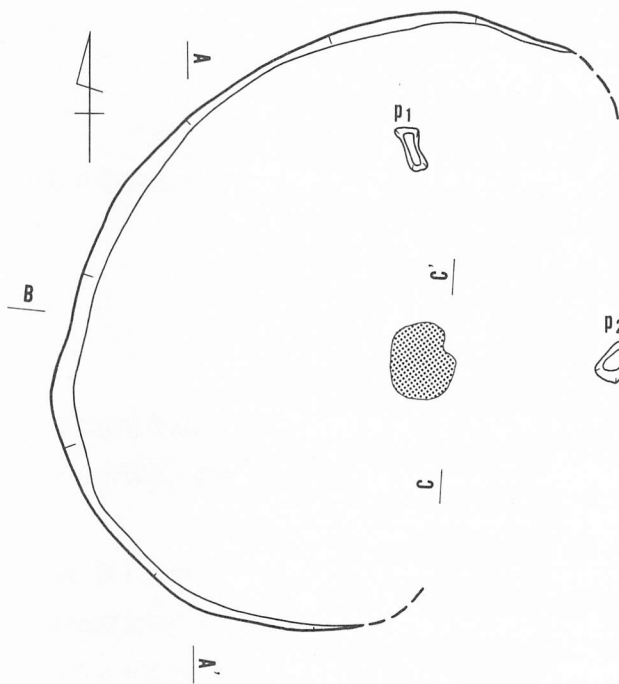
平面形は斜面上にあるため流失し、遺構の約2分の1が欠損しているため形状は明らかではないが、不整の楕円形を呈するものと思われる。規模は径334cm、壁高は北西壁で23cmである。壁の立上りは全体的にほぼ垂直に立ち上がり、南東側に傾斜して消滅する。埋土は黒褐色土のシルトを主体に構成されている。床面は固くしまっており、南東側に向かって緩やかに傾斜している。炉は地床炉で、遺構の南東部よりに位置するものと思われ、約70×70cmの範囲に焼土が広がっている。柱穴は2個検出されており、深さはそれぞれ4cmであり、埋土は褐色土のシルトが主体である。

#### 遺物（第24図24・25 10・11 写真図版19）

遺物は、土器と石器が出土している。

土器：埋土の床面から24・25の深鉢形土器の胴部破片が出土しており、地文に単節斜縄文が施文され、胎土には多量の植物性繊維が含まれている。地文と胎土などから同一個体の可能性がある。(1)―Ⅰ―1―aに分類される。その他、埋土中から縄文時代晩期から弥生時代初頭の甕形土器や鉢形土器の破片が出土している。

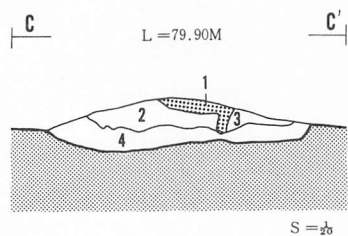
石器：10・11は石鏃である。10は有茎鏃である。両端部から中茎の先端部へ直線的にすぼまる凸基有茎鏃であり、身部が二等辺三角形を呈する。(1)―Ⅱ―1に分類される。11は全体が棒状で両先端が尖る小型の尖頭器状を呈する有茎鏃である。(1)―Ⅱ―2に分類される。その他、



柱穴計測表

No	1	2
径	24×12	23×15
深さ	24	4

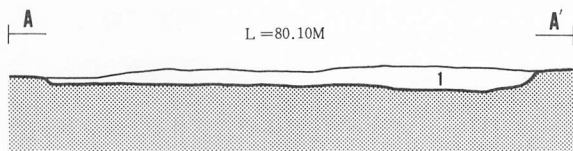
単位cm



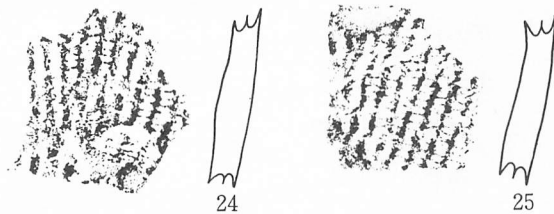
S=1/2

G15住居跡 炉断面

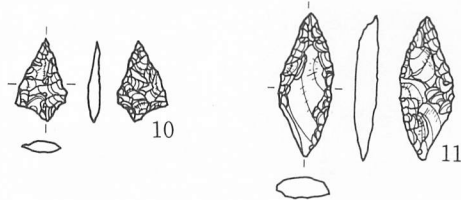
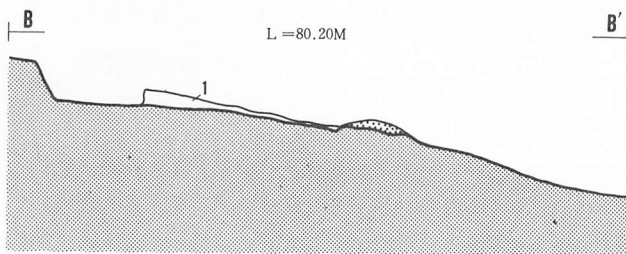
1. 5 Y R % 橙色 焼土 さらさらしている
2. 7.5 Y R % 橙色 焼土 固くしまる
3. 10 Y R % 黄橙色 シルト 固くしまる
4. 10 Y R % 明黄褐色 シルト



G15住居跡 断面  
1. 7.5 Y R % 黒褐色 シルト



S=1/2



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
24	G15住 埋土	深鉢	胴部	同一個体?	ナデ	繊維多	(1)-I-1-a		19-24
25	G15住 埋土	深鉢	胴部		ナデ	繊維多	(1)-I-1-a		19-25

番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)			重量(g)	石質	特徴・備考	分類	写真図版
			長さ	幅	厚さ					
10	G15住	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.7	チャート		(1)-II-1	19-10
11	G15住	石鏃	3.9	1.5	0.6	2.95	凝灰質硬質泥岩	尖頭器状を呈する	(1)-II-2	19-11

第24図 G15住居跡・出土遺物

埋土から22片のフレーク、チップ類の小破片が多量に出土している。

#### 時 期

床面からの出土遺物、遺構の規模や形態と構築面などから、縄文時代前期前葉に比定される。

#### H 11住居跡

##### 遺構 (第25図 写真図版13)

調査区南東部の平坦部のH 11・H 12グリットに位置する。検出状況は、G 11溝跡の精査を行っていた際に、H 11・H 12グリットの溝跡の壁面に外側に膨らみを持つ埋土や焼土が検出されたことなどから、住居跡であることを確認した。検出面はⅢ層上面である。

平面形は不整の楕円形を呈する。壁は全体的に緩やかに内傾して立ち上がる。規模は径 340×280cm、壁高は20cmである。後世になってG 11溝跡が構築されたため北西部と北東部壁が破壊されている。さらに畑地造成の際に削平されており、構築された当時壁はもっと高かったものと思われる。床面は平坦で、固くしまっている。埋土は黒褐色土～黄褐色土のシルトが主体である。炉は地床炉であり、遺構の中央部やや南東側よりに位置し、約80×34cmの範囲に焼土が広がっている。柱穴は3個検出され、深さは4～26cmである。埋土は暗褐色土～黄褐色土のシルトが主体である。

##### 遺物 (第25図26 12 写真図版19)

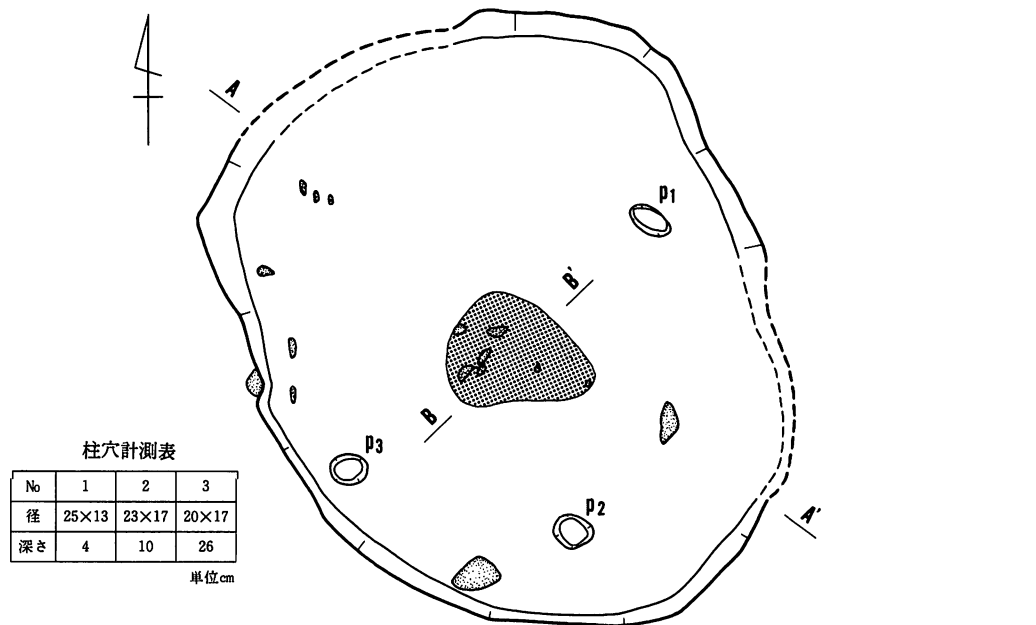
遺物は、土器片・剥片石器などが出土している。

土器：埋土上位からは縄文土器や弥生土器などが多く出土しているが、土器片は脆弱である。26は埋土下位の炉跡付近から出土しており、胎土には植物性繊維が混入し、地文に単節斜縄文が施文されている。(1)―I―1―a に分類される。

石器：12は2側縁に刃部が作り出されている不定形石器である。(6)―II―2 に分類される。その他、フレーク類が出土している。

#### 時 期

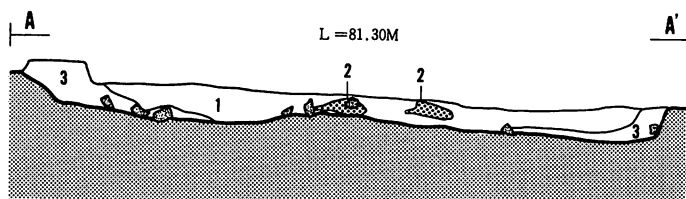
出土遺物、遺構の規模や形態と構築面などから縄文時代前期前葉に比定される。



柱穴計測表

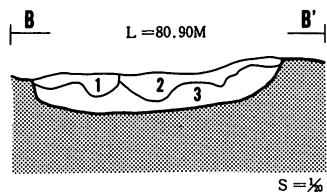
No	1	2	3
径	25×13	23×17	20×17
深さ	4	10	26

単位cm



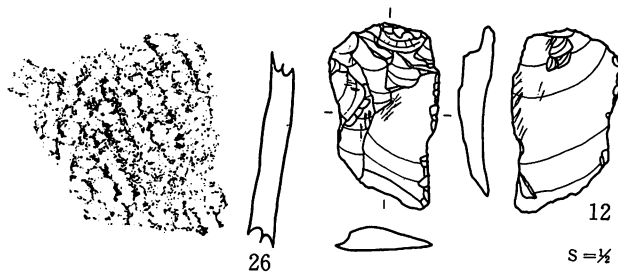
H11住居跡 断面

- 1. 10Y R 黒褐色 シルト
- 2. 5 Y R 極暗赤褐色 焼土
- 3. 10Y R 黄褐色 シルト 固くしまっている



H11住居跡 炉断面

- 1. 7.5Y R 暗褐色 シルト 焼土混入
- 2. 5 Y R 明赤褐色 焼土
- 3. 10Y R 黄褐色 シルト 固くしまる



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
26	H11住	埋土	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナテ	繊維多	(1)-I-1-a	19-26

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
12	H11住	不定形	4.9	2.9	0.7	8.6	凝灰質硬質泥岩		(6)-II-2	19-12

第25図 H11住居跡・出土遺物

## 2. 土坑・炭窯跡

土坑・炭窯跡は、調査区中央部よりの平坦部となる南西側斜面沿いの地区で4基、北東部に1基検出された。出土遺物などから縄文時代の土坑が1基、古代以降の炭窯跡が5基である。

### H 8 土坑

遺構 (第26図 写真図版14)

調査区のほぼ中央よりの南西側斜面沿いのH 8グリットに位置する。検出面はⅢ層上面で、木根の西側で検出された。

形状は、平面形が不整の楕円形、断面形が浅いU字形を、底面は緩やかな丸みを呈する。壁の立上りは、全体的に緩やかに外傾する。規模は、開口部径178×151cm、底面146×104cm、深さ48cmである。埋土は黒色土で構成されている。

遺物 (第26図27・28 13・14・15 写真図版19)

遺構の開口部付近からは剥片石器が、底面近くからは縄文時代の土器片が出土している。

土器：27は深鉢形土器の口縁部であり、地文に単節斜縄文が施文されている。(1)―Ⅰ―2―aに分類される。28は深鉢形土器の胴部破片であり、地文に単節斜縄文が施文され、器表面には丹塗りの痕跡がみられる。(1)―Ⅲ―3に分類される。

石器：13は楕円形状の縁辺部に刃部を作り出し、頂部と思われる部分には突起状のつまみ部を持っている。(6)―Ⅲ―2に分類される。14は不整な長方形の1縁辺部に刃部を作り出している。15は不整形の1縁辺部に刃部を作り出している。(6)―Ⅰ―1に分類される。いずれも不定形石器である。

### 時 期

出土遺物や形態から縄文時代に比定される。

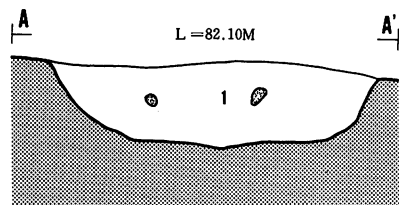
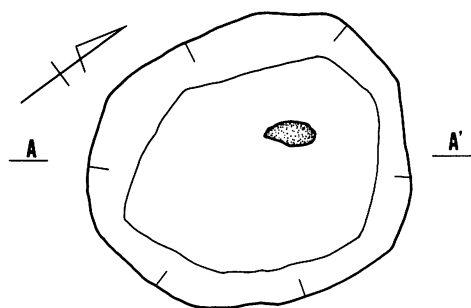
### C 13炭窯跡

遺構 (第27図 写真図版14)

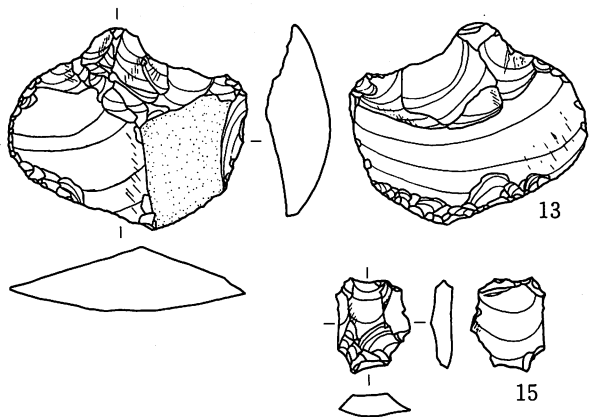
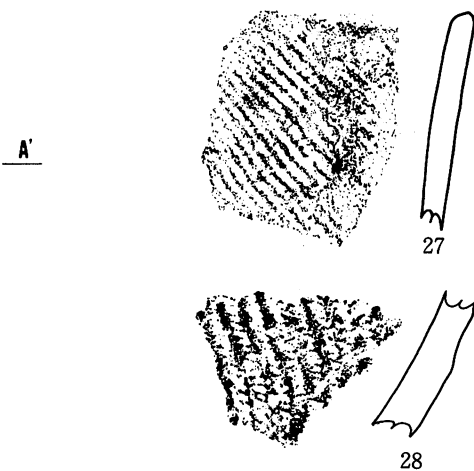
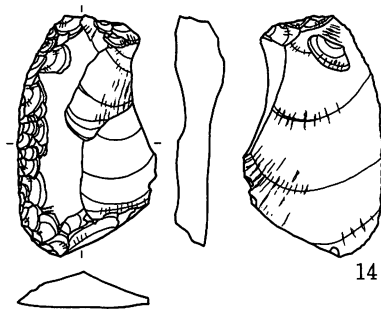
調査区のほぼ中央より北東側平坦部のC 13からC 14グリットに位置する。検出面はⅡ層下部下部である。

形状は、平面形が不整の隅丸長方形、断面形が浅い箱形を、底面はやや軟らかく、緩やかな凹凸を呈する。壁は全体的に垂直気味に立上がる。規模は、開口部径348×158cm、底面 328×137cm、深さ18cmである。埋土は黒色土のシルトで構成されている。埋土中には、ナラなどの





H 8 土坑断面  
1. 7.5YR $\frac{1}{2}$  黒色 シルト



S = 1/2

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
27	H 8 土坑 埋土	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナテ		(1)-I-2-a		19-27
28	H 8 土坑 埋土	深鉢	胴部	単節斜縄文	ナテ		(1)-III-3	外面磨り	19-28

番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)			重量(g)	石質	特徴・備考	分類	写真図版
			長さ	幅	厚さ					
13	H 8 土坑	不定形	5.3	6.2	1.7	43.25	珪質泥岩	石匙状の形状 つまみ部の快人が弱い	(6)-III-2	19-13
14	H 8 土坑	不定形	6.4	3.7	1.3	26.25	凝灰質硬質泥岩		(6)-I-1	19-14
15	H 8 土坑	不定形	2.3	1.9	0.5	2.5	珪質泥岩		(6)-I-1	19-15

第26図 H 8 土坑・出土遺物

炭化材が堆積している。底面や底面近くの壁は、焼土化している。

#### 遺物

土器：石器などの出土遺物はない。埋土から出土した炭化材は、樹種鑑定の結果ナラである。

#### 時期

規模や形状、炭化材の種類など、G 7-1 炭窯跡と共通する点が多いことから、同時期の遺構と思われる。

#### G 7-1 炭窯跡

##### 遺構 (第28図 写真図版14)

調査区ほぼ中央よりの西南端平坦部のG 7グリットに位置する。検出面はII層の除去中に検出された。

形状は、平面形が不整の隅丸方形、断面形が浅い箱形を呈する。底面は固くしまっており、緩やかな凹凸がある。壁は全体が垂直気味に立上り、開口部付近ではやや内湾する。規模は、開口部径112×116cm、底面90×98cm、深さ24cmである。埋土は黒褐色土～黒色土シルトを主体に構成されているが、上位から中位にナラなどの炭化材が堆積している。底面及び底面付近の壁は、焼成を受けた跡がみられる。

##### 遺物 (第28図29・16 写真図版19)

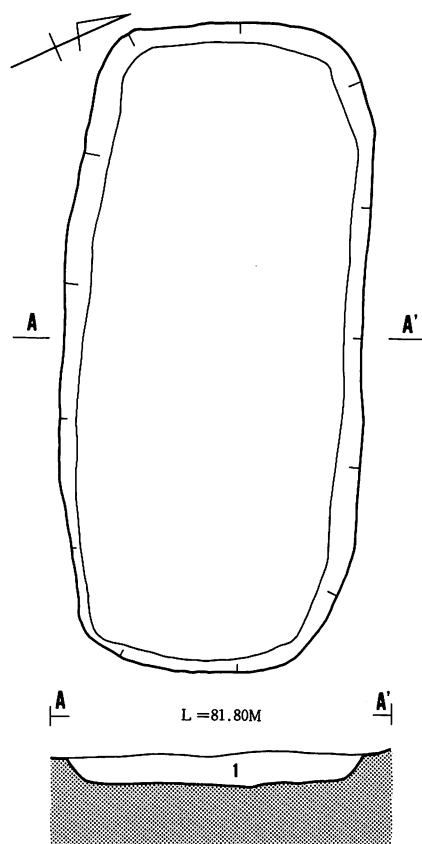
遺構の底面近くから須恵器片や石器などが出土している。

須恵器：29は長頸瓶と思われる須恵器の底部片であり、回転糸切り無調整である。また、埋土から土師器片などが出土している。さらに、埋土上位からは、流れ込みによると思われる縄文土器片や弥生土器片なども出土しているが、いずれも脆弱である。

石器：16は長軸に対して縦位の部分が擦り減っている磨石であり、全体の約2分の1ほどが欠損しているものと思われる。(10)に分類される。埋土から出土している炭化材は、樹種鑑定の結果ナラである。

#### 時期

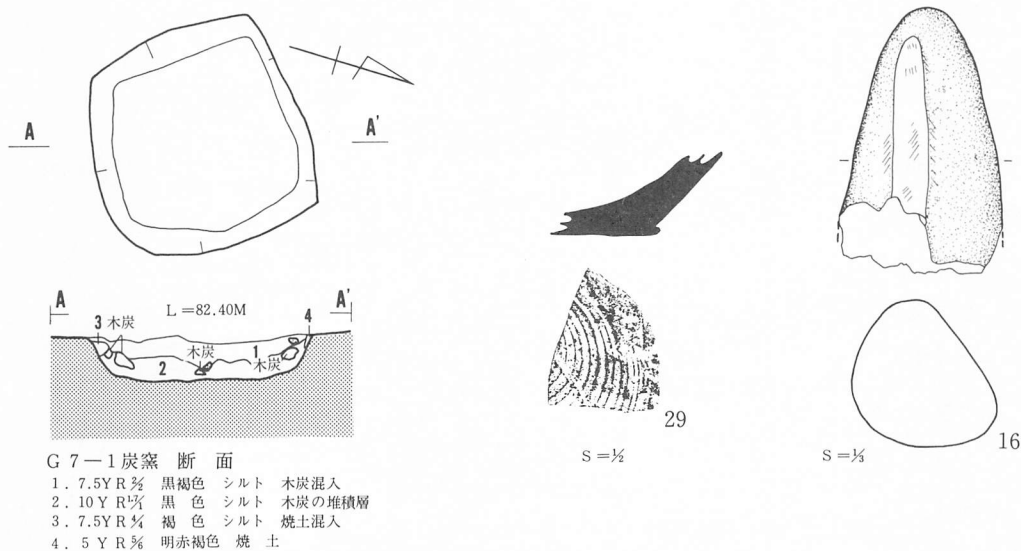
遺構の底面近くから須恵器片が出土しており、古代以降に構築されたものと思われる。



C13炭窯 断面

1. 10Y R7/2 黒色シルト 焼土・木炭混入

第27図 C13炭窯跡



- G 7-1 炭窯 断面
1. 7.5Y R% 黒褐色 シルト 木炭混入
  2. 10Y R% 黒色 シルト 木炭の堆積層
  3. 7.5Y R% 褐色 シルト 焼土混入
  4. 5Y R% 明赤褐色 焼土

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
16	G 7-1 炭窯	磨石	(10.5)	6.5	5.7	478.0	両輝石安山岩	約1/2欠落	(10)	19-16

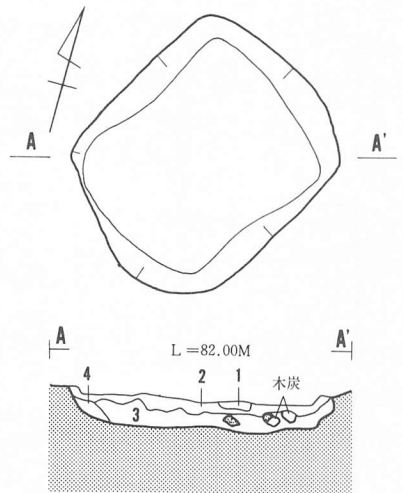
第28図 G 7-1 炭窯跡

G 7-2 炭窯跡

遺構 (第29図 写真図版14)

調査区ほぼ中央よりの南西側斜面沿いのG 7・H 7グリットに位置する。検出面はⅢ層上面である。

形状は、平面形が不整の隅丸方形、断面形が浅い箱形である。底面は固くしまっており、緩やかな凹凸を呈する。壁は全体が垂直気味に立上り、開口部付近ではやや内湾する。規模は、開口部径 114×140cm、底面97×113cm、深さ22cmである。埋土は黒褐色土～黒色土シルトを主体に構成されているが、上位から中位にナラなどの炭化材が混入している。底面及び底面付近の壁は、焼成を受けた跡がみられる。



- G 7-2 炭窯 断面
1. 10Y R% 明黄褐色 砂質土
  2. 7.5Y R% 黒褐色 シルト 木炭混入
  3. 10Y R% 黒色 シルト 木炭の堆積層 焼土混入
  4. 7.5Y R% 明褐色 焼土

第29図 G 7-2 炭窯跡

遺 物

土器・石器などの出土遺物はない。埋土から出土した炭化材は、樹種鑑定の結果ナラである。

## 時期

規模や形状、炭化材の種類など、G 7—1 炭窯跡と共通する点が多いことから、同時期に相当するものと思われる。

## H 6 炭窯跡

遺構（第30図 写真図版14）

調査区やや西南端よりの斜面沿いのH 6グリットに位置する。検出面はⅢ層上面である。

形状は、平面形が不整の隅丸方形、断面形が浅い箱形である。底面は固くしまっており、緩やかな凹凸を呈する。壁は全体が垂直気味に立上り、開口部付近ではやや内湾する。規模は、開口部径 102×90cm、底面84×80cm、深さ22cmである。また、焼成を受けたと思われる部分をいれると、開口部径は 180×140cmとなる。埋土は黒褐色土～黒色土シルトを主体に構成されているが、上位から中位にナラなどの炭化材が混入している。開口部及び底面、底面付近の壁は、焼成を受けた跡がみられる。

## 遺物

埋土上位からは、周辺からの流れ込みと思われる縄文土器片や弥生土器片、古代の土師器片などが出土しているが、いずれも脆弱で拓本に耐えられるものはない。埋土中位から出土している炭化材は、樹種鑑定の結果ナラである。

## 時期

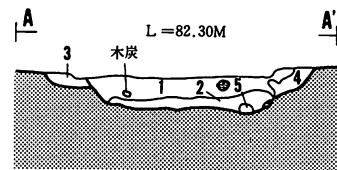
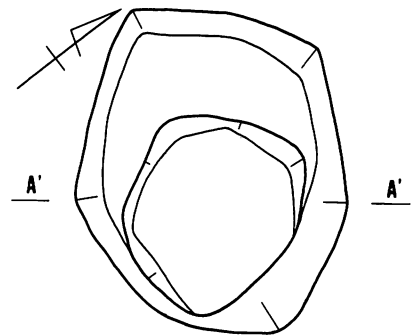
遺物の種類、規模や形状、炭化材の種類など、G 7—1 炭窯跡と共通することから、同時期に相当するものと思われる。

## H 7 炭窯跡

遺構（第31図 写真図版14）

調査区ほぼ中央よりの南西側斜面沿いのH 7グリットに位置する。検出面はⅢ層上面である。

形状は、平面形が不整の隅丸方形、断面形が浅い箱形である。底面は緩やかな凹凸を呈して



### H 6 炭窯 断面

1. 7.5Y R 黒褐色 シルト 木炭混入
2. 10Y R 黒色 シルト 木炭の堆積層
3. 10Y R 褐色 シルト
4. 7.5Y R 明赤褐色 シルト
5. 10Y R 明黄褐色 シルト

第30図 H 6 炭窯跡

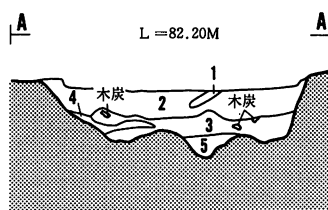
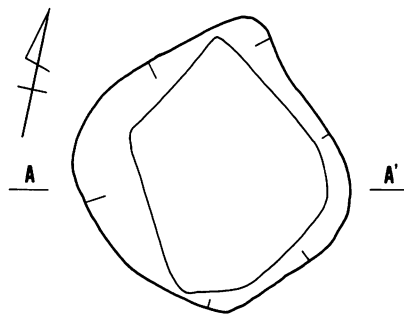
いる。壁の立上りは、全体的に直立する。規模は、開口部径130×124cm、底面98×107cm、深さ34cmである。埋土は黒色土～黒褐色土シルトを主体に構成されているが、上位から中位にナラなどの炭化材が混入している。開口部及び底面、底面付近の壁は、焼成を受けた跡がみられる。

### 遺物

土器・石器などの出土遺物はない。埋土から出土した炭化材は、樹種鑑定の結果ナラである。

### 時期

遺物の種類、規模や形状、炭化材の種類など、G7-1炭窯跡と共通する条件が多いことから、同時期に相当するものと思われる。



- H7炭窯断面
1. 10 Y R % 明黄褐色 砂質土
  2. 10 Y R % 黒色 シルト 木炭混入
  3. 7.5 Y R % 黒褐色 シルト 木炭の堆積層
  4. 10 Y R % 褐色 シルト
  5. 10 Y R % 黄褐色 シルト 焼土少量混入

第31図 H7炭窯跡

## 3. 溝跡

溝跡は4条検出されている。調査区ほぼ中央の斜面下部に位置する土塁状の土盛を挟んだ形で、北東から南西方向に伸びる溝跡が3条、中央部平坦面の南東端に北西から南西に伸びる溝跡が1条である。

### B11溝跡

遺構 (第32図 写真図版15)

調査区ほぼ中央の斜面下部に位置する土塁状遺構の西側で検出された。B11グリットのほぼ中央部に端を發してC9グリットまで北東から南西方向に伸びる溝跡である。土塁状遺構を挟んで、B12-1・B12-2溝跡とほぼ平行している。検出面はⅢ層上部であるが、木根などで攪乱されていた。

規模は、全長は約13m、幅は50～70cm、深さ20～30cmである。断面形はU字形を、底面は緩やかに丸みを呈する。壁の立上りは、やや直立気味に立上りながら緩やかに外反する。埋土は褐色土～暗褐色土のシルトを主体としている。埋土の状況からは、水が常時流れたような砂質土や泥質土などの痕跡は観察されなかった。しかし、大量の小礫や流れ込みと思われる遺物が混入している。遺構は、さらに北東側の調査区外に延びている。

遺物 (第33図30・第34図17～19 写真図版19)

埋土中からは、斜面からの流れ込みと思われる縄文土器片や石器類が少量出土している。

土器：30は、深鉢形土器の胴部の一部と思われる。植物性繊維が多量に含まれ、地文に撚糸文が施文される。(1)―I―1―a に分類される。その他、土器片が出土しているが脆弱であり、拓本に耐えられるものは極めて少ない。

石器：17は楕円形状の横型石匙であり、(3)―II に分類される。18は縦長であり、刃部を作り出さずに2側縁に微細な調整痕が認められる。(6)―I―2 に分類される。19は2側縁に刃部を作り出している。(6)―II―2 に分類される。いずれも不定形石器である。

#### 時期

調査区ほぼ中央の斜面下部に位置する土塁状遺構の土盛を挟んだ形で、その上部から検出され、北東から南西方向に延びている。この遺構は、二子城跡の城館跡に伴う遺構の一部と考えられる。

#### B 12―1 溝跡

##### 遺構 (第32図 写真図版15)

調査区ほぼ中央の斜面下部に位置する土塁状遺構の東側に検出された。B 12グリットに端を発してF 9グリットまで北東から南西方向に延びる溝跡である。土塁状遺構を挟んで土盛西側にあるB 11溝跡と、さらに西側に隣接するB 12―2 溝跡とほぼ平行している。検出面はⅢ層上部であるが、木根などで攪乱されていた。

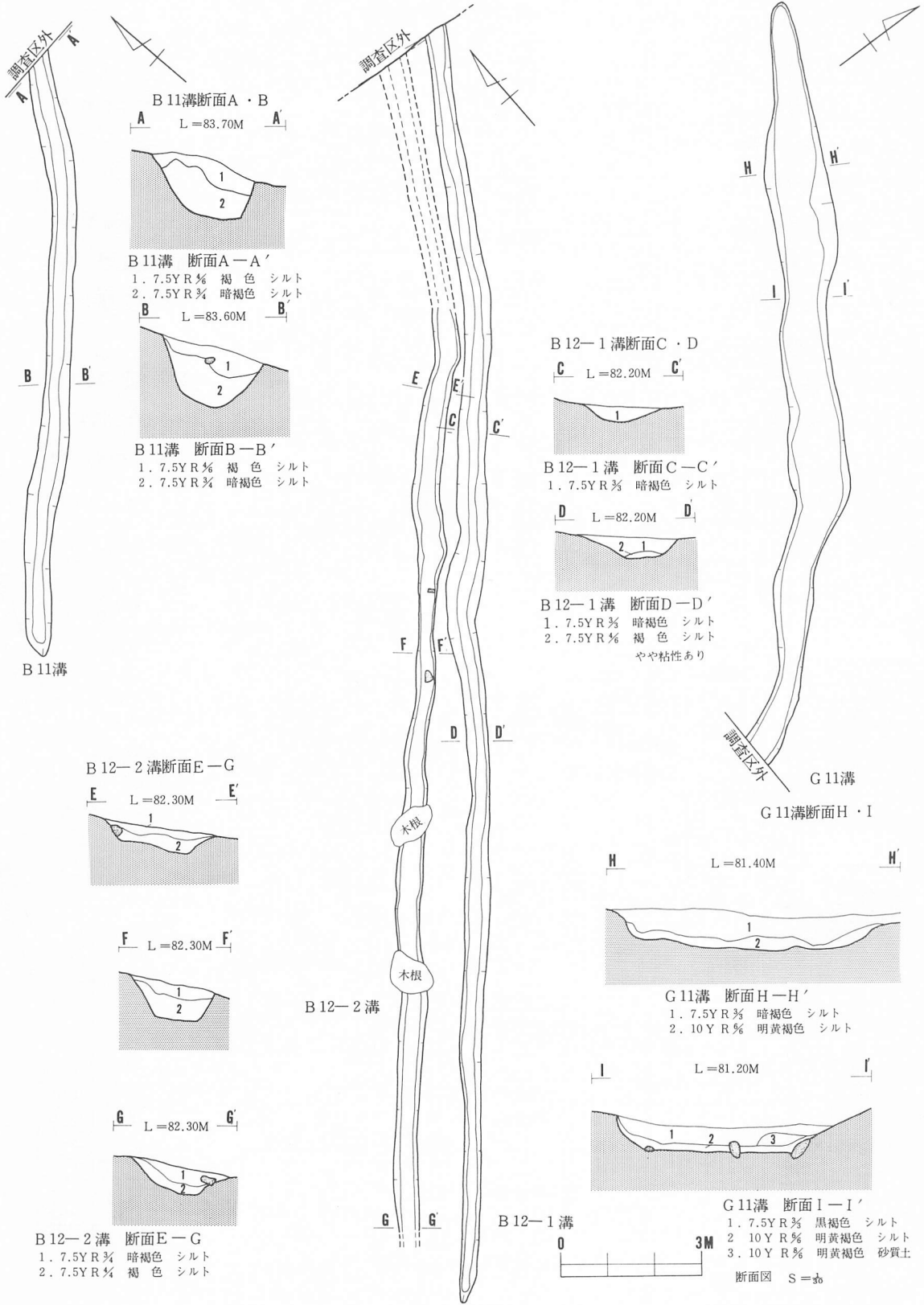
規模は、全長は約28m、幅は40～60cm、深さ10～20cmである。断面形は北東部では浅い皿形から南西方向にかけてはU字形を呈し、南西部のF 9グリットで終わる。底面は全体的に緩やかな丸みを呈する。壁の立上りは、緩やかに外反する。埋土は暗褐色土シルトを主体としており、流れ込みによる小礫や土器片が混入している。埋土の状況からは、水が常時流れたような砂質土や泥質土などの痕跡は観察されなかった。遺構は、B 12区からさらに北東側の調査区外へと延びている。

##### 遺物 (第33図31図・第34図20 写真図版19)

埋土からは、斜面からの流れ込みと思われる縄文土器片や石器類が少量出土している。

土器：31は深鉢形土器の底部に近い胴部の一部と思われ、植物性繊維が多量に含まれ、地文に単節斜縄文が施文されている。(1)―I―1―a に分類される。その他、土器片が出土しているが脆弱であり、拓本に耐えられる状態の物は少ない。

石器：20は篋状をした不定形石器であり、搔器として使用されたものと思われる。片面加工によって全体の形が短冊形に作り出されているが、やや捻じれた形をしている。(6)―III―1 に分類される。



第32図 溝跡

時 期

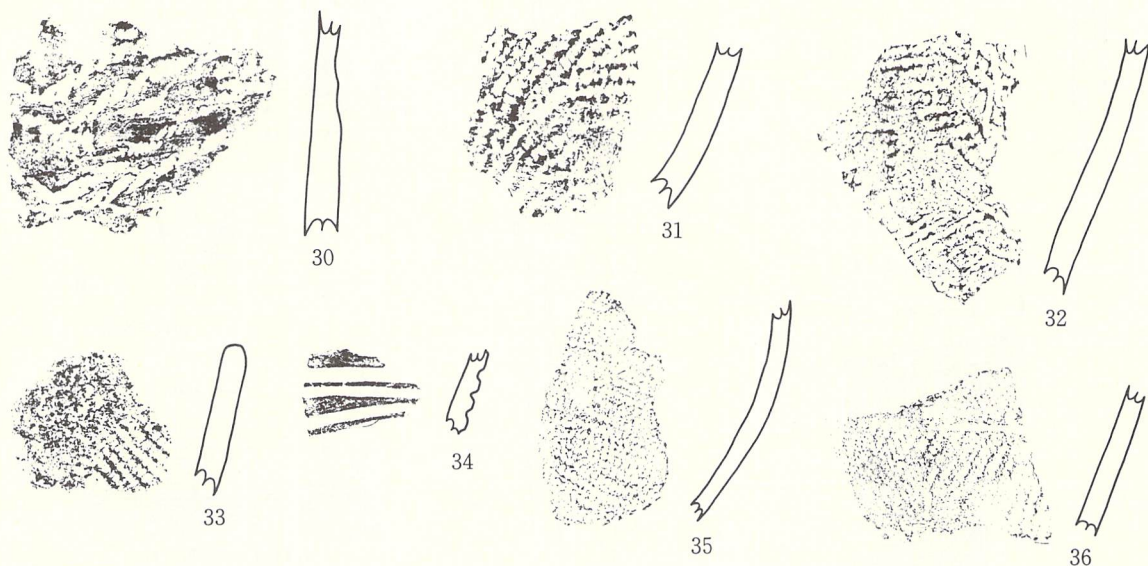
B 11溝跡と同様の目的により構築されたものと思われ、同時期に相当するものと思われる。

B 12—2 溝跡

遺構 (第32図 写真図版15)

調査区ほぼ中央の斜面下部に位置する土墨状遺構の東側で検出された。B 12グリットに端を發してF 9グリットまで北東から南西方向に延びる溝跡である。土墨状遺構を挟んで土盛西側のB 11溝跡と、東側に隣接するB 12—1 溝跡とほぼ平行している。検出面はⅢ層上部であるが、木根などで攪乱されていた。

規模は、全長は約25m、幅は40~60cm、深さ10~25cmである。断面形は北東部では浅い皿形から南西方向ではV字形を呈し、F 9グリットに至って浅くなり、底面は緩やかに丸みを呈する。壁は、直立気味に立上りながら緩やかに外反する。埋土は褐色土を主体としている。埋土の状況からは、水が常時流れたような砂質土や泥質土などの痕跡は観察されなかった。しか



S = 1/2

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
30	B 11溝	埋土	深鉢 胴部	擦糸文	ナ デ	繊維多	(1)-I-1-f		19-30
31	B 12—1 溝	埋土	深鉢 胴部	単節斜縄文	ナ デ	繊維多	(1)-I-1-a	底部付近	19-31
32	B 12—2 溝	埋土	深鉢 胴部	綾絡文	ナ デ		(1)-I-2-c		19-32
33	G 11溝	埋土	深鉢 口縁部	磨消文→単節斜縄文	ナ デ		(1)-III-2		19-33
34	G 11溝	埋土	鉢 口縁部	変形工字文	ミガキ		(2)-III-4		19-34
35	G 11溝	埋土	鉢 胴部	単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-4		19-35
36	G 11溝	埋土	鉢 胴部	単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-4		19-36

第33図 溝跡出土遺物 (1)



し、多量の小礫や流れ込みと思われる遺物が混入している。遺構は、B12グリットからさらに北東側の調査区外へと延びている。

#### 遺物（第33図21 写真図版19）

埋土からは斜面からの流れ込みと思われる縄文土器片や石器類が少量出土している。

土器：32は深鉢形土器の胴部の一部と思われ、地文に綾絡文が施文している。(1)Ⅰ-2-cに分類される。その他、土器片が出土しているが脆弱であり、拓本に耐えられるものは少ない。

石器：21は石鏃であり、二等辺三角形をした小型の凹基無茎鏃である。基部の凹みは浅く作られている。(1)Ⅰ-2に分類される。

#### 時期

B11溝跡と同様の目的により構築されたものと思われ、同時期に相当するものと思われる。

#### G11溝跡

#### 遺構（第32図 写真図版15）

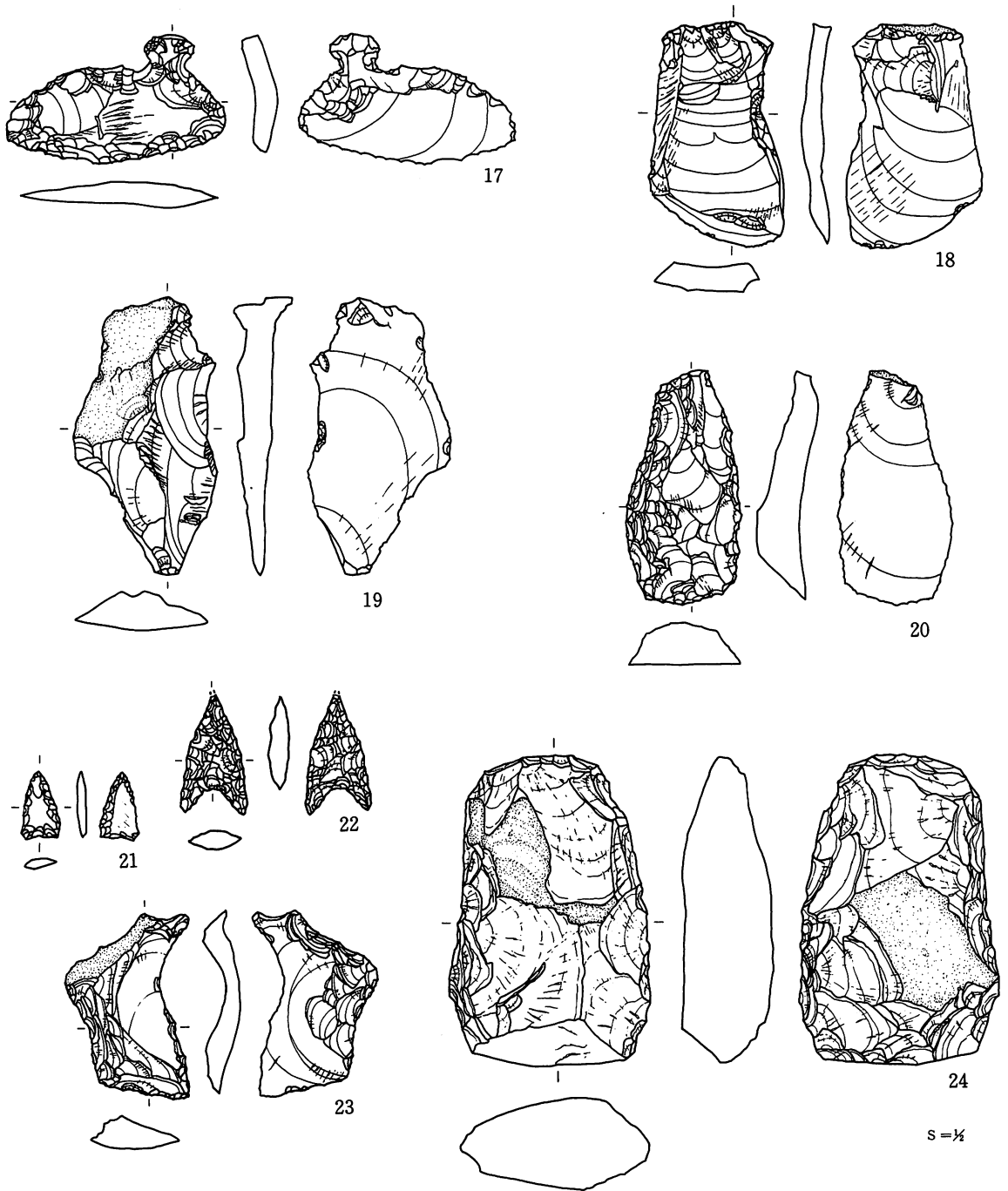
調査区の中央部平坦面の南東端に位置する。検出面はⅢ層上部であるが、木根などで攪乱されていた。遺構はH11住居跡を切って構築されており、G11グリット中央部に端を發してI13グリットまで北西から南東方向に延び、調査区域南端の斜面で消滅する。

規模は全長約15m、幅30～124cm、深さ5～20cmである。断面形は浅い皿形を、底面はやや平坦または丸みを呈する。壁は直立気味に立上りながら緩やかに内湾する。埋土は北西部では黒褐色土～明黄褐色土のシルトを主体とし、底面に砂質土が混入している。南東部では暗褐色土～明黄褐色土のシルトを主体として構成されている。埋土の状況から水が常時流れたような砂質土などの痕跡が観察されたことから、北西から南東に向かって水が流れたものと思われる。また、上位から底面にかけて、多量の小礫や流れ込みと思われる遺物が混入している。

#### 遺物（第33図33～36・第34図22～24 写真図版19）

埋土中からは、流れ込みと思われる多量の土器片や石器類が出土している。

土器：33は深鉢形土器の口縁部であり、口縁部には磨消文が、頸部にかけては単節斜縄文が施文されている。(1)Ⅲ-2に分類される。34は鉢形土器の口縁部であり、変形工字文が施文されている。内面はミガキ調整されている。35・36は鉢形土器の胴部であり、単節斜縄文が施文されている。内面はミガキ調整されている。34・35・36とも(2)Ⅲ-4に分類される。埋土中から出土している土器は、縄文時代に比定される植物性繊維が多量に含まれる深鉢形土器や、弥生時代の鉢形土器など器種も多種多様である。しかし、土器片が多量に出土しているにもかかわらず、水を被ったためか脆弱であり、拓本に耐えられるものは極めて少ない。



番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)			重量(g)	石質	特徴・備考	分類	写真図版
			長さ	幅	厚さ					
17	B 11溝	石匙	3.5	6.7	0.8	20.05	硬質泥岩	横型石匙	(3)-II	19-17
18	B 11溝	不定形	6.8	4.2	0.9	28.25	珪質泥岩	M・F	(6)-I-1	19-18
19	B 11溝	不定形	8.5	4.4	1.8	29.65	凝灰質硬質泥岩		(6)-II-2	19-19
20	B 12-1 溝	不定形	7.1	3.5	1.3	36.00	凝灰質硬質泥岩		(6)-III-1	19-20
21	B 12-2 溝	石鏃	2.1	1.0	0.3	0.6	流紋岩		(1)-I-2	19-21
22	G 11溝	石鏃 (3.7)	2.1	0.6	0.6	3.15	流紋岩		(1)-I-2	19-22
23	G 11溝	不定形	5.6	3.8	1.0	19.05	凝灰質硬質泥岩		(6)-II-1	19-23
24	G 11溝	打製石斧	9.4	6.2	2.8	195.0	硬砂岩	基部一部欠損	(8)-II	19-24

第34図 溝跡出土遺物 (2)

石器：22は基部がU字形に大きく抉入した石鏃であり、大型の凹基無茎鏃である。(1)―Ⅰ―2に分類される。23は所謂ノッチ状のものであり、抉入部分を含めて2縁辺部に刃部が作り出されている不定形石器である。(6)―Ⅱ―1に分類される。24は基部が欠損しているが、両面加工により全体が方形に作り出されている打製石斧である。(8)―Ⅱに分類される。

#### 時 期

遺構は調査区の南東端に位置するが、遺物のほとんどは流れ込みによるものである。また、開削などによる攪乱と削平により、出土遺物が構築の時期を決定するものかどうか不明である。

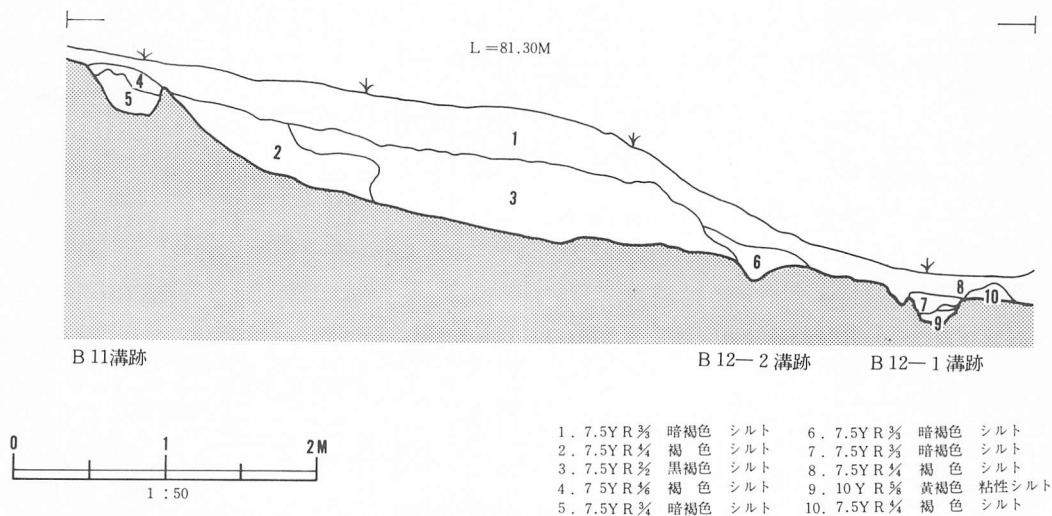
### 4. その他の遺構

調査区内において、二子城跡に関係すると推定される遺構は土塁状遺構1条である。この遺構を上位と下位に挟んで、3条の溝跡が検出されている。また、下層部の検出面からは縄文時代前期の竪穴住居跡が検出されている。調査区外の上位斜面上には、現況のままで同様の土塁状遺構が2条確認される。

調査区中央部東側の平坦部からは、時期不明の柱穴10個が検出されている。そのなかには、小屋状の建物跡を示すと思われる柱穴群が含まれる。

調査区南側からは、遺構と思われる集石状遺構が確認された。遺構は、大小の角礫・円礫が投げ込み状態で広範囲にわたって検出されている。

#### 土塁状遺構



第35図 土塁状遺構

### 遺構 (第35図 写真図版16)

調査区東北端部から南西方向にかけての斜面下端部のB 12～E 8グリットに位置する。土塁の下から東側にかけては平坦面が続いている。土塁は、標高82～83m付近を約30m続き、西側斜面の下端部付近で不明となるが、さらに西側へ巡っていたものと思われる。土塁の頂部はやや平坦面がみられるが、西側に至るほどに幅が狭くなり不明となる。

規模は、東北端部のB 12グリットでは最大幅約384cm、旧地表面からの最大比高差は約90cmであり、20～28°の角度で立ち上がる。構築当時はもっと土塁は高かったと思われる。表土除去後のⅡ層上面での観察によると、斜面上に盛土を行った状態が確認された。また、盛土を挟むように上位と下位には溝跡が掘削されている。盛土は、褐色土層上に黒褐色土シルトを主体として堆積している。土塁は、東北部の調査区外へとさらに延びており、調査区の頂部に建っている金刀比羅宮に登る階段を挟んで北へ巡り、清水斎園の入り口で不明となる。

### 遺物

遺構に伴う遺物の出土はないが、遺構検出作業中に、斜面上位からの流れ込みや木根などの攪乱により混入したと思われる遺物が出土している。

### 時期

遺構の時期を決定する遺物は出土していないが、形状から中世の二子城跡に関連する遺構の一部と思われる。

### 柱穴群

#### 遺構 (第36図)

調査区中央部の東側平坦部にあたる東北部のE 12～E 13グリットから南東部のG 12～G 13グリットに位置する。Ⅱ層下面で不規則に並ぶ小柱穴10個を確認した。検出面はⅢ層上面である。柱穴間隔は規則性に欠け、間幅が不定である。このうち、P1～P5については、東西2間(1.94m)、南北1間(1.94m)であり、南側がやや開き気味になる。東西1間幅のうち、P2～P3が1.32m、P3～P4が1.64mである。南北の間幅は、P1～P2が1.94m、P4～P5が1.32mである。P2～P4柱穴に対応する南側の柱穴は認められない。付近に規模が近似した柱穴群があるが、それぞれの対応性などについては明確でない。形状は、平面形がほぼ円形と不整の楕円形、断面形が皿形～U字形を呈する。柱穴の規模は、平均値でみると径が約35×45cm前後、深さが約15cm前後である。埋土は暗褐色土～褐色土シルトが主体である。

### 遺物

遺構に伴う遺物は出土していないが、埋土上面や周辺からは植物性繊維を含む縄文土器や石器類などが出土している。

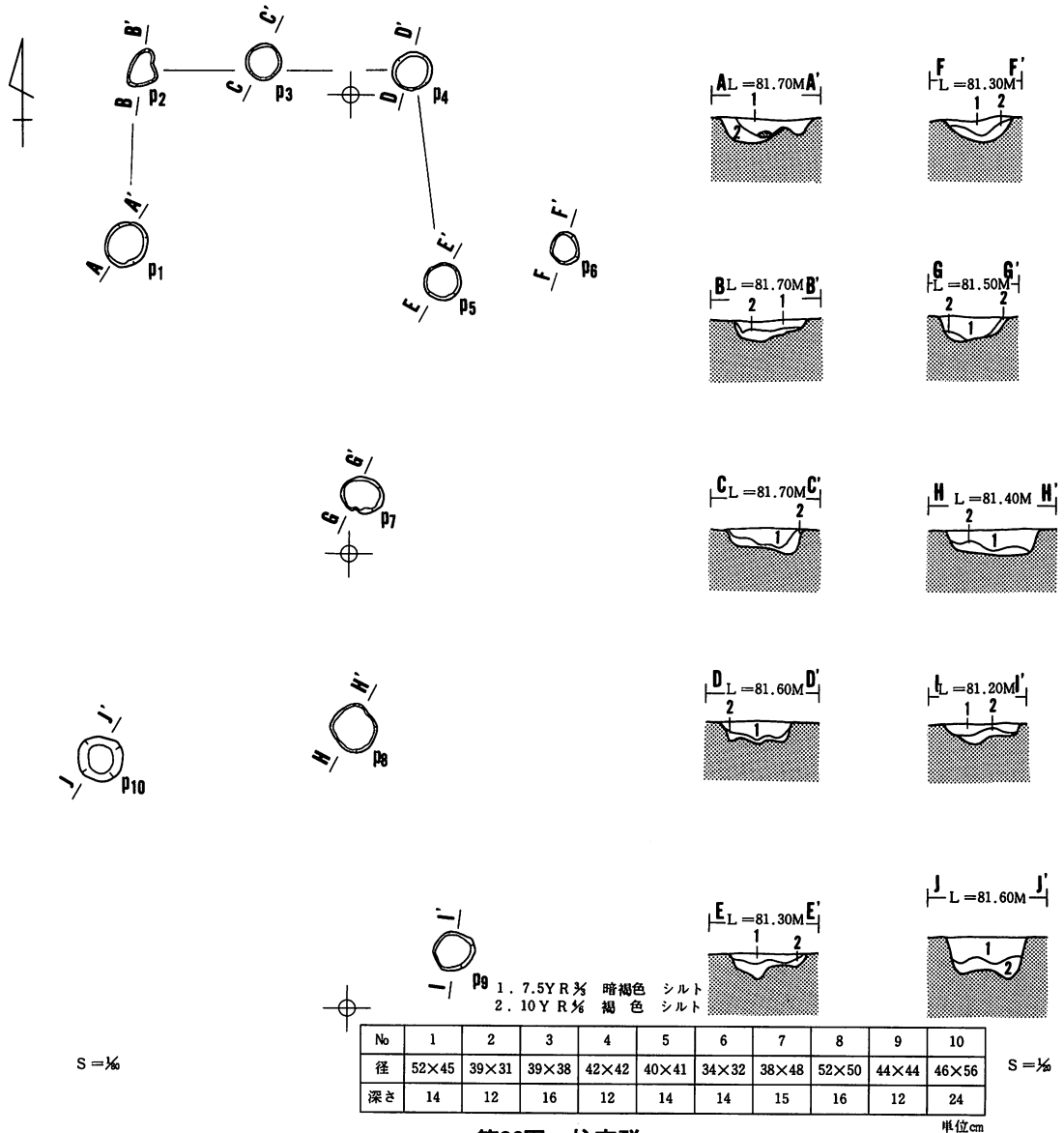
時 期

P1—P5の柱穴群については対応性がみられ、規模や形態的なものから推測すると小屋等の建物跡と思われる。

集石状遺構

遺構 (第3図 写真図版16)

調査区のほぼ中央より平坦部の南西側F7—G7グリットから南東側H12—I12グリットの斜面沿いに位置する。表土面で礫の散布状況が確認されていたが、表土除去後広範囲にわたる礫



第36図 柱穴群

の堆積状況が確認されたことから規則性や性格、構築目的などについては不明である。検出面はⅡ層上面である。集石の範囲は、東西が約25m、南北約12mある。堆積層は、最大値で約42cm、最小値で約20cmである。堆積している礫の多くは、角礫であり、円礫も混入している。集石地区の中でも特にⅠ9～Ⅰ12グリットを中心として、多量の土器片が出土している。土器片はかなり脆弱であり、その中には極めて小さい破片も含まれる。出土状況からみると、畑地などによる開削の際に、耕作土から出土した土器片や礫を投げ捨てたものと思われる。また、南西部のG8—G9～H8—H9グリット付近では斜面から流れ落ちたと思われる大きな礫が認められる。埋土にはさらさらした暗褐色土と黒褐色土シルトが混入している。

#### 遺物

遺構から多量の土器片が出土している。土器片はほとんどが接合せず、1個体となるものは全くない。遺物の出土状況をみると、南東側斜面沿い付近から東側にかけての上位から植物性繊維を含む縄文土器や石器類を主体に、Ⅰ9～Ⅰ12グリットを中心として西側付近では弥生時代初頭に比定される土器片を主体に出土している。

#### 時期

遺構から出土している遺物からは、時期を特定することは困難である。

## V. 監物館跡から検出された遺構

本遺跡から検出された遺構は、時期不明の溝跡1条である。遺物は全く出土していない。

#### Q0溝跡

##### 遺構（第37図 写真図版17）

調査区の北西端Q0からR1グリットに位置している。検出面はⅢ層上面である。遺構は、調査区北西端の隅から南東方向に延びて東側へと緩やかに湾曲し東端は浅くなって消滅する。

規模は、長さ約6.6m、幅40～60cm、深さ10～20cm、断面形はU字形を呈する。遺構は、北西端の隅から北西方向の調査区外へと延びているものと思われる。

#### 遺物

遺構に伴う出土遺物は全くない。

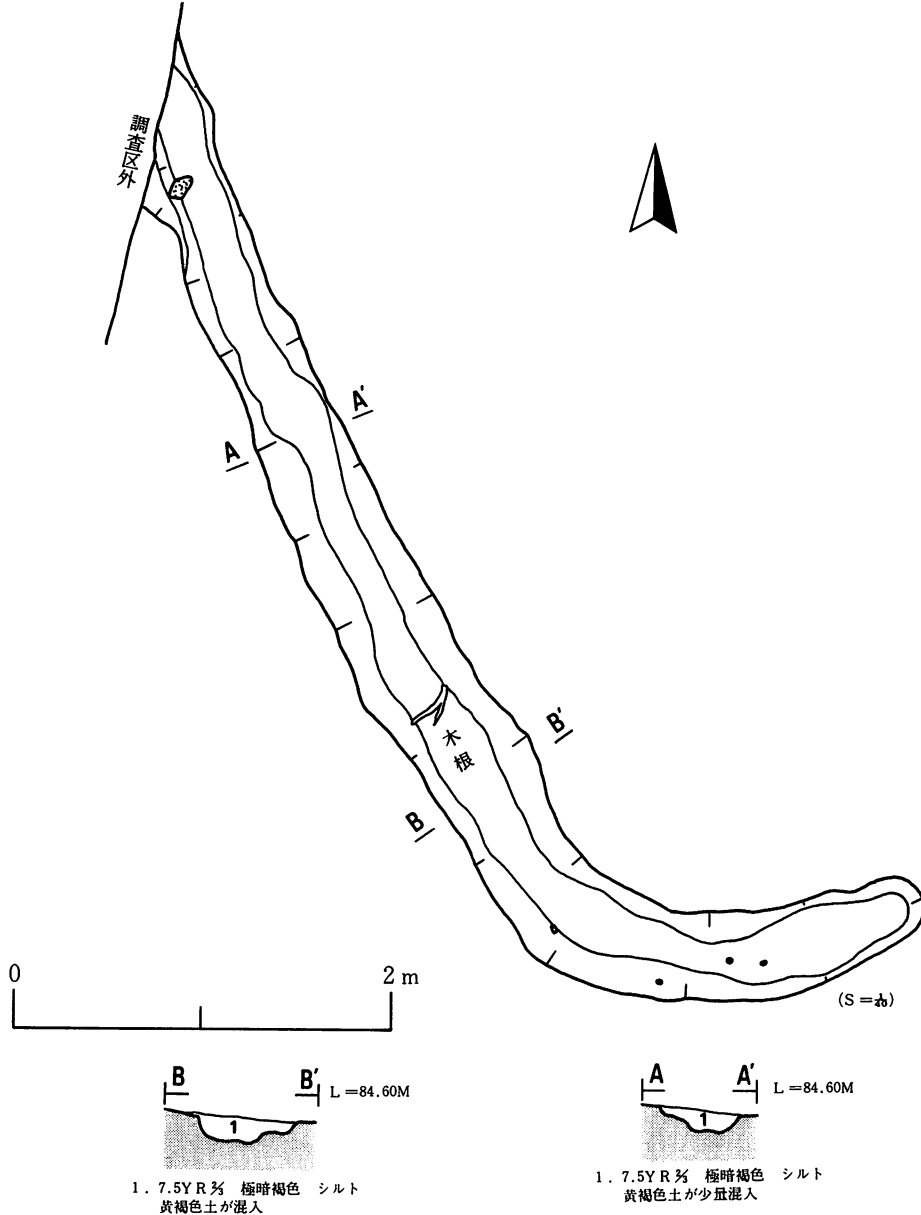
#### 時期

遺構の時期については不明である。

## まとめ

調査の結果、当初予想された中世和賀氏の居城二子城跡に伴う遺構は発見されなかった。

監物館跡は和賀郡一帯に勢力を持った和賀氏の重臣屋敷であるが、遺跡の本体は調査区の東南部にある沢（堀跡）を挟んだ対岸である。また、調査区域は西から東へ走る沢に舌状に張り出した南側斜面沿いにあることから、遺跡の主体は調査区域外の西側高位丘陵地及び東南側の館跡に存在するものと推定される。



第37図 監物館跡

## Ⅵ. 遺構外出土遺物

調査の結果、遺構外から出土した遺物は、土器・土製品・石器等である。遺物は、調査区の中央部平坦面を中心にして出土している。全体に調査区中央部から東側にかけては縄文時代前期の土器が、西南部側にかけては縄文時代晩期から弥生時代の土器が出土している。石器は剥片石器を中心にして出土区域も同様の傾向が見られる。

### 1. 土器

概ね(1)とした土器群は縄文時代の土器を一括した。縄文時代の土器は、土器の特徴から時期別に大分類した。第Ⅰ群は縄文時代前期、第Ⅱ群は縄文時代中期、第Ⅲ群は縄文時代後期に相当する。(2)とした土器群は弥生時代を一括した。弥生時代の土器は、大分類を器種別に行い、第Ⅰ群は蓋形土器、第Ⅱ群は壺形土器、第Ⅲ群は鉢形土器、第Ⅳ群は浅鉢形工器坏、第Ⅴ群は高坏甕、第Ⅵ群は甕形土器と器種別に分類した。分類の蓋然性を高めるために、文様の特徴・施文方法・胎土の特徴などからさらに細分した。遺構内から出土した土器も含めて分類を行った。

#### (1)縄文土器

縄文時代前期・中期・後期の土器に属すると思われる土器群を一括した。ここでは文様の特徴・施文方法・胎土の特徴などから次のように分類した。

#### 第Ⅰ群土器

縄文時代前期に属すると思われる土器群を一括した。ここでは、施文方法・胎土の特徴などから、次のように細分類した。

Ⅰ類 胎土には全て植物性繊維が含まれ、器表面には縄文が施文されている

- a : 地文に単節斜縄文が施文されている
- b : 地文に複節斜縄文が施文されている
- c : 地文に羽状縄文が施文されている
- d : 地文に綾絡文が施文されている
- e : 地文に不整然糸文が施文されている
- f : 地文に原体の押圧痕が施文されている



第 I 群 1 類 a (第 38 図 37~48 写真図版 20)

地文に単節斜縄文が施文され、器種は深鉢形土器の破片と思われる。37は尖底土器の底部であり、単節斜縄文が施文される。38~45・47・48は口縁部の破片である。38~40は口唇部が平坦で、刺突状の指頭押圧痕がある。41は口唇部が平坦で指頭押圧により外反する。47は縦位方向に単節斜縄文が施文される。42~45は口唇部がやや丸みをもっている。46は胴部から底部付近の破片であり、単節斜縄文の重なりがみられる。

第 I 群 1 類 b (第 38 図 49~53 写真図版 20)

地文に複節斜縄文が施文され、器種は深鉢形土器の破片と思われる。49~52は口縁部の破片である。49は口唇部に撚糸圧痕が施文される。50・51・52は口唇部に刺突状の指頭押圧痕がみられ、平坦である。50は口唇部がやや外反する。53は胴部の破片である。

第 I 群 1 類 c (第 38 図 56・第 39 図 57・59~61 写真図版 20)

57・60・61は口縁部の破片であり、57・61は口唇部はやや丸みをもっている。57・61は結束の羽状縄文である。60は口唇部が指頭押圧により平坦となり、同一原体の結束の羽状縄文である。61は口唇部が無文となるのは、原体の末端に当たるためと思われる。56・59は胴部の破片である。56は 0 段多条の結束のある羽状縄文が横位方向に施文される。57・59・60・61はいずれも縦位方向に羽状縄文が施文される。

第 I 群 1 類 d (第 39 図 62・63 写真図版 20)

62は口縁部の破片である。口唇部はやや丸みをもちながら薄くなり、刺突状の指頭押圧痕がみられ、やや外反する。口唇部付近は無文であり、その下に横位方向に綾絡文が施文される。63は胴部の破片である。横位方向に綾絡文が施文される。

第 I 群 1 類 e (第 39 図 54・55・64 写真図版 20)

54・55は口縁部の破片である。54は口唇部がやや角ばり 0 段多条の原体により施文される。55は口縁部が平坦で、刺突痕がみられ、やや外反する。64は胴部の破片である。いずれも右斜位方向に施文される。

第 I 群 1 類 f (第 39 図 65 写真図版 20)

65は胴部破片である。地文に単節斜縄文、横位方向に平行に 2 本の撚糸圧痕文が施文される。

2 類 胎土には植物性繊維が含まれず、器表面には縄文あるいは棒状工具または半截竹管用工具による刺突文もしくは沈線文が施文される。

- a : 地文に単節斜縄文が施文される
- b : 地文に羽状縄文が施文される
- c : 地文に不整撚糸文が施文される

d : ボタン状突起を中心に棒状工具・半截竹管用工具による刺突文・沈線文が施文される

第Ⅰ群 2類a (第39図66～68 写真図版20)

66～68は口縁部の破片であり、口唇部は丸みをもっている。66は口唇部付近が磨消されている。67は口唇部付近が磨消され、やや外反する。68は異なる原体の重なりにより施文される。

第Ⅰ群 2類b (第39図69 写真図版20)

69は口縁部の破片である。結束の羽状縄文が縦位方向に施文される。

第Ⅰ群 2類c (第39図70 写真図版20)

70は口縁部の破片である。口唇部に指頭押圧痕、口縁端部が磨消され、横位方向に不整燃糸文が、縦位方向に綾絡文が施文される。

第Ⅰ群 2類d (第39図71～79 写真図版20・21)

71～74は口縁部の破片である。71は口唇部を折り返し、その上に2本の粘土紐が貼付けられる。半截竹管用工具により、頸部には連続の波状沈線文が、肩部には隆帯上に刺突が、胴部には平行沈線文が施文される。胴部の平行沈線文は幾何学的文様を描き、その交点にはボタン状の貼付がみられる。72・73は波状口縁の波頂部である。72は波状口縁の波頂部に、円形の指頭状圧痕の凹みと、口縁部に沿って平行沈線文が施文される。73は波状口縁の波頂部に、ボタン状貼付文とその両側には縦位に粘土紐を貼付けている。75～79は胴部の破片である。74・75は色調と胎土が類似していることから、同一個体と思われる。74は口唇部を折り返し、その上から円形の指頭状圧痕の凹みを、それを中心に棒状工具により逆V字形の文様を描き、左へは左下がり、右へは右下がりの沈線文が施文される。75には縦位方向に綾絡文が施文され、内面にはススが付着している。76は半截竹管用工具による波状沈線文と山形沈線文が施文される。77は短い粘土紐を縦位に、78は円形に粘土紐を貼付けしたところから、半截竹管用工具により斜方向と縦位方向に、平行沈線文が施文される。79は胴部上半が球状に膨らみ円筒形の胴部下半に続く鉢形状の深鉢形土器のくびれ部分と思われる。地文に単節斜縄文が施文される。

第Ⅱ群土器

縄文時代中期に属すると思われる土器群を一括した。

1類：口縁部に平行沈線文と三角形の刺突文が施文される

2類：地文に平行沈線文または山形沈線文が施文される

3類：地文に単節斜縄文が施文される

第Ⅱ群 1類 (第40図80 写真図版21)

80は口縁部の破片である。小波状口縁を呈し、波頂部には粘土紐を貼付けた上から捺糸圧痕文が施文される。口唇部は折り返し口縁風である。口唇部には連続的に三角形刺突文が施文され、その下部に平行沈線文が施文される。

#### 第Ⅱ群 2類 (第40図81・82 写真図版20)

81は頸部、82は胴部の破片である。色調と胎土から同一個体と思われる。81は隆帯に棒状工具による波状沈線文が施文され、円形に粘土紐を貼付けている。82は棒状工具による波状沈線文が施文される。

#### 第Ⅱ群 3類 (第40図83 写真図版21)

83は胴部の破片である。地文に単節斜縄文を、縦位方向に綾絡文が施文される。

### 第Ⅲ群土器

縄文時代後期に属すると思われる土器群を一括した。出土している破片数は少ない。

- 1類：地文に縄文が施文される
- 2類：地文に沈線文が施文される
- 3類：地文に沈線文と縄文で施文される
- 4類：なんらかの施文具により縄文風の施文がされる

#### 第Ⅲ群 1類 (第40図84 写真図版21)

84は胴部破片である。磨消手法により器面を調整し、半截竹管用工具を用いて曲線による幾何学的文様が施文されている。

#### 第Ⅲ群 2類 (第40図85・86 写真図版21)

85・86は口縁部の破片である。85は深鉢形土器の口縁部と思われる。口縁部が磨消され、沈線により区画した後に単節斜縄文が施文される。86は体部がやや細身の壺形土器と思われる破片である。磨消の部分を境として、上位と下位に同一原体による単節斜縄文が施文される。

#### 第Ⅲ群 3類 (第40図87～89 写真図版21)

87は口縁部の破片である。口唇部の折り返した部分に単節斜縄文が施文され、平行沈線文により区画した後に磨消される。88・89は胴部の破片である。平行沈線文と単節斜縄文とが、幾何学的文様を作り出して施文されるものと思われる。

#### 第Ⅲ群 4類 (第40図90 写真図版21)

90は胴部破片である。明確ではないが、場所により棘を持つ植物の幹を回転させた擬似縄文である。粒が縄文の節に相当する刺突痕が三角錐状の圧痕となっている。斜方向・縦位方向と

も、特に斜方向に整然と並ぶ。水平方向では上位列と下位列の節のなかでは交互になっている。文様を施文した後に、部分的に縦位方向に篋状工具によりナデ調整している。さらに、部分的に縄文が施文されている。植物性繊維か単節縄文か、網代様の組み紐か縦方向の単節縄文の原体端で施文されていると思われる。他の部分は、押圧痕が不明で判断することができない。

## (2) 弥生土器

弥生時代初頭・弥生時代後期に属すると思われる土器群を一括した。ここでは器種・施文方法などから次のように分類した。

### 第Ⅰ群土器 蓋形土器 (第40図91・第42図 134 写真図版21・22)

91は口縁部であり、2個の焼成前の意図的な穿孔痕がみられる。地文には単節縄文が施文され、形態は円形状と思われる。134は、口縁部から身部であり、形態は笠形状と思われる。地文は無文である。口唇部は、使用による摩耗箇所がみられ、身部からくびれ部にかけては太い沈線が施文されている。

### 第Ⅱ群土器 壺形土器

1類：口縁部は垂直に立上り、体部上位に最大径を持ちやや球胴形である

2類：肩部から体部上位に変形工字文が施文されている

3類：無文であり、口縁部は広口で、肩部に膨らみを持つ円筒形である

### 第Ⅱ群1類 (第40図92～94・第43図 140～142 写真図版21・22)

全面がミガキ手法の壺形土器である。92・93は口縁部から体部上半である。地文は無文で口縁部は横位方向に、肩部から体部にかけては左上から右下に斜め方向に、強いミガキ調整が加えられている。口縁部には2本の平行沈線間に2個一対の貼瘤、口縁部の内側に1本の沈線文が施文される。また、93は頸部には1本の沈線文が施文される。94・140は口縁部の破片である。94は、地文が無文で横位方向に強いミガキ調整が加えられている。口縁部には3本の平行沈線文が、その内側に1本の沈線文が施文される。口唇部には単節縄文が施文されている。140は、口縁部に2本の平行沈線文が、内側に1本の沈線が施文される。沈線文の交点に作られる粘土瘤の箇所に、蓋受け用のものと思われる焼成前の意図的な穿孔痕がみられる。141・142は肩部から体部にかけての破片である。地文が無文で横位方向に強いミガキ調整が加えられ、頸部には1本の沈線文が施文される。

### 第Ⅱ群2類 (第43図 143 写真図版22)

143は胴部上位の破片である。肩部から胴部上位に変形工字文が施文される。口縁部は頸部

から直立気味に立上りながら、やや外反するものと思われる。体部から底部にかけての施文については不明である。

### 第Ⅲ群土器 鉢形土器

- 1 類：山形口縁の頂部の高低差が規則的でやや直立気味に立ち上がる
- 2 類：山形口縁の頂部が緩やかに外反し、頸部より内湾する
- 3 類：山形口縁の頂部に突起を持ち、横位方向に沈線が施文され、緩やかに外反し、頸部より内湾する
- 4 類：平口縁で頸部が内湾し、体部が直線的または緩やかに内湾する

#### 第Ⅲ群 1 類 (第40図97 写真図版21)

97は口縁部の破片である。山形口縁の頂部に高低差の異なる二つの波頂を交互に配している。低い頂部にV字形の凹みを施文し、高い頂部に山形の頂部を平らにしている。頸部には変形工字文が描かれている。頸部は緩やかに内湾しながら、体部で膨らみを持つものと思われる。

#### 第Ⅲ群 2 類 (第40・41図98～101 写真図版21)

98～100は口縁部の破片である。いずれも、口縁部の内側に山形の沈線文が施文されている。頸部から胴部上位にかけて変形工字文が施文されるものと思われる。101は、体部上位の破片である。形態は肩部に膨らみを持ち、肩部から胴部へ移る部分がくびれたのち、再び膨らみを持ち、底部に向かってややすぼまり気味になる鉢形土器のくびれ部分の箇所である。破片上部はミガキ調整され、下部に単節斜縄文が施文される区画の場所に平行沈線が施文される。

#### 第Ⅲ群 3 類 (第41図103・104・144 写真図版21・22)

103・104は口縁部の破片であり、突起を持っている。口縁部の内側には、103は沈線文が、104は頂部に沿って山形の沈線文が施文される。144は、頸部付近の破片である。変形工字文の沈線文の交点にボタン状の粘土瘤1個が貼付けられている。

#### 第Ⅲ群 4 類 (第41図106～111・135～137 写真図版21・22)

106～108は口縁部の破片である。いずれも、口縁部から肩部には変形工字文が、胴部には単節斜縄文が施文される。109は胴部下半の底部付近の破片であり、単節斜縄文が施文される。110・111・135・136は底部の破片である。底部付近の胴部には単節斜縄文が施文され、底部には、110は網代痕が、111は木葉痕が残っている。137は、口縁部には変形工字文と思われる沈線文が、胴部には単節斜縄文が施文され、底部はやや丸みを帯びていて不安定である。

### 第Ⅳ群土器 浅鉢形土器

- 1 類：山形口縁で頸部が内側に強く屈曲し、体部は直線的に強く外傾する
- 2 類：平口縁で頸部が内側に強く屈曲し、体部は直線的に強く外傾する

#### 第Ⅳ群 1 類 (第41図 112 写真図版22)

112は山形の口縁部である。頸部には変形工字文が、胴部には単節斜縄文が施文される。口縁部内側には沈線文が施文される。内外面ともにミガキ調整されている。

#### 第Ⅳ群 2 類 (第41図113・114 写真図版22)

113は平口縁である。口縁部には変形工字文が、胴部には単節斜縄文が施文される。114は頸部付近の破片であるが、頸部が屈曲する箇所とその下部にある沈線に挟まれる箇所に棒状工具による刺突文が施文される。いずれも、内外面ともにミガキ調整されている。

#### 第Ⅴ群土器 高坏

体部が内湾し、頸部が強くくびれ、口縁部・波頂部は外反し立ち上がる

#### 第Ⅴ群 (第41・42図115・116 写真図版22)

115・116は口縁部の破片であり、口縁部は波状を呈する。115は、波頂部に大きな突起を持ち、突起の頂部には沈線文が施文される。口縁部の内側には山形状の沈線が施文される。116は、体部に変形工字文が描かれた後に、地文として描かれた縄文が磨り消されている。波頂部は浅い凹みを持ち、口縁部と頸部の内側には山形状の沈線が施文される。文様のモチーフが極似する。

#### 第Ⅵ群土器 甕形土器

- 1 類：口縁部は直立気味に立上り、体部は球形である。
- 2 類：口縁部が山形状で緩やかに外反し、横位方向に沈線文が施文される。
- 3 類：口縁部が緩やかに外反し、肩部が緩やかに膨らむ
- 4 類：口縁部が強く外反し、肩部が膨らむ
- 5 類：口縁部が直立気味に立上り、地文に縄文が施文されて、肩部が緩やかに膨らむ
- 6 類：口縁部が緩やかに外反し、口唇部付近でやや内湾し、器面は篋状工具で調整される
- 7 類：口縁端部に粘土紐を貼付けている
- 8 類：口縁部が、棒状工具により区画した沈線文とその内側に刺突文が施文される

#### 第Ⅵ群 1 類 (第40図95・96 写真図版21)

95・96は口縁部がミガキ調整され無文である。頸部に沈線文が、体部には単節斜縄文が施文される。95は口縁部が直立気味に立上りながらやや外反し、肩部からは球形状に膨らむ。口縁部の内側には沈線文が施文される。96は口縁部が直立気味に立上りながらやや外反し、肩部からは緩やかに膨らむ。口唇部には棒状工具による刺突文が施文される。

#### 第Ⅵ群 2類 (第41図102～104・144 写真図版21・22)

102は口縁部が山形を呈し、頂部には突起を持っている。頸部から肩部には変形工字文が、胴部には単節斜縄文が施文される。口縁部内側には沈線文が施文される。底部は欠損している。

105は口縁部・肩部が欠損している。一部しか残っていない肩部には変形工字文が、胴部には単節斜縄文が施文される。器厚は薄く、焼成も硬くて良好である。

#### 第Ⅵ群 3類 (第42図117～120 写真図版22)

117～119は、口縁部の破片である。口縁部は篋状工具により調整され無文であり、体部には単節斜縄文が施文されている。器厚は比較的厚い。117は口唇部を折り返している。118は、口唇部に単節縄文が施文される。119は、口唇部を篋状工具で外側に向けてひねるようなケズリ痕があり、やや波形を呈する。120は胴部の破片である。単節縄文を施文後に、篋状工具でケズリ調整されている。

#### 第Ⅵ群 4類 (第42図121～123 写真図版22)

121～123は口縁部～肩部の破片であり、口縁部は篋状工具により調整され無文である。121・122は胴部に単節斜縄文が施文される。123は胴部が無文で、頸部には沈線文が施文される。

#### 第Ⅵ群 5類 (第42図124～127・第43図138 写真図版22)

124・125・138は口縁部の破片である。口縁部から体部まで単節縄文が施文される。124は口唇部に篋状工具で外側に向けてひねるように若干ケズリ痕があり、いくらか波を打つような調整が行われたものと思われる。125は口唇部が指頭押圧により外側にすぼまって尖るような調整がされ、口縁部には単節斜縄文を施文した後に、篋状工具でケズリ調整されている。頸部には区画を示すような沈線文が施文される。器厚は比較的厚い。138は口縁部が内傾気味に立上り、肩部がいくらか膨らみを持ち、口縁部から体部までは単節斜縄文が施文されている。口唇部に篋状工具で外側に向けてひねるように若干ケズリ痕があり、いくらか波状を呈するように調整が行われている。126・127は胴部下半の破片である。縦位方向に撚糸文を思わせる施文が行われている。

#### 第Ⅵ群 6類 (第42図128～130 写真図版22)

128・129は口縁部の破片である。128は、口縁部を指頭押圧による調整が行われた痕跡が、口縁部内側に瘤状の隆帯痕にみられる。さらに、器面を頸部から肩部にかけては左上から右下へ、体部上半は左から右へ、体部上半は左から右へやや斜めに篋状工具によってケズリ調整さ

れ、条痕状の文様を表している。129・130も同様の器面調整である。129は口唇部が平らに、胴部にかけて篋状工具によりケズリ調整している。130の胴部破片には篋状工具のケズリ調整痕がみられる。

#### 第Ⅵ群 7類 (第42図131 写真図版22)

131は口縁部の破片であり、器厚は極めて薄い。口縁端部に細い粘土紐を貼付け、平たい棒状工具を用いて押圧と刺突により施文される。

#### 第Ⅵ群 8類 (第42図132 写真図版22)

132は口縁部の破片であり、器厚は極めて薄い。棒状工具により口唇部と頸部付近には平行に、口縁端部に楕円形状の沈線文が施文される。楕円形状の区画の中に、上方に向けて刺突文が施文される。

第Ⅰ群 1類から第Ⅵ群 4類については弥生時代初頭、第Ⅵ群 5類から 8類については弥生時代後期に比定される。

## 2. 陶磁器

陶磁器 (第44図201~205写真図版) は、5点出土している。磁器 3点、陶器 2点であり、いずれも小破片である。調査区の北側の土壘状斜面下の平坦部から出土している。

磁器、201が青磁碗の胴部破片、202が染付碗の口縁部破片と203が染付碗の胴部破片である。

201の青磁碗は胴部下半で外面にやや幅広の蓮弁状の沈線がみられる。内外面とも薄い暗緑色を呈し、素地は緻密で灰白色である。染付碗のうち、203は外面に草花状の文様がやや暗い発色で描かれている。202は呉須の発色が鮮明で、内外面とも光沢が強い。201と203は明代の舶載品であり、202は伊万里系と推測される。

陶器は、204が青緑釉皿の口縁部破片と 205が白濁釉皿の胴部破片である。204は口縁部は胴部から内湾気味に立上り、口縁端部がやや厚くなる。内面は暗い黄緑色であり、外面は透明で調整痕がみられる。推定口径約14cmである。205は高台際に沈線状の削り出しがあり、内外面の厚い長石釉には気泡がみられる。胎土は明黄褐色である。204は唐津系陶器、205は志野系陶器である。

## 3. 土製品

土製品は、円盤状土製品が1点、土偶の破片が21点出土している。

#### (1)円盤状土製品 (第45図301 写真図版24)



形状は円形を呈し、器表面に単節斜縄文が施文され、裏面には穿孔が途中の小穴を有する。

## (2)土偶 (第45図302～306 写真図版24)

調査区南西部の斜面下端から平坦部のE8・F9・G6グリットを中心として各部位の破片が出土しているが、脆弱であり、また、部位についての詳細が不明なものが多い。

302は頭部、303・304は腕部、305・306は胴部破片である。施文方法の中心は、細い棒状工具による刺突文と沈線文である。

302は頭部であり、顔面部が全部・頸部が一部分・右耳が欠損している。頭部には、頭髪部分は隆帯と沈線で表現されており、両端部との境目に縦位方向に沈線を入れ、耳状の結髪の付近では前に折返し気味になっている。顔面部の眉弓の部分に下位方向に刺突文が1列に施文される。後頭部にはコブ状に張出し、眼状の凹みが左右にみられ、その中間には、棒状工具で、上の部分に刺突状の、その下には頸部方向に斜めに引っ掻くような刺突状の文様が施文される。頭部上位には円状の沈線とその下に刺突文が施文されている。顔面部から頸部の内側は中空である。頭髪の部分はミガキ調整、後頭部から頸部は棒状または篋状工具によるナデ調整がされている。303・304の腕部は、やや扁平な形状を呈し、先端に向かいながら捻じれ気味になり、先端部分が尖り気味になりながら丸みを帯びる。腕の付け根の部分は丸みを帯びて太くなり、直角気味に曲がる。器表面はミガキ調整され、棒状工具による刺突文を地文とし、縁辺に沈線文が施文される。304の腕部の器表面は大半が剥落しているが、腕部の縁辺に沈線を、その下に磨消部分を作り刺突文が施文される。305・306は胴部破片である。305は、腹部を表現するために沈線を入れて、磨消部分を作り斜位方向に刺突文が施文される。器表面はミガキ調整され、内側は、中空を示す丸みがみられ、ナデ調整されている。306は器厚が比較的薄く、焼成が良く硬い。器表面は刺突文が、円状の沈線2本により施文される。器表面はミガキ調整され、内側は、中空状態の明確な丸みがみられ、ナデ調整されている。

302～305は胎土・色調などから同一の個体と思われる。色調は橙色である。306は別個体と思われる、色調は浅黄橙色である。

土偶は、結髪形土偶であり、時期は、形態や施文方法などから縄文時代晩期後葉(大洞A'式)から弥生時代初期頃のものと思われる。

## 4. 石器

調査区内の平坦部を中心として出土しており、剝片石器が主体を占め、礫石器は少ない。一部は遺構内から出土している石器も含めて分類している。概ね、分類の方法は、加工方法と形態を中心にして行った。

(1)石鏃 (第46図25～30 写真図版25)

先端部が鋭利になっており、刺突を目的として使用されたものと考えられる剝片石器。

第Ⅰ群 いわゆる無茎鏃のもの

1類：基部が直線的なもの (平基無茎鏃) (25・26)

2類：基部に抉入のあるもの (凹基無茎鏃) (27・28・29・30)

第Ⅱ群 いわゆる有茎鏃のもの

1類：基部を持たず基部が突出するもの

2類：基部を持たず基部が突出するもので、棒状で両先端が尖るもの

(2)石錐 (第46図31 写真図版25)

身部が明瞭には作り出されず、つまみの一部を身部としている剝片石器。(31)

(3)石匙 (第46・47図32～39 写真図版25)

両側辺から抉りを入れたつまみ部を有し、刃部を作り出している剝片石器。

第Ⅰ群 縦長の形態を示す石匙

1類：2縁辺が直線的で、2縁辺と先端部の3縁辺部に刃部を作り出している(32・33・34)

2類：両側辺の1縁辺または2縁辺が緩やかに弧を描いて一点に収束し、2縁辺部に刃部を作り出している(35・36・37)

3類：つまみ部の抉りがやや不明瞭な作りをしている。(38・39)

第Ⅱ群 横長の形態を示す石匙

(4)石篋 (第47図40～43 写真図版25)

扁平な礫を素材として、左右対称で撓形または短冊形を呈する剝片石器。

1類：全体の形が撓形に作られているもの(40・41・42)

2類：全体の形が短冊形に作られているもの(43)

(5)ピエス・エスキーユ (第47図44 写真図版25)

両極剝離痕が認められ、2個1対の刃部がみられる剝片石器。

(6)不定形石器 (第47～51図45～82 写真図版25～27)

石鏃・石匙・石篋を除き、調整痕のある剝片石器を一括した。明瞭な刃部、調整痕を持つ部位により、次のように分類した。

第Ⅰ群 剝片の1縁辺部に刃部があるもの

1類：刃部を作り出しているもの

a：剝片の下部に刃部を作り出しているもの(45・46)

b：剝片の横位から下部にかけてに刃部を作り出しているもの(47・48)

c：剝片の横位に刃部を持つもの(49～53)

d : 剥片の一部分に刃部を作り出しているもの (54)

2 類 : 刃部を作り出さずにマイクロ・フレイキングが認められるもの

第Ⅱ群 剥片の 2 縁辺部に刃部があるもの

1 類 : 隣接している 2 縁辺部に刃部が作り出されているもの (55~61)

2 類 : 2 側縁に刃部が作り出されているもの (62~70)

3 類 : 2 側縁に作り出された刃部が 1 点に収束しているもの (71~77)

4 類 : 2 側縁に刃部を作り出さずにマイクロ・フレイキングが認められるもの

第Ⅲ群 剥片の 3 縁辺部に刃部があるもの

1 類 : 長方形をしているもの (78)

2 類 : 円形をしているもの (79・80)

3 類 : 三角形をしているもの (81・82)

(7)石錘 (第51図83 写真図版27)

楕円形の扁平な長軸方向の縁辺に、2 個 1 対の抉入を有する礫石器。

(8)打製石斧 (第52図84~87 写真図版27)

自然礫や大型の剥片を利用して、打ち欠きや敲打により石斧として成形された石器、加工方法と形態により分類した。

第Ⅰ群 片面のみ加工し刃部を作り出しているもの

1 類 : 全体の形が撓形に作られているもの (84・85)

2 類 : 全体の形が短冊形に作られているもの (86)

第Ⅱ群 両面を加工し刃部を作り出しているもの (87)

(9)礫器 (第52図88 写真図版28)

楕円形状の礫の一端に、片側から連続的な剥離を加え、刃部を形成している礫石器。 (88)

(10)磨石 (第52・53図89~92 写真図版28)

垂角礫または円礫が研磨部分を有する礫石器。

1 類 : 棒状の垂角礫の稜部に研磨部分のみられるもの (89~91)

2 類 : 円礫に研磨部分のみられるもの (92)

(11)凹石 (第53図93・94 写真図版28)

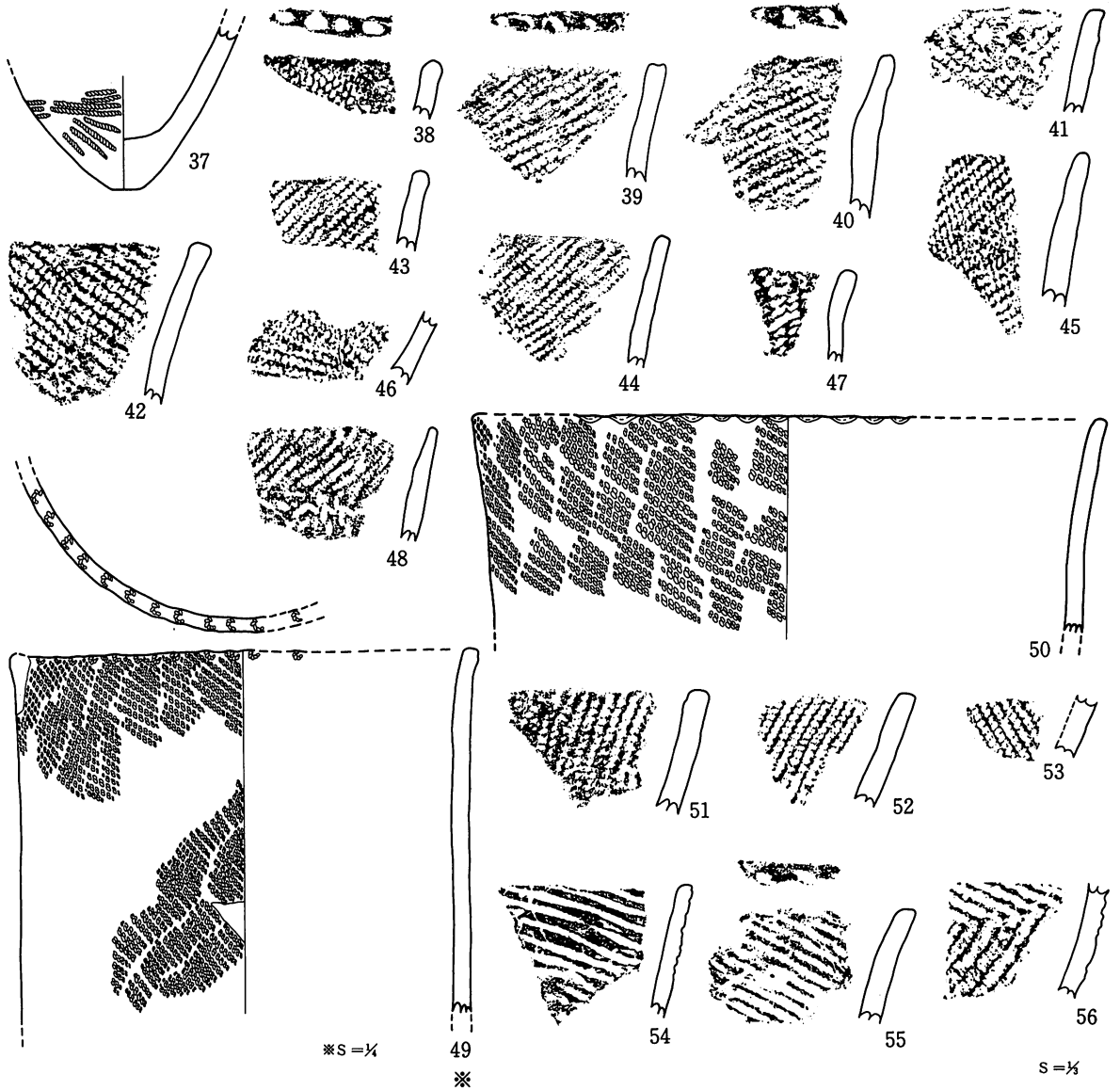
円礫の片面・両面に、擦り凹めるかまたは敲打により凹部を作り出した礫石器。

1 類 : 円礫の 2 面に研磨部分と凹部のみられるもの (磨石+凹石) (93)

2 類 : 円礫の片面に凹部のみられるもの (94)

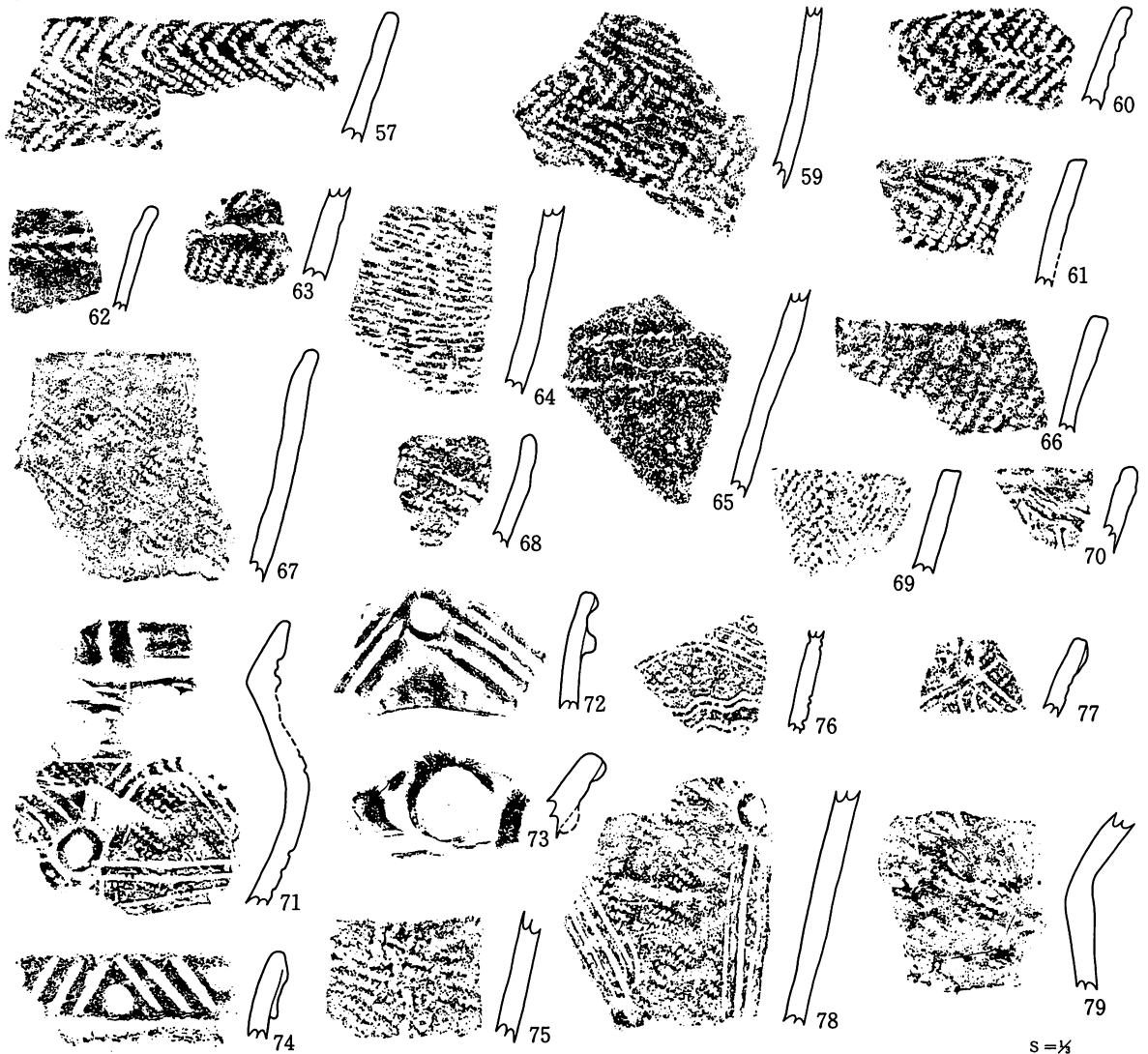
(12)砥石 (第53図95 写真図版28)

研磨を目的に使用されたと思われる、研磨面や擦痕が認められる礫石器。



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
37	C 12	深鉢	底部	単節斜縄文 尖底土器	ナデ		(1)-I-1-a		20-37
38	D 12ベルトII層	深鉢	口縁部	単節斜縄文 口唇部刺突指頭圧痕	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		20-38
39	C 15II層	深鉢	口縁部	単節斜縄文 口唇部刺突指頭圧痕	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		20-39
40	C 15II層	深鉢	口縁部	単節斜縄文 口唇部刺突指頭圧痕	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		20-40
41	C 15II層	深鉢	口縁部	単節斜縄文 口唇部指頭押圧で外反	ナデ	繊維多	(1)-I-1-a		20-41
42	I 9 I層	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナデ	繊維多	(1)-I-1-a		20-42
43	F 12II層下部	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		20-43
44	F 9土盛黒色土	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナデ	繊維多	(1)-I-1-a		20-44
45	F 12II層	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナデ	繊維多	(1)-I-1-a		20-45
46	第3層トII層F12付近	深鉢	胴部	単節斜縄文 単節縄文の重なり 丸底底部付近	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		20-46
47	F 8 II層	深鉢	口縁部	単節斜縄文 文様縦位方向	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		20-47
48	C 15II層	深鉢	口縁部	単節斜縄文 口縁部横位文向線絡文	ナデ	繊維	(1)-I-1-a		20-48
49	F 12II層	深鉢	口縁部	複節斜縄文 口唇部燃系圧痕	ナデ	繊維多	(1)-I-1-b		20-49
50	D 12II層	深鉢	口縁部	複節斜縄文 口唇部刺突指頭押圧痕	ナデ	繊維多	(1)-I-1-b		20-50
51	黒色II層	深鉢	口縁部	複節斜縄文 口唇部刺突指頭押圧痕	ナデ	繊維	(1)-I-1-b		20-51
52	D 12II層	深鉢	口縁部	複節斜縄文 口唇部刺突指頭押圧痕	ナデ	繊維多	(1)-I-1-b		20-52
53	表土一括黒色II層	深鉢	胴部	複節斜縄文	ナデ	繊維少	(1)-I-1-b		20-53
54	F 12II層第3トレンチ	深鉢	口縁部	不整縹糸文 (O段多糸)	ナデ	繊維	(1)-I-1-e		20-54
55	F 12II層	深鉢	口縁部	不整縹糸文 (O段多糸) 口唇部指頭押圧痕	ナデ	繊維	(1)-I-1-e		20-55
56	C1端2トレンチ土盛黒褐色	深鉢	胴部	羽状縹糸文	ナデ	繊維	(1)-I-1-c		20-56

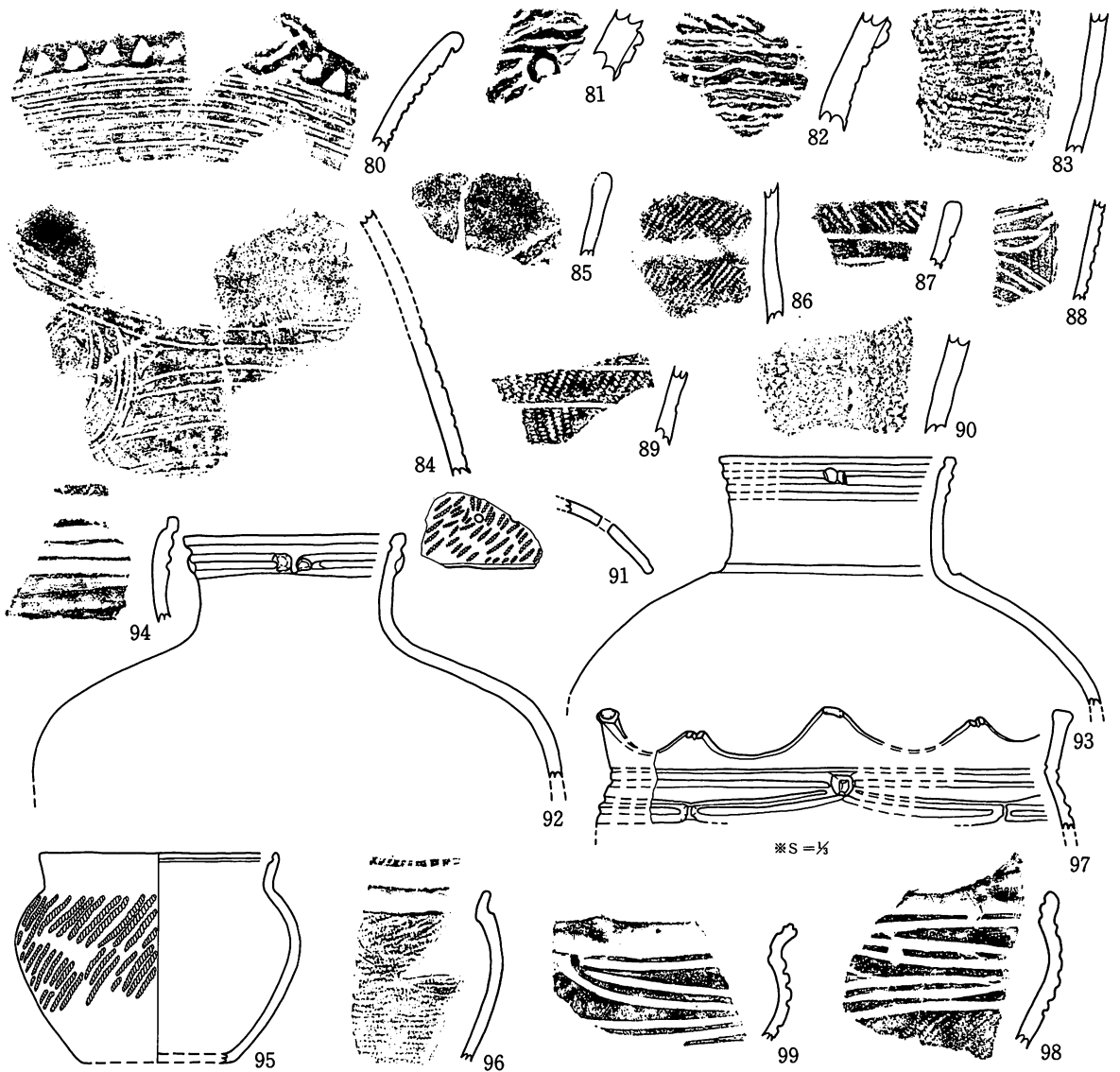
第38図 縄文土器 (1)



S=K

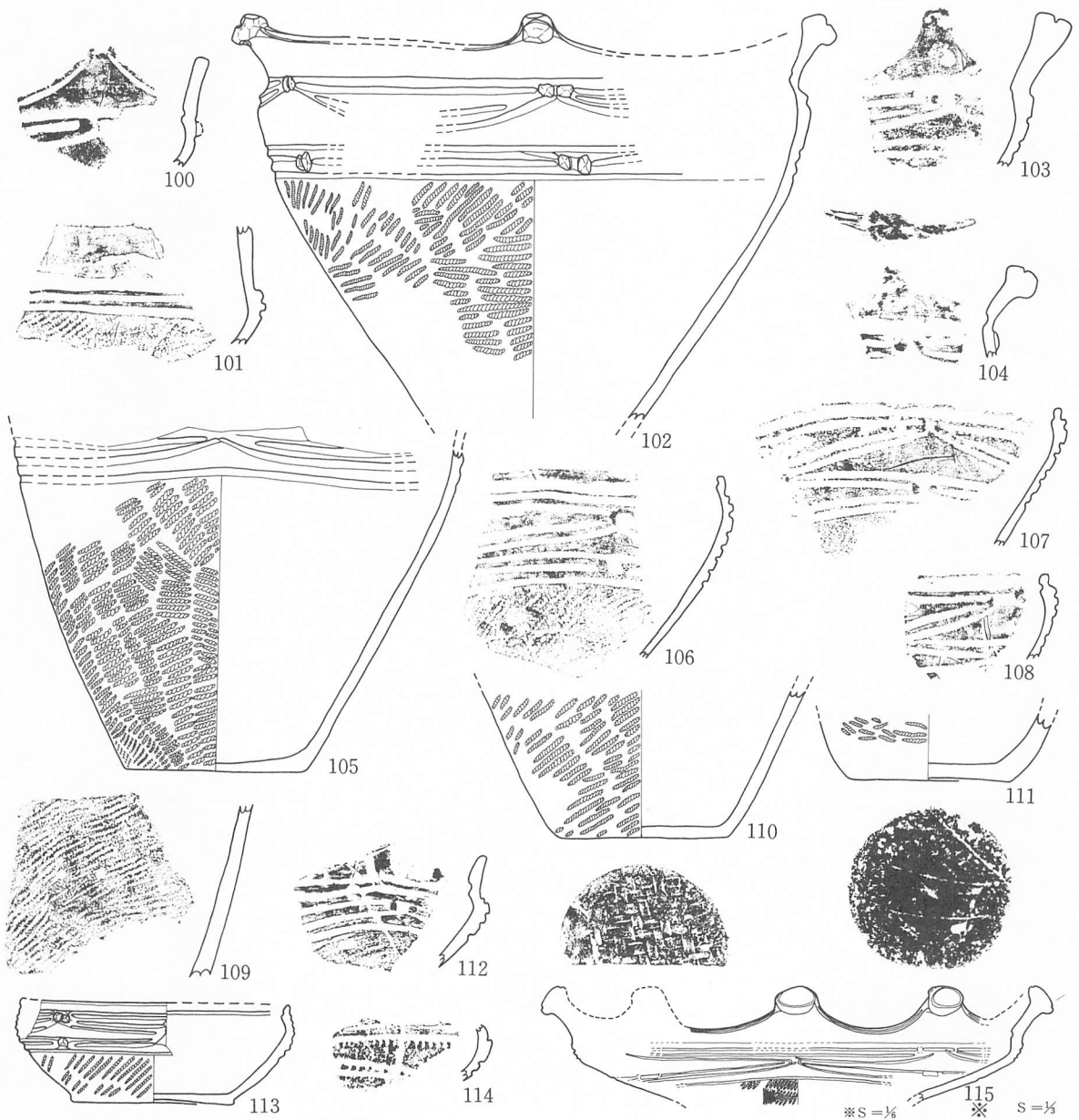
番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
57	C 15Ⅱ層	深鉢	口縁部	羽状縄文	ナデ	繊維少	(1)-I-1-c		20-57
59	F 15Ⅱ層	深鉢	胴部	羽状縄文	ナデ	繊維多	(1)-I-1-c		20-59
60	F 15Ⅱ層	深鉢	口縁部	羽状縄文 同一原体結束 口唇部指頭押圧痕	ナデ	繊維	(1)-I-1-c		20-60
61	F 15Ⅱ層	深鉢	口縁部	結束羽状縄文	ナデ	繊維	(1)-I-1-c		20-61
62	C 12Ⅰ層黒色土	深鉢	口縁部	縦絡文 口唇部指頭押圧痕	ナデ	繊維多	(1)-I-1-d		20-62
63	F 12Ⅱ層下部	深鉢	胴部	縦絡文	ナデ	繊維多	(1)-I-1-d		20-63
64	C 15Ⅱ層	深鉢	胴部	不整撚糸文	ナデ	繊維多	(1)-I-1-e		20-64
65	F 12Ⅰ層	深鉢	胴部	原体押圧痕2条	ナデ	繊維	(1)-I-1-f		20-65
66	G 6Ⅱ層	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナデ		(1)-I-2-a		20-66
67	C 12土盛FP	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナデ		(1)-I-2-a		20-67
68	F 12Ⅱ層下部	深鉢	口縁部	単節斜縄文	ナデ		(1)-I-2-a		20-68
69	C 12土盛FP	深鉢	口縁部	縦位方向羽状縄文	ナデ		(1)-I-2-b		20-69
70	F 12Ⅱ層	深鉢	口縁部	横位方向撚糸文 縦位方向縦絡文 口唇部指頭押圧痕	ナデ		(1)-I-2-c		20-70
71	F 12Ⅱ層	深鉢	口縁部	陰帯→沈線→縄文 冨部内湾 内面スス付着大木6式	ミガキ		(1)-I-2-d		20-71
72	F 12Ⅱ層	深鉢	口縁部	陰帯 大木6式	ナデ		(1)-I-2-d		20-72
73	表土一括黒色Ⅱ層	深鉢	口縁部	ボタン状→沈線文 大木6式	ナデ		(1)-I-2-d		20-73
74	F 12Ⅰ層	深鉢	口縁部	三角状沈線文 同一個体 大木6式	ナデ		(1)-I-2-d		20-74
75	F 12Ⅰ層	深鉢	胴部	縦位縦絡文 (No.23同様) 内面スス付着	ナデ	ナメ	(1)-I-2-d		20-75
76	表土一括	深鉢	胴部	液状沈線文+山形沈線文 大木6式	ナデ		(1)-I-2-d		20-76
77	表土一括	深鉢	胴部	三角状沈線文 大木6式	ナデ		(1)-I-2-d		20-77
78	F 12Ⅱ層下部	深鉢	胴部	縦位沈線文+ボタン状 大木6式	ナデ		(1)-I-2-d		21-78
79	I 12Ⅰ層	深鉢	胴部	胴部~脚部 大木6式	ナデ		(1)-I-2-d		21-79

第39図 縄文土器 (2)



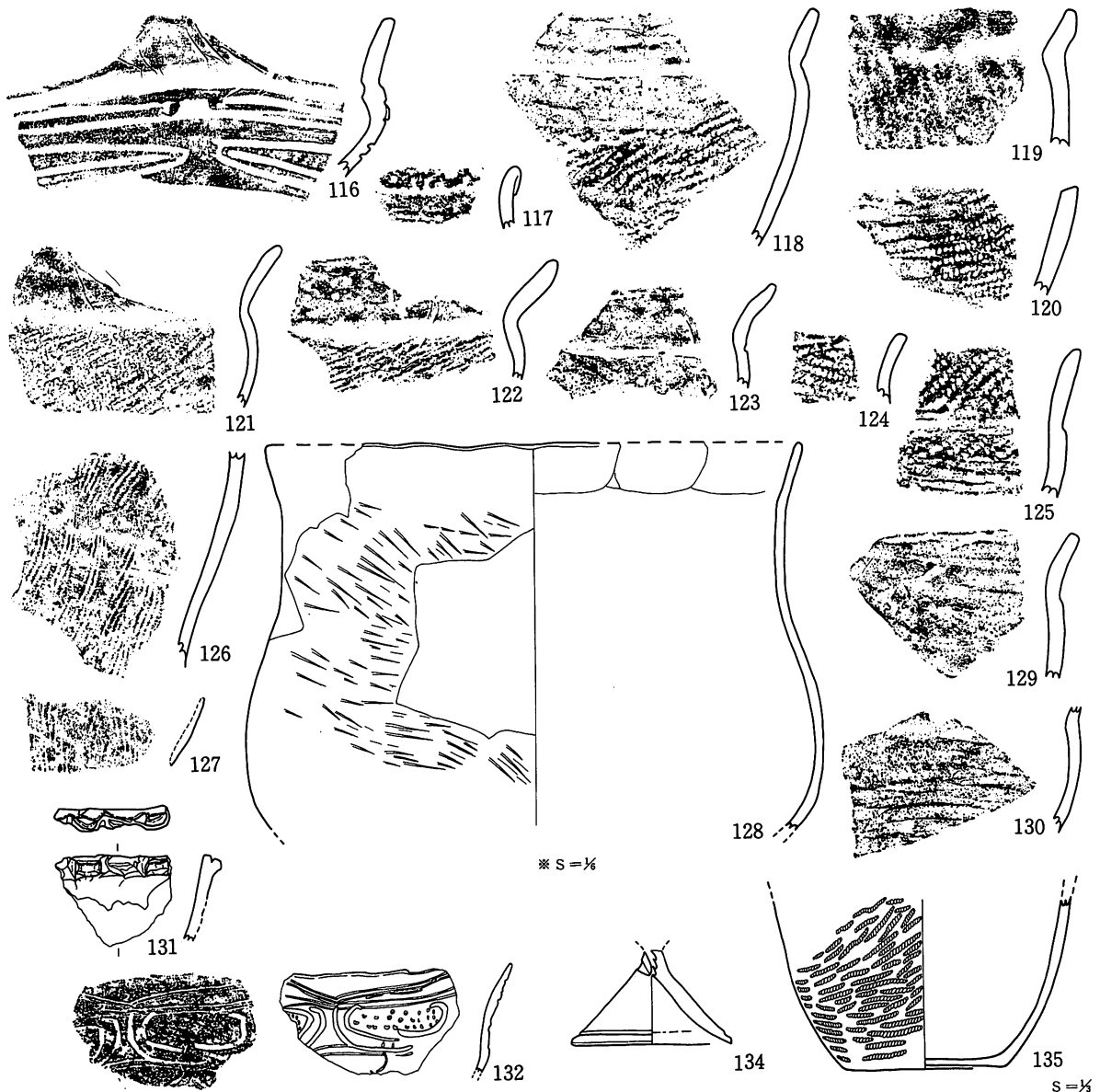
番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
80	F 12 II層下部	深鉢	口縁部	刺突文→隆帯→平行沈線文 大木7式	ナデ		(1)-II-1		21-80
81	F 12 I層	深鉢	頸部	隆帯→波状沈線 同一個体	ナデ		(1)-II-2		20-81
82	F 12 I層	深鉢	胴部	波状沈線文	ナデ		(1)-II-2		20-82
83	C 12土盛FP	深鉢	胴部	縦結文	ナデ		(1)-II-3		21-83
84	F 2 II層	壺?	胴部	磨消→沈線文 十腰内Ⅲ式	ナデ		(1)-III-1		21-84
85	D 12 II層	深鉢	口縁部	磨消→縄文	ナデ		(1)-III-2	口轉部欠損	21-85
86	I 12第3トレンチ斜面	壺	口縁部	単節斜縄文→磨消	ナデ		(1)-III-2		21-86
87	D 12 II層	深鉢	口縁部	単節斜縄文→磨消 折返し口縁部	ナデ		(1)-III-3		21-87
88	F 2 II層	深鉢	胴部	単節斜縄文・沈線文	ナデ		(1)-III-3		21-88
89	F 9土盛黒色土	深鉢	胴部	単節斜縄文・沈線文	ナデ		(1)-III-3		21-89
90	I 12投石上土盛	深鉢	胴部	擬似縄文	ナデ		(1)-III-4		21-90
91	I 9 II層下部	壺	口縁部	単節斜縄文 口縁部穿孔	ミガキ		(2)-I-1		21-91
92	I 12石盛上	壺	口縁部	無文 口縁部平行沈線文	ナデ		(2)-II-1		21-92
93	I 12第3トレンチ	壺	口縁部	無文 口縁部平行沈線文	ナデ		(2)-II-1		21-93
94	I 12 I層	壺	口縁部	無文 口縁部平行沈線文 口唇部単節縄文	ナデ		(2)-II-1		21-94
95	F 8 II層	甕	口縁-胴部	無文→単節斜縄文 口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-VI-1	下部欠損	21-95
96	トレンチベルト	甕	口縁-胴部	無文→単節斜縄文 口縁部刺突文	ミガキ		(2)-VI-1		21-96
97	I 12第3トレンチ土盛	鉢	口縁部	波状口縁→変形工字文	ミガキ		(2)-III-1		21-97
98	F 9土盛黒色土	鉢	口縁部	変形工字文→単節斜縄文口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-2		21-98
99	第4トレンチベルト	鉢	口縁部	変形工字文 口縁部・頸部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-2		21-99

第40図 縄文土器(3)・弥生土器(1)



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
100	I12第3トレンチ土盛	鉢	口縁部	変形工字文 口縁部・頸部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-2		21-100
101	I 9 投石中	鉢	口縁部	無文→沈線→単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-2		21-101
102	I 9 I層	鉢	胴部	変形工字文→単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-3		21-102
103	I12投石上土盛	鉢	口縁部	変形工字文 口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-3		21-103
104	G 6 II層	鉢	口縁部	変形工字文 頸部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-3		21-104
105	F 6 II層埋直	鉢	胴部	変形工字文→単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-4	口縁部欠損	21-105
106	C 9 III層	鉢	口縁部	変形工字文→単節斜縄文口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-4		22-106
107	I12第3トレンチ斜面	鉢	口縁部	変形工字文 口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-4		21-107
108	I12第3トレンチ土盛	鉢	口縁部	変形工字文 口縁部内側沈線1本	ミガキ		(2)-III-4		21-108
109	I12投石中	鉢	胴部	単節斜縄文 底部付近	ミガキ		(2)-III-4		22-109
110	E 5 埋設	鉢	底部	網代痕	ミガキ		(2)-III-4		22-110
111	F 6F 7第1トレンチII層	鉢	底部	木葉痕	ミガキ		(2)-III-4		22-111
112	F 8 II層	浅鉢	口縁部	変形工字文→単節斜縄文頸部内側沈線1本	ミガキ		(2)-VI-1		22-112
113	I12土盛	浅鉢	口縁・底部	変形工字文→単節斜縄文	ミガキ		(2)-VI-2		22-113
114	表土一括	浅鉢	口縁部	変形工字文→帯刺突文	ミガキ		(2)-VI-2		22-114
115	I12土盛	高坏	口縁部	変形工字文→単節斜縄文	ミガキ		(2)-V		22-115

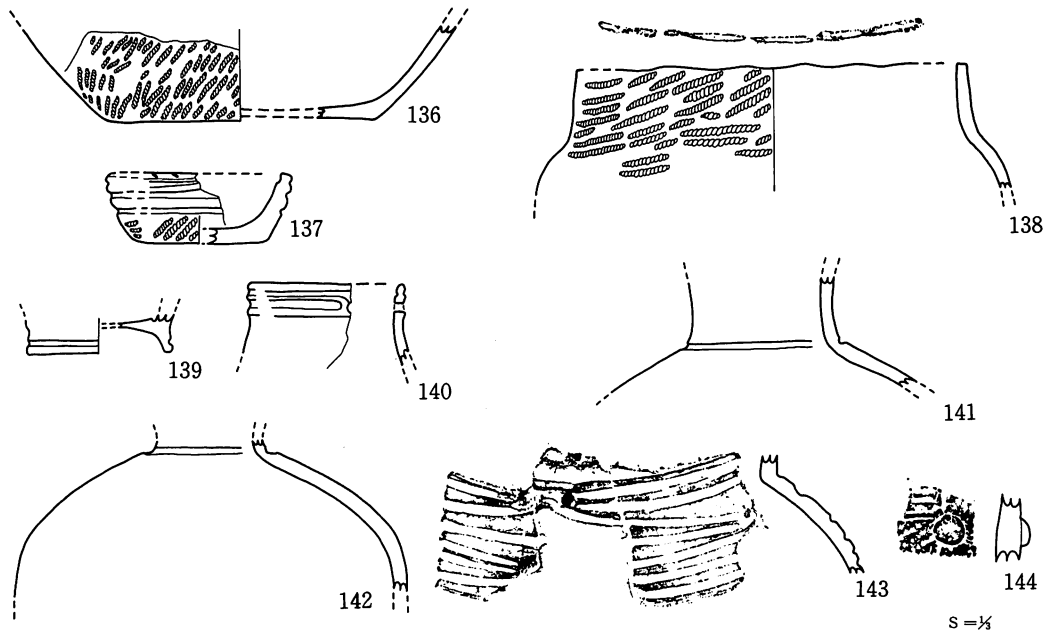
第41図 弥生土器(2)



番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分	類	備考	写真図版
116	F 9 土盛黒色土	高 坏	口縁部	変形工字文 口縁部・頸部内側沈線 1 本	ミガキ		(2) - V			22-116
117	I 12 第 3 トレンチ	甕	口縁部	口唇部外側へ折返し	ナ デ		(2) - VI - 2			22-117
118	I 12 投石上	甕	口縁部	無文→単節斜縄文 口唇部単節縄文圧痕	ナ デ		(2) - VI - 2			22-118
119	I 12 投石上土盛	甕	口縁部	無文→単節斜縄文 口唇部削りによる調整	ナ デ		(2) - VI - 2			22-119
120	F 6 II 層	甕	胴 部	単節斜縄文 縄文施文後寛状工具で削り調整	ナ デ		(2) - VI - 2			22-120
121	F 3 I 層	甕	口縁部	無文→単節斜縄文	ナ デ		(2) - VI - 4			22-121
122	第 3 ヘルト土盛	甕	口縁部	無文→単節斜縄文	ナ デ		(2) - VI - 4			22-122
123	I 9 I 層	甕	口縁部	無文→単節斜縄文 頸部沈線	ナ デ		(2) - VI - 4			22-123
124	I 12 第 3 トレンチ土盛	甕	口縁部	単節斜縄文 口縁端部刺突文	ナ デ		(2) - VI - 5			22-124
125	I 12 投石上	甕	口縁部	単節斜縄文	ナ デ		(2) - VI - 5			22-125
126	D 15 II 層	甕	胴 部	単節斜縄文	ナ デ		(2) - VI - 5			22-126
127	C 15 II 層	甕	胴 部	単節斜縄文	ナ デ		(2) - VI - 5			22-127
128	I 12 石盛上	甕	口縁部	篋削りによる条痕文	ナ デ		(2) - VI - 6			22-128
129	I 12 投石上	甕	口縁部	篋削りによる条痕文	ナ デ		(2) - VI - 6			22-129
130	I 12 土盛	甕	胴 部	篋削りによる条痕文	ナ デ		(2) - VI - 6			22-130
131	I 9 II 層下部黒褐色土	甕	口縁部	隆帯文	ナ デ		(2) - VI - 7			22-131
132	I 12 投石上土盛	甕	口縁部	沈線文・刺沈文	ナ デ		(2) - VI - 8			22-132
134	I 12 投石中	蓋	口縁部	無文・口縁部沈線 1 本	ミガキ		(2) - I - 1			22-134

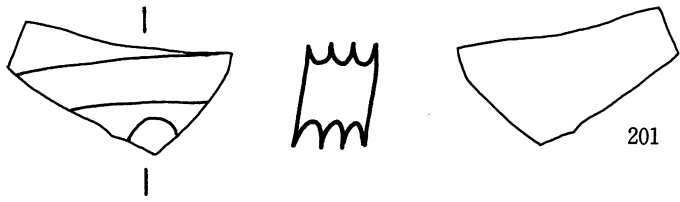
第42図 弥生土器 (3)



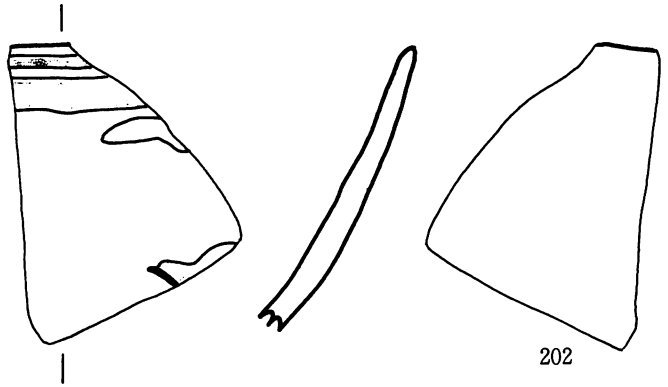


番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真図版
135	F 8 II層	鉢	胴部	単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-4		22-135
136	第3ベルトS石盛	鉢	胴部	単節斜縄文	ミガキ		(2)-III-4		22-136
137	F 5 II層	鉢	口縁~底部	平行沈線→単節斜縄文 袖珍土器	ミガキ		(2)-III-4	1/4残存	22-137
138	I 12第3トレンチ土盛	甕	口縁部	単節斜縄文	ナデ		(2)-VI-5		22-138
139	C 15 II層	鉢	脚部	無文	ミガキ		(2)-V-4		22-139
140	I 12投石中	壺	口縁部	無文 口縁部平行沈線文 穿孔痕	ナデ		(2)-II-1		22-140
141	I 12投石上土盛	壺	胴部	無文	ナデ		(2)-II-1		22-141
142	F 8 II層	壺	胴部	無文	ナデ		(2)-II-1		22-142
143	I 12土盛	壺	胴部	胴部上半変形工字文	ナデ		(2)-II-2		22-143
144	表土一括	鉢	胴部	ボタン状粘土瘤貼付	ミガキ		(2)-III-3		22-144

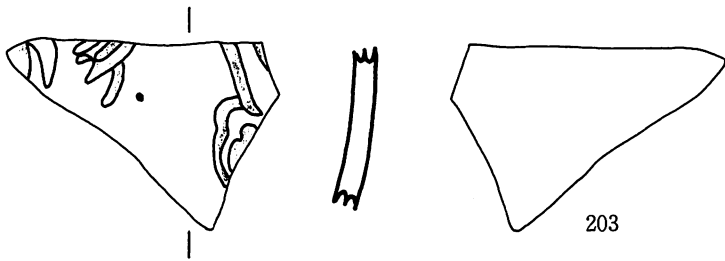
第43図 弥生土器(4)



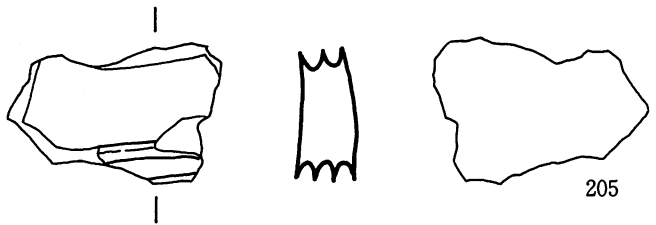
201



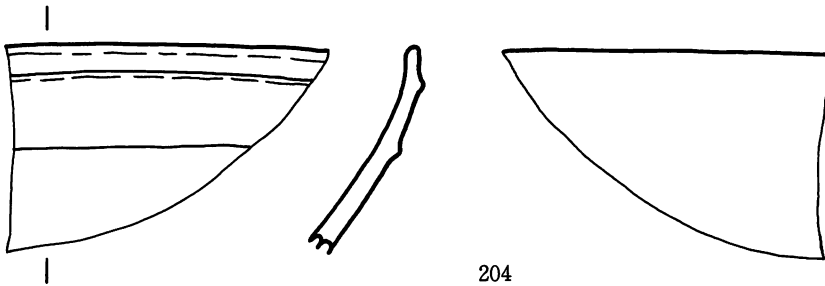
202



203



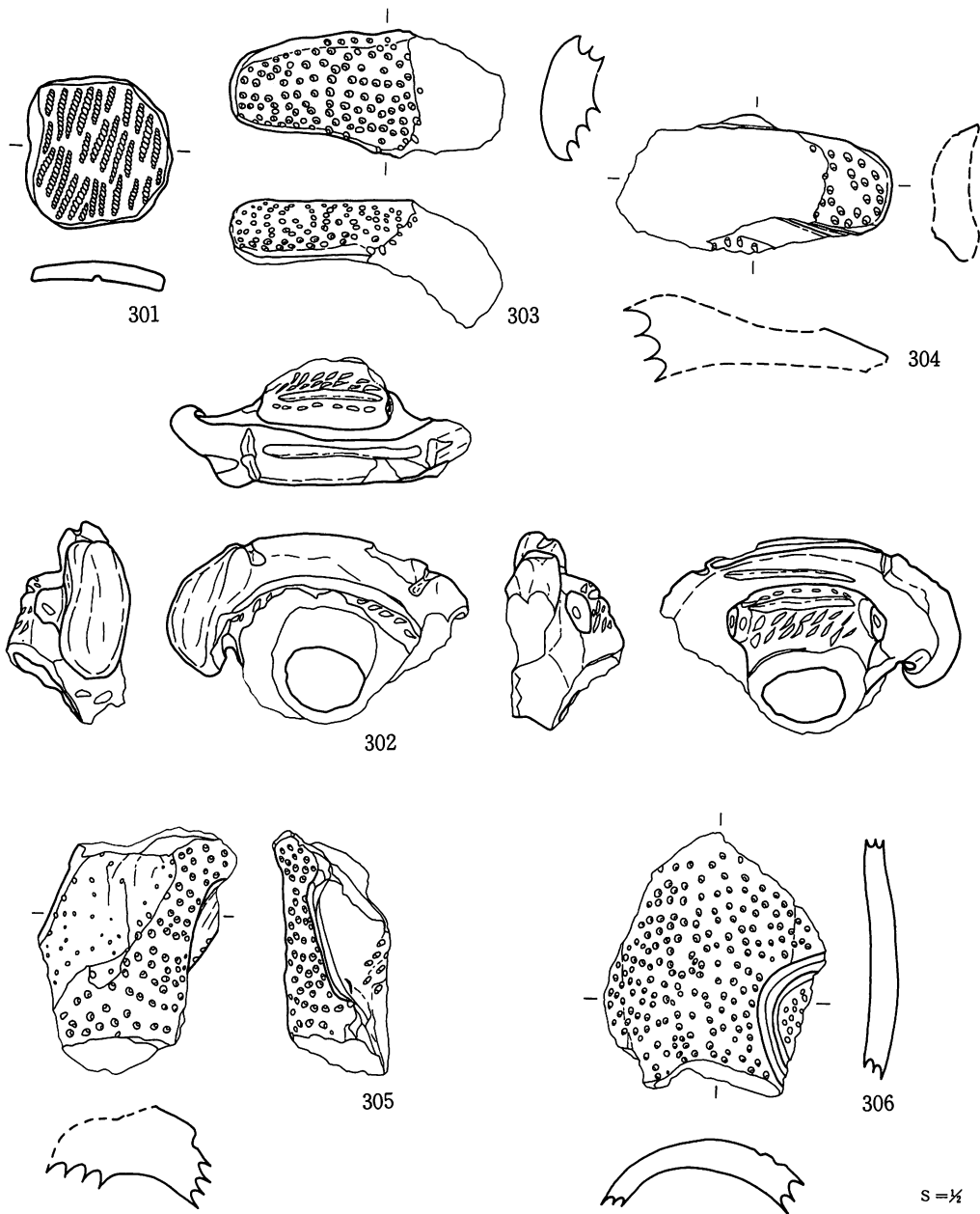
205



204

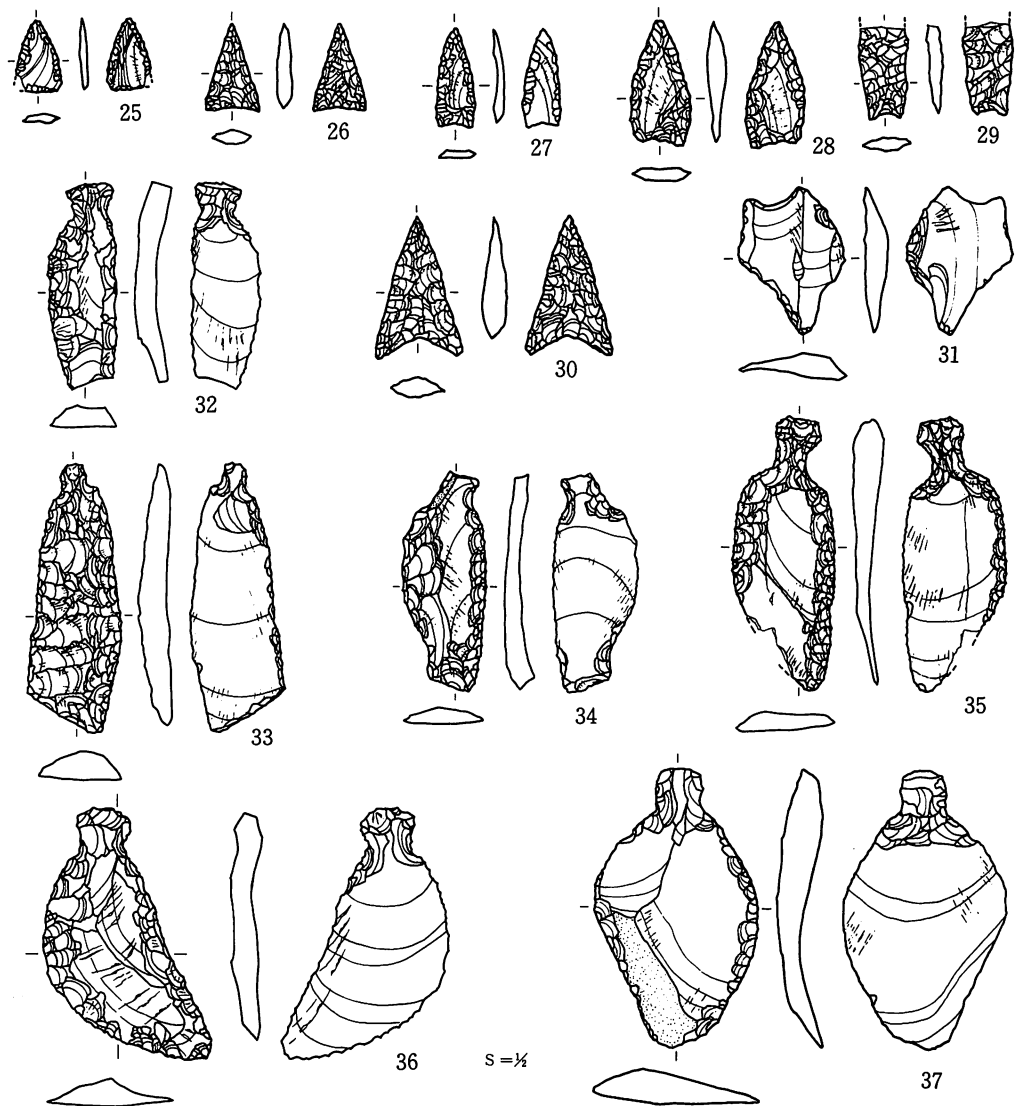
S=4

第44图 陶磁器



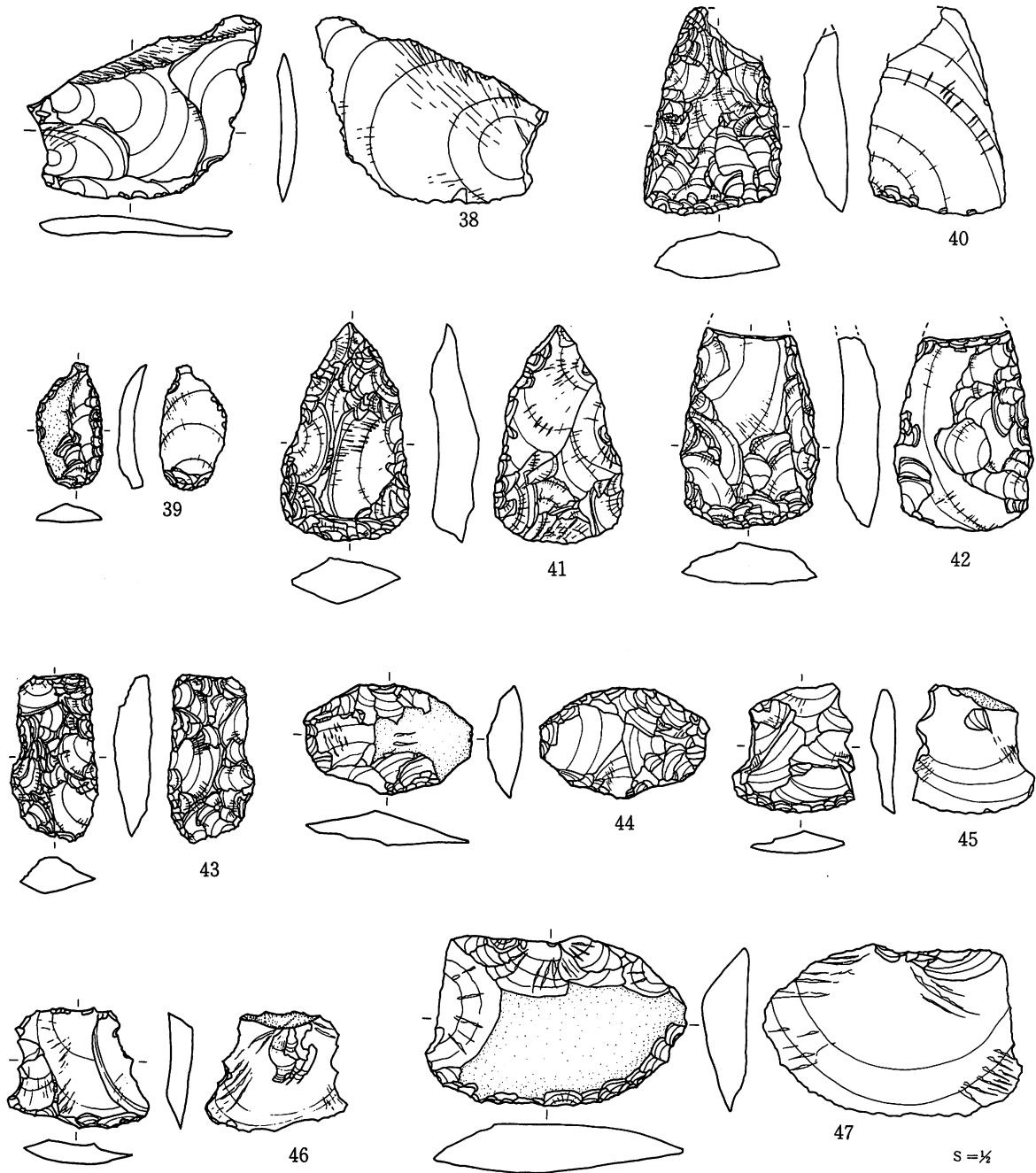
番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			特 徴	備 考	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ			
301	I 9 I 層	円 盤 状	4.1	4.0	0.5	裏面に穿孔痕	単節縄文	24-301
302	E 8 II 層	土 偶	5.4	8.3	3.2	頭部 顔部欠損	沈線文・刺突文	24-302
303	G 6 II 層	土 偶	3.5	7.6	1.4	腕部	同一個体 刺突文	24-303
304	G 9 II 層	土 偶	3.8	7.5	1.3	腕部	中空土偶 刺突文・沈線文・磨消文	24-304
305	F 9 土盛	土 偶	6.8	5.4	1.9	胴部?	刺突文・沈線文・磨消文	24-305
306	E 5 I 層	土 偶	7.2	6.1	0.8	胴部?	中空土偶 刺突文・沈線文	24-306

第45図 円盤状土製品・土偶



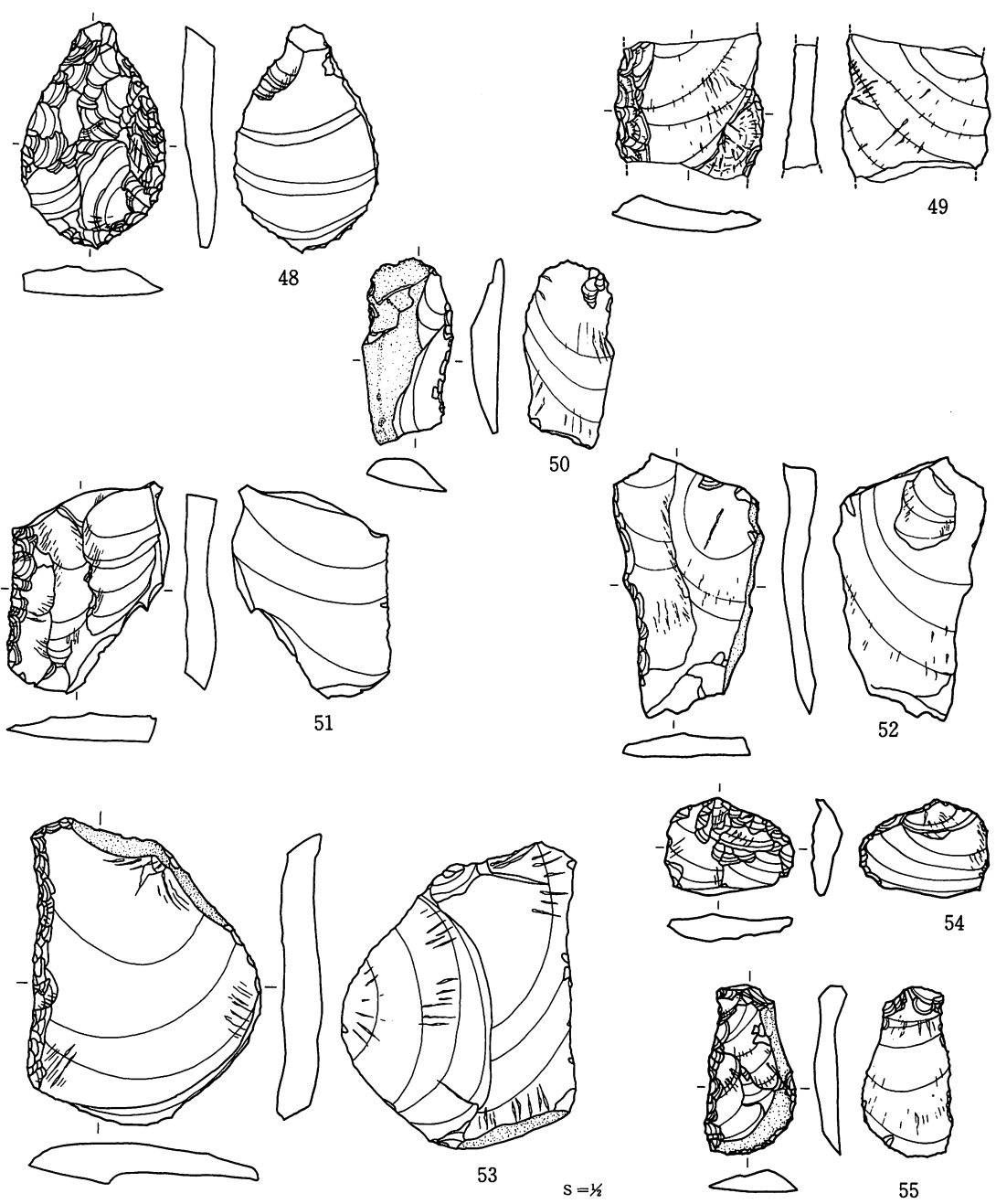
番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
25	表土一括	石 鏃	1.9	1.2	0.2	0.4	黒燧石		(1)-I-1	25-25
26	F 12 II 層下部	石 鏃	2.3	1.5	0.4	0.8	流紋岩		(1)-I-1	25-26
27	C 15 III 層	石 鏃	2.6	1.1	0.3	0.65	流紋岩		(1)-I-2	25-27
28	F 12 II 層	石 鏃	3.3	1.6	0.5	2.35	流紋石		(1)-I-2	25-28
29	C 15 II 層第 2 トレンチ	石 鏃	(2.4)	1.4	0.4	1.25	硬質泥岩	先端部欠損	(1)-I-2	25-29
30	F 12 I 層	石 鏃	3.7	2.3	0.7	3.05	燧岩質チャート		(1)-I-2	25-30
31	F 15 II 層	石 鏃	3.9	2.3	0.6	5.05	凝灰質硬質泥岩		(2)	25-31
32	表土一括	石 匙	5.2	1.8	0.6	8.1	硬質泥岩	先端部欠損	(3)-I-1	25-32
33	C 15 II 層	石 匙	7.1	2.4	0.7	13.8	凝灰質硬質泥岩		(3)-I-1	25-33
34	表土一括	石 匙	5.8	2.3	0.6	8.0	硬砂岩	先端部欠損	(3)-I-1	25-34
35	表土一括	石 匙	7.2	2.7	0.8	11.15	粘板岩 ホルンファルス	刃部一部欠損	(3)-I-2	25-35
36	I 12 投石中	石 匙	6.6	3.2	0.7	15.85	凝灰質硬質泥岩	刃部先端部欠損	(3)-I-2	25-36
37	表土	石 匙	7.3	4.3	1.0	26.7	燧岩質チャート		(3)-I-2	25-37

第46図 石鏃・石鏃・石匙 (1)



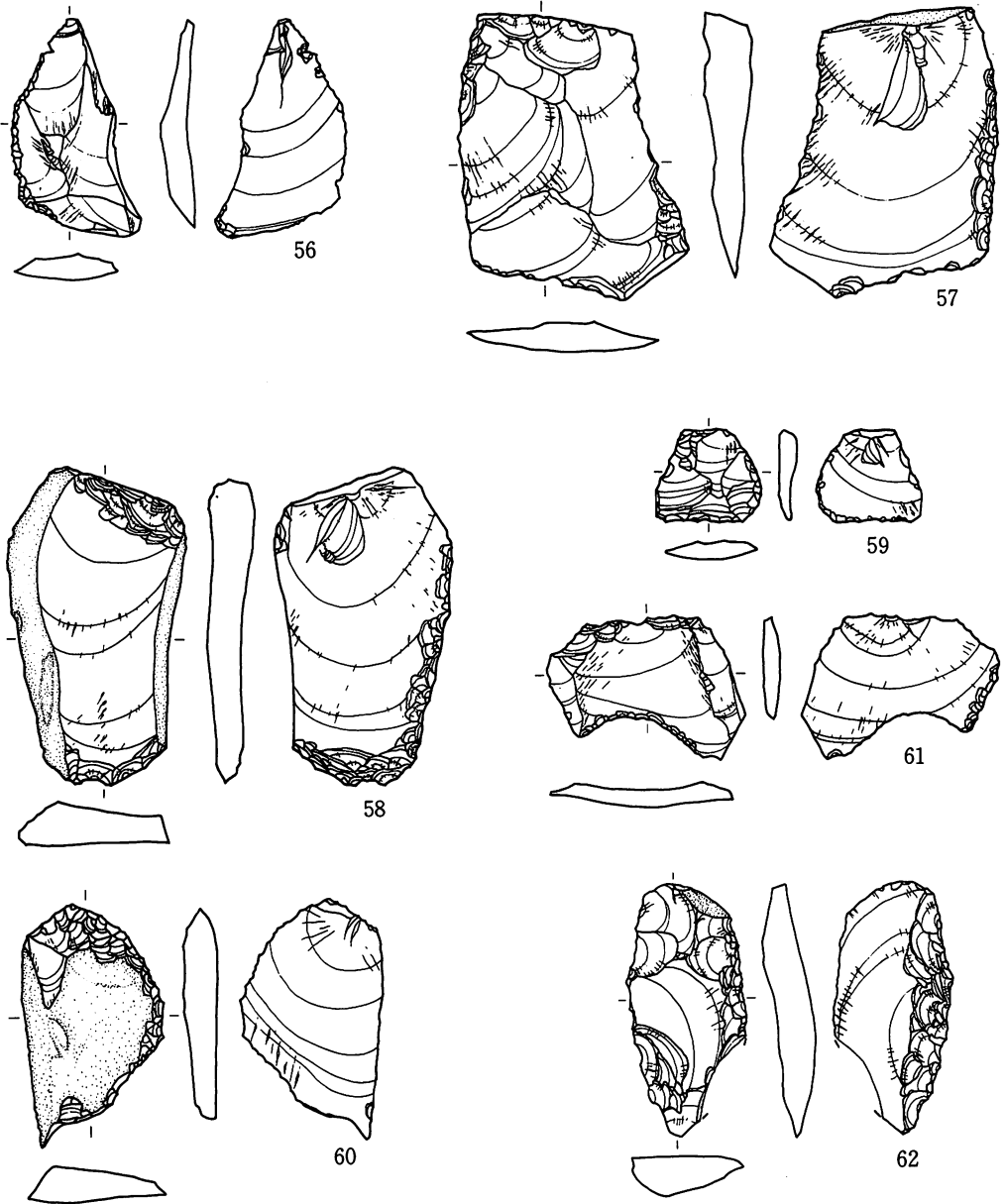
番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴 ・ 備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
38	D 15Ⅱ層	石 匙	7.4	4.5	0.5	18.0	凝灰質硬質泥岩		(3)-I-3	25-38
39	D 12Ⅱ層	石 匙	3.7	2.0	0.5	4.8	珉質泥岩		(3)-I-3	25-39
40	C 15Ⅱ層	石 篋	6.2	4.2	1.4	32.5	凝灰質硬質泥岩	基部一部欠損	(4)-1	25-40
41	F 15Ⅱ層	石 篋	6.5	3.9	1.4	33.1	凝灰質硬質泥岩		(4)-1	25-41
42	第1トレンチ層F6・7	石 篋	6.0	4.2	1.2	32.45	凝灰質硬質泥岩	基部欠損	(4)-1	25-42
43	F 12Ⅱ層	石 篋	5.0	2.6	1.1	13.85	流紋岩		(4)-2	25-43
44	F 15Ⅱ層	ピエスエスキュー	5.0	3.2	0.9	14.85	珉質泥岩	ステップフレーキング	(5)	25-44
45	D 12Ⅱ層	不定形	3.8	3.5	0.7	8.85	珉質泥岩	打面と反対側に刃部	(6)-I-1-a	25-45
46	F 15Ⅱ層	不定形	3.6	4.2	0.7	11.4	凝灰質硬質泥岩	打面と反対側に刃部	(6)-I-1-a	25-46
47	F 12Ⅱ層	不定形	5.1	7.5	1.4	65.0	凝灰質硬砂岩		(6)-I-1-b	27-47

第47図 石匙(2)・石篋・ピエスエスキュー・不定形石器(1)



番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長  さ	幅	厚  さ					
48	C15Ⅱ層第2トレンチ	不定形	6.6	4.2	0.9	24.75	珪質泥岩	上部折りとり、打突により形状を整える	(6)-I-1-b	25-48
49	E 5 埋設	不定形	(4.3)	4.4	1.0	18.85	凝灰質硬質泥岩	サイドスクレーパー	(6)-I-1-c	25-49
50	D 12 ベルトⅡ層	不定形	5.5	2.7	0.8	13.6	輝緑凝灰質チャート	サイドスクレーパー	(6)-I-1-c	25-50
51	F 15Ⅱ層	不定形	6.0	4.5	0.9	32.1	硬質泥岩	サイドスクレーパー	(6)-I-1-c	26-51
52	F 12Ⅱ層	不定形	7.7	4.1	0.9	26.5	凝灰質硬質泥岩	サイドスクレーパー	(6)-I-1-c	26-52
53	I 12土盛	不定形	8.8	6.6	1.2	160	硬質泥岩	サイドスクレーパー	(6)-I-1-c	26-53
54	F 15Ⅱ層	不定形	2.2	3.7	0.8	7.6	凝灰質硬質泥岩	ヒンジクラチャの一部分に刃部	(6)-I-1-a	26-54
55	C15Ⅱ層第2トレンチ	不定形	4.9	2.6	0.7	9.1	珪質泥岩		(6)-II-1	26-55

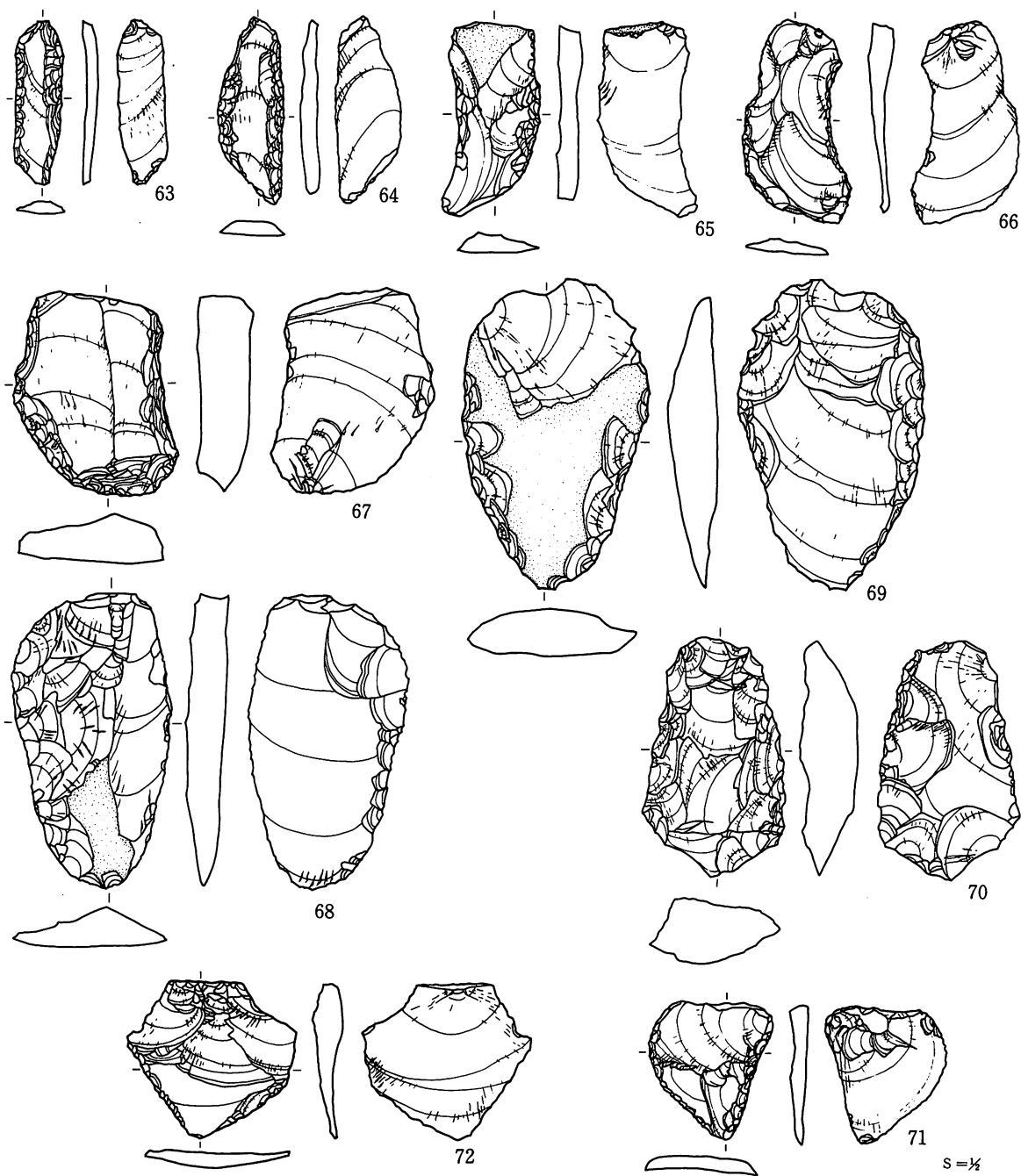
第48図 不定形石器 (2)



S = 1/2

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
56	第3ベルトS石盛	不定形	5.8	2.8	0.75	13.5	凝灰質硬質泥岩		(6)-II-1	26-56
57	F12II層	不定形	7.7	6.2	1.3	48.9	凝灰質硬質泥岩		(6)-II-1	26-57
58	I12投石中	不定形	8.5	4.8	1.2	54.3	硬質泥岩		(6)-II-1	26-58
59	F12第3トレンチII層	不定形	2.4	2.8	0.4	3.9	硬質泥岩		(6)-II-1	26-59
60	D12II層	不定形	6.5	3.8	0.9	26.45	珪質泥岩		(6)-II-1	26-60
61	F15II層	不定形	3.8	5.3	0.5	9.55	凝灰質硬質泥岩		(6)-II-1	26-61
62	F8II層	不定形	6.7	3.2	1.0	19.95	凝灰質硬質泥岩		(6)-II-2	26-62

第49図 不定形石器 (3)

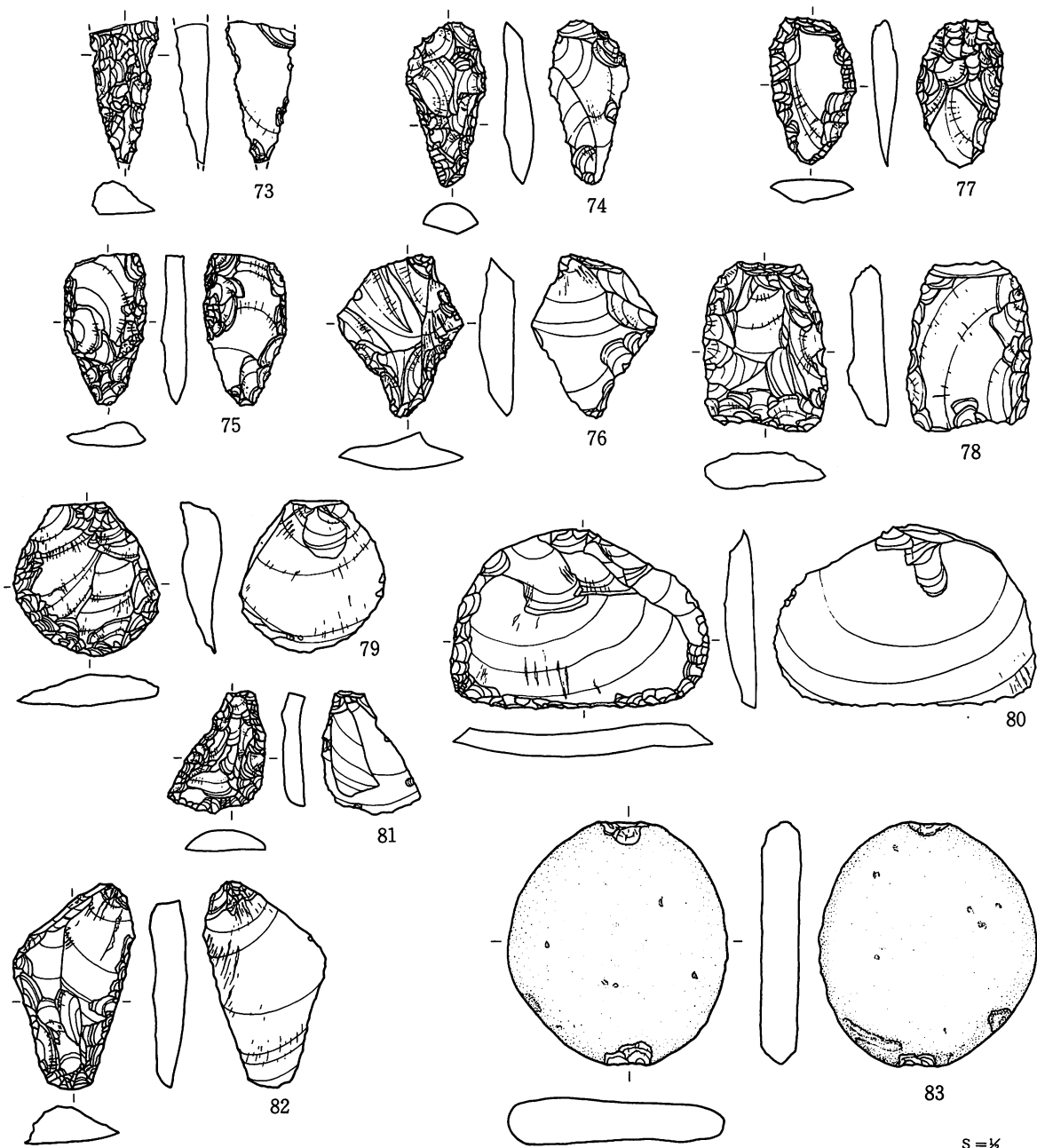


S = 1/2

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
63	F 12Ⅱ層下部	不定形	5.0	1.5	0.4	3.45	硬質泥岩		(6)-Ⅱ-2	26-63
64	F 6Ⅱ層	不定形	5.6	2.0	0.5	6.2	硬質泥岩		(6)-Ⅱ-2	26-64
65	F 12Ⅱ層下部	不定形	5.8	2.8	0.7	13.0	凝灰質硬質泥岩		(6)-Ⅱ-2	26-65
66	F 12Ⅱ層	不定形	5.1	3.3	0.7	9.55	凝灰質硬質泥岩		(6)-Ⅱ-2	26-66
67	D 12ベルトⅡ層	不定形	6.2	5.0	1.7	54.05	珪質泥岩	石斧の下端部折損?	(6)-Ⅱ-2	26-67
68	F 12Ⅱ層下部	不定形	8.9	4.8	1.2	50.15	硬質泥岩		(6)-Ⅱ-2	26-68
69	F 6Ⅱ層	不定形	9.3	5.7	1.5	82.0	凝灰質硬砂岩		(6)-Ⅱ-2	27-69
70	F 6Ⅱ層	不定形	7.2	4.3	1.8	55.7	凝灰質硬質泥岩		(6)-Ⅱ-2	27-70
71	F 12第3トレンチⅡ層	不定形	3.9	4.3	0.4	7.6	凝灰質硬質泥岩		(6)-Ⅱ-3	27-71
72	F 15Ⅱ層	不定形	4.7	5.2	0.8	12.45	凝灰質硬質泥岩		(6)-Ⅱ-3	27-72

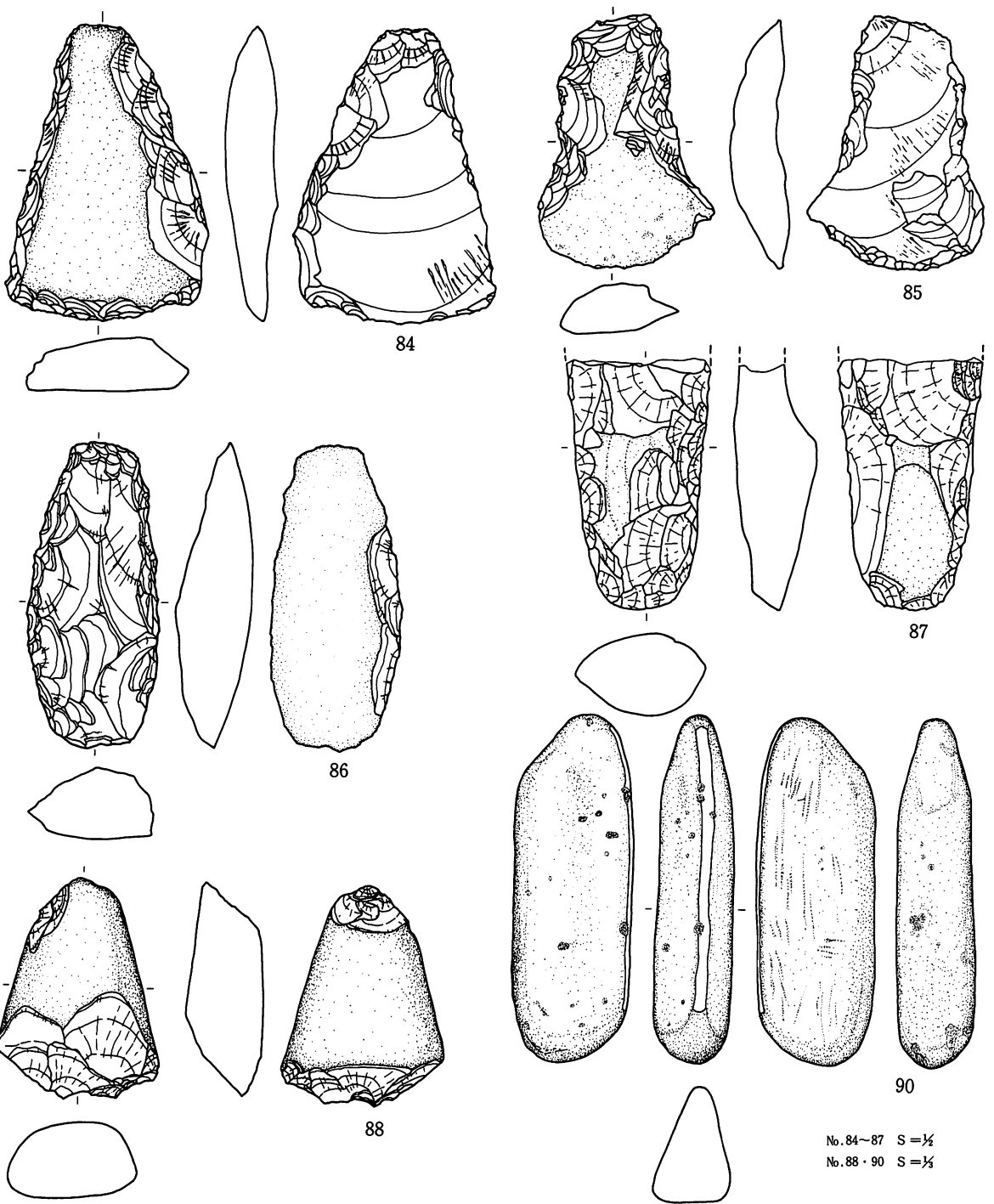
第50図 不定形石器 (4)





番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長  寸	幅	厚  寸					
73	C 15Ⅱ層	不定形	(4.2)	2.1	1.1	8.05	珪質泥岩		(6) - Ⅱ - 3	27-73
74	F 15Ⅱ層	不定形	4.9	2.4	0.9	7.7	珪質泥岩	鋸齒縁状石器	(6) - Ⅱ - 3	27-74
75	F 12Ⅱ層下部	不定形	4.5	2.5	0.7	9.55	硬質泥岩	鋸齒縁状石器	(6) - Ⅱ - 3	27-75
76	D 12ベルトⅡ層	不定形	4.9	3.7	1.0	14.5	硬質泥岩	鋸齒縁状石器	(6) - Ⅱ - 3	27-76
77	F 12Ⅱ層下部	不定形	4.4	2.5	0.7	7.45	凝灰質硬質泥岩		(6) - Ⅱ - 3	27-77
78	I 9Ⅰ層	不定形	5.1	3.8	1.2	25.1	硬砂岩		(6) - Ⅲ - 1	27-78
79	I 12Ⅰ層	不定形	4.6	4.4	1.2	20.0	珪質泥岩		(6) - Ⅲ - 2	27-79
80	F 15Ⅱ層	不定形	5.4	7.7	0.85	49.35	珪質泥岩		(6) - Ⅲ - 2	27-80
81	I 9Ⅱ層下部	不定形	3.7	2.7	0.6	6.7	珪質泥岩		(6) - Ⅲ - 3	27-81
82	D 12Ⅱ層	不定形	6.1	3.7	1.1	22.0	凝灰質硬質泥岩	エンドスクレーパー	(6) - Ⅲ - 3	27-82
83	F 12Ⅱ層	石  錘	7.3	6.5	1.2	80.0	両輝石安山岩		(7)	27-83

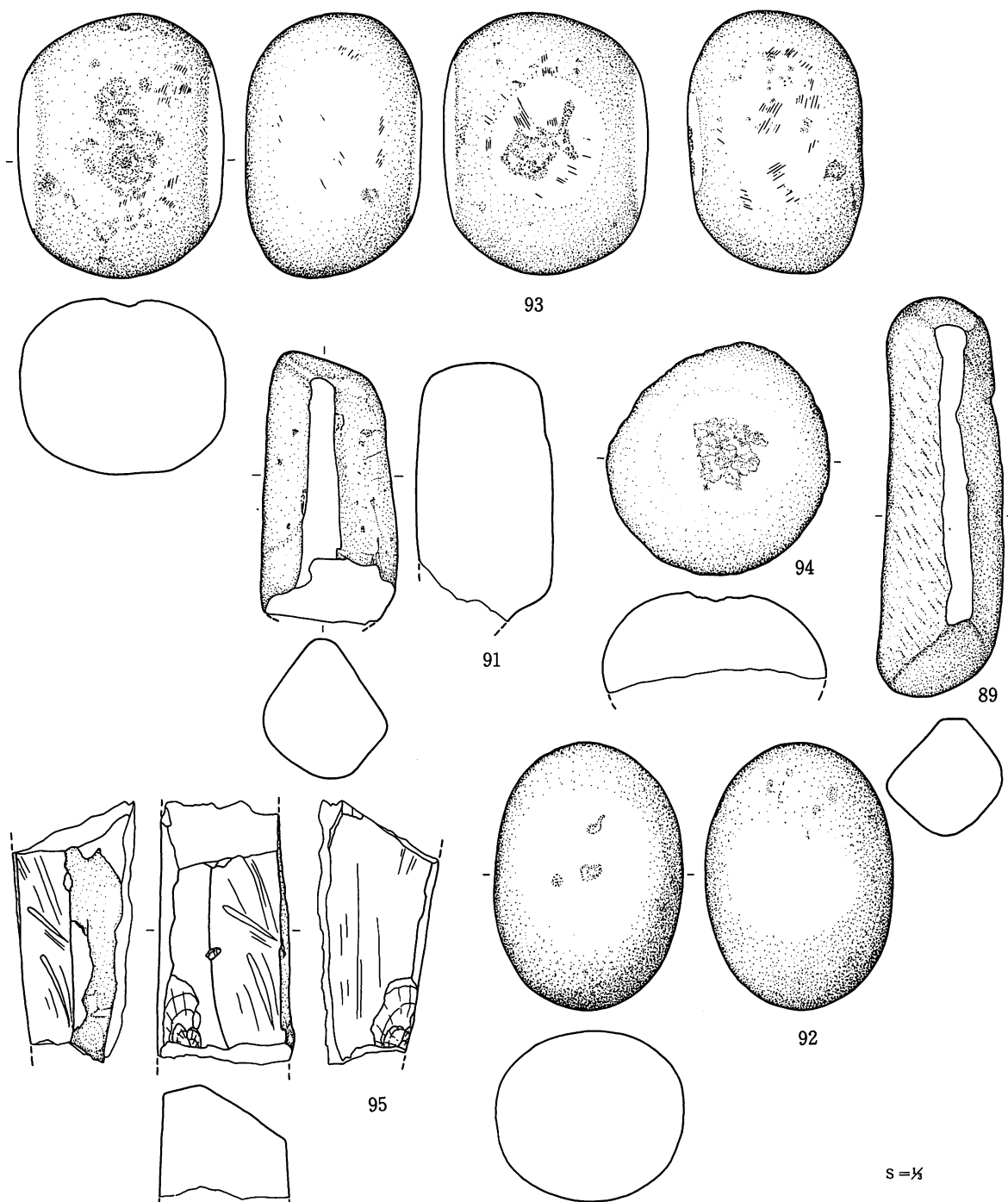
第51図 不定形石器 (5) ・石錘



No. 84~87 S=1/2  
 No. 88・90 S=1/3

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 さ	幅	厚 さ					
84	F 15 II 層	打製石斧	9.1	6.1	1.6	100	流紋岩		(8)-I-1	27-84
85	C 15 II 層	打製石斧	7.8	5.4	1.5	65.0	硬質泥岩		(8)-I-1	27-85
86	第1トレンチ層 F 6・F 7	打製石斧	9.5	4.2	2.3	100	硬砂岩	片面のみ加工	(8)-I-2	27-86
87	I 19 I 層	打製石斧	7.9	4.6	2.6	120	硬砂岩		(8)-I-3	27-87
88	F 15 II 層	礫 器	10.3	7.6	3.6	300	硬砂岩	チョッピング・トゥール状の形態	(9)	28-88
90	D 15 II 層	磨 石	16.2	5.6	5.3	420	両礫石安山岩		(10)-1	28-90

第52図 打製石斧・礫器・磨石 (1)



番号	出土地点・層位	器種	法 量 (cm)			重量(g)	石 質	特 徴・備 考	分 類	写真図版
			長 寸	幅	厚 寸					
89	F 12 II 層	磨 石	18.3	5.8	5.3	740	粘板岩ホルンフェルス		(10)-1	28-89
91	F 8 II 層	磨 石	12.5	6.2	6.2	645	流紋岩		(10)-1	28-91
92	C 9 III 層	磨 石	12.3	8.7	7.8	1220	両輝石安山岩		(10)-2	28-92
93	I 9 II 層	凹 石	12.0	9.5	8.1	1490	硬砂岩	磨石+凹石 2側面に研磨痕	(11)-1	28-93
94	I 12 I 層	凹 石	7.2	6.8	(2.6)	150	両輝石安山岩		(11)-2	28-94
95	C 15第2トレンチ一括	砥 石	8.1	4.3	3.4	165	流紋岩		(12)	28-95

第53図 磨石(2)・凹石・砥石

## VII. まとめ

### 1. 遺構について

#### (1). 竪穴住居跡

竪穴住居跡は18棟検出されている。平坦面では4棟、調査区北西側から西側の南東から南向き斜面上の標高83～84m付近に10棟と、北東側の南東向き斜面上の標高78～80m付近に4棟、同一等高線上の斜面に並列して検出された。その内、遺構の全体が確認できたのは平坦部の3棟であり、他の遺構については斜面上に構築されているためその大半は流失しており、壁や床面の一部を残すのみである。また、平坦面の4棟についても以前に畑地など、開削された際に削平されている。さらに、土壘状遺構の下層部の検出面からは縄文時代前期の竪穴住居跡が検出されていることから、土壘状遺構の構築の際に削平された可能性も考えられる。

規模は径約3m前後であり、平面形が円形を呈するもの12棟、不整の楕円形を呈するもの6棟である。壁高はいずれも低くて10～30cmである。炉の形態は、地床炉が14棟（縄文時代前期12・縄文時代後期1・弥生時代初頭1）・石囲炉が2棟（縄文時代前期1・弥生時代1）・土器埋設炉が1棟（縄文時代後期）、炉が検出されなかったもの1棟である。

遺構の時期は、出土遺物などから、縄文時代の竪穴住居跡16棟（前期14・後期2）、弥生時代初頭の竪穴住居跡は2棟である。弥生時代初頭の竪穴住居跡のうち、G5住居跡には遺構の南西方向に出入口状の施設を持っている。

遺構が重複関係にあるのは、F4-1住居跡とF4-2住居跡、E6住居跡とF6住居跡の4棟である。時期的には、F4-1住居跡とF4-2住居跡は時期が近く、F4-2住居跡に切られている。E6住居跡とF6住居跡は、E6住居跡からの出土遺物はないが、周辺からの出土遺物や規模、形態的特徴などから、時期差がかなりあるものと考えられ、F6住居跡に切られている。また、H11住居跡は、G11溝跡と重複関係にあり、溝跡に切られている。

遺構配置の特徴をまとめると、縄文時代前期の竪穴住居跡は調査区北西側から西側斜面上の標高83～84mに7棟、東側斜面上の標高78～80m付近に4棟、標高81m付近の中央部平坦面に3棟である。そのうち、土壘状遺構の下層部の検出面からは3棟が検出されている。遺構は、北西側から西側と東側斜面上に、向かい合って並列している。それらの遺構の中央部に平坦面がある。

弥生時代の竪穴住居跡は2棟検出されているが、そのうちの1棟（G5住居跡）は、全体の形状を残している。規模は、径3.5m、壁高は約8～10cmであり、平面形は、ほぼ円形を呈する。床面は平坦で、固くしまっている。炉は石囲炉であり、遺構の中央部からやや南側よりに位置

している。規模は径96×88cmである。焼土からは木炭が検出されている。柱穴は壁面に沿って8個検出されており、深さは10cm前後である。遺構の南西側部分には、幅約40cmの出入口状と推測される施設をもっている。さらに、埋土中からは、弥生時代を特徴付ける蓋形土器、変形工字文を文様の主体とし、一部磨消縄文を伴う鉢形土器、口縁部まで縄文を施文するか、あるいはヘラ削り状の調整がみられる甕形土器、器表面が無文でミガキ調整された壺形土器などが出土している。県内の類例と比較して見ると、円形プランの住居跡でやや小型であり、壁際に8本の小柱穴をもち、炉は石囲炉、出土した土器の多くは変形工字文を文様の主体としているなどから、弥生時代の住居跡としては比較的古い時期のものと考えられる。類例としては、径4m以下の比較的小規模で、壁際に小柱穴を7～10個をもの円形の住居跡のプランに極似するものと思われ、小田野氏の分類によれば、湯舟沢遺跡や馬場野Ⅱ遺跡など、県北地区に多く見られるA期（大洞A'式に後続し、青木畑式等に略併行）に属するものと思われる。しかし、プラン、規模、炉、柱穴などの各要素については、A期においてはバラつきがあり、一様ではない。北上市周辺では、弥生時代の遺物が出土している遺跡として、昭和56～57年度に調査された江釣子村の蔵屋敷遺跡があり、集石遺構とともに弥生時代初頭に比定される蓋形土器や甕形土器などが出土している。

## (2)土 坑

土坑は1基のみの検出である。埋土中には、多量の土器片や剥片石器が混入し、また、埋土上位からは木炭なども出土した。これは、近郊にある炭窯跡からの流れ込みによるものと思われ、遺構そのものの時期を直接決定するものではない。遺構の時期については不明であるが、埋土中から出土している土器片などから推定すると、縄文時代後期以降に比定されるものと思われる。遺構の性格については不明である。土坑の性格や用途については様々な見解があるが、検出した遺構については、その用途を明らかにする資料は検出されなかった。

## (3)炭窯跡

炭窯跡は5基検出されている。形状は、隅丸長方形のものが1基、隅丸方形のものが4基である。隅丸長方形のものが、調査区のほぼ中央より北東側平坦部、隅丸方形のものは、調査区の中央部よりの平坦部の南西側斜面沿いから検出されている。南西側斜面沿いの4基は、9m四方の範囲に、ほぼ等間隔に方形の位置に構築されている。炭窯跡は、今回検出された遺構そのものが構築された当時のものであるとはいえず、当時は壁高がもっと高かったものと思われる。遺構は、中世以降に需要が多くなった白炭を、簡易な方法で製炭することを目的に構築されたものと思われる。遺構は、製炭した白炭を取り上げた跡の残り部分であるか、あるいは

材料のナラ材を敷き詰めて製炭したが、何らかの都合で放置されたものかは不明であるが遺構の最下部までナラ材が埋土とともに堆積している。時期的には、平安時代の須恵器片が出土していることなどから、上限として古代以降としたが、遺構の性格や用途から推察すると、近世以降に多くの需要に給するために構築された簡易的な製炭跡と思われる。

#### (4)中世の二子城跡に関わるとされる遺構

二子城跡に関係すると推定される遺構は、土塁状遺構1条である。この遺構を挟んで、上位に1条と下位に2条、盛土を挟んで人為的に掘削された溝跡が検出されている。構築当時はおもって土塁は高かったものと思われる。調査区内でみられる土塁は、標高82～83m付近を約30m続き、西側斜面下端部付近でその様相は不明となるが、さらに西側へ巡っていたものと思われる。土塁の頂部はやや平坦面がみられるが、西側に至るほどに幅が狭くなり不明となる。土塁状遺構は、東北部の調査区外へとさらに延びており、調査区の頂部に建っている金刀比羅宮に登る階段を挟んで北へ巡り、清水斎園の入り口で不明となる。

調査区外の上位斜面上には、同様の土塁状遺構が2条確認される。調査区外の土塁状遺構は、標高が85～86m、89～90mの等高線付近に位置し、西側に巡りながら不明となる。このことから、防禦を目的として坊館跡と向かい合う東側斜面にのみ構築されたものと考えられる。

現在、頂部に金刀比羅宮が祀られている「物見ヶ崎館」は、東側山麓下端部に土塁状遺構3条を、西側の斜面下には深さが約1.5～2mの堀跡が観察されることから、中世和賀氏の居城となった二子城跡の一部をなす館跡であったと思われる。

#### (5)その他の遺構

調査区の南側平坦面で検出された集石状遺構は、東西が約25m、南北約12mの範囲にみられる。層厚は最大値で約42cm、最小値で約20cmである。集石上土層は比較的薄く、現況では土塁状の土盛りとして観察される。遺構の状況は、土塁状遺構の西側末端部から南東に向かうように南側斜面沿いに遺構が延びている。このことから、遺構はこの土塁状遺構の延長として、南側斜面沿いに構築されて、土砂の流失による崩壊を防ぐことと土塁的性格もつものとも思われるが、事実であるとすれば中世二子城跡の一部をなす館跡の遺構の一部ということになる。一方、堆積している礫の多くは、角礫であり、円礫も混入している。特にI9～I12グリットを中心として、遺構からは、弥生時代の土器片を主体に多量に出土している。土器片はかなり脆弱であり、その中には極めて小さい破片も含まれる。遺構の下部は地山となり、他の遺構が検出されていない。遺構の時期についての詳細は不明であるが、江釣子村の蔵屋敷遺跡からは同様の集礫遺構が検出され、弥生時代の蓋形土器、甕形土器、鉢形土器などが出土している。その報告書中の

遺構についての説明では、祭祀的性格を示唆している。しかし、本遺跡の集石状遺構が同様の性格をもつか否かは、規模や構造、範囲、出土土器の器種などからだけでは資料不足のため、判断することは無理がある。

## 2. 遺物について

### (1) 土器

土器の出土状況は、大きく分けると次のような傾向がみられる。

北西側斜面下から中央部平坦面の東側にかけて植物性繊維の多く含まれる縄文土器が出土している。中央部平坦面の南側斜面沿いから西側にかけては弥生時代の土器が出土している。特に、東側のF9～F15グリット付近の北側に縄文土器が、集石状遺構から西側のG6グリットを中心に弥生時代の土器が集中して出土する傾向がみられる。竪穴住居跡の構築されている位置とほぼ一致している。

縄文土器は、文様の特徴・施文方法・胎土の特徴などから分類した。第Ⅰ群は、縄文時代前期に属する土器を一括して扱った。出土した土器は極めて脆弱であり、接合・復元により一個体となるものはない。器種は深鉢形土器として扱った。分類については、胎土に植物性繊維の含まれる縄文土器群を1類、含まれない土器群を2類とした。器表面にはすべて縄文が施文されている。地文により項目をたてて分類した。

1類の土器は、胎土にすべて植物性繊維を含むことから器厚も必然的に厚くなる傾向にあり、焼成もあまり良いとはいえず、脆弱なものが多い。脆弱であるがゆえに、縄文が施文された器表面の文様がすり減っているものもある。器表面にはすべて縄文による施文がされているが、裏面に縄文または条痕をもつ土器はない。数量としては少ないが、口唇部に、原体による側面圧痕や刺突状の指頭押圧により施文されているものもある。口唇部は平坦に仕上げられるもの、やや丸みをもつものが見られる。文様は、単節斜縄文（RL・LR・O段多条）・複節斜縄文・綾絡文・不整撚糸文・羽状縄文により構成されている。1類の土器は胎土・文様の特徴などから縄文時代前期前葉に比定されるものと思われる。

2類の土器群は、器厚は厚く重量感を感じさせ、器表面はナデ調整がされ、粘土貼付による隆帯やボタン状突起、それらを中心に棒状工具・半截竹管による刺突文・沈線文を施文する方法、あるいは撚糸文や綾絡文などが施文される。裏面も同様の調整がされる傾向がある。縄文時代前期後葉にみられる大木6式に併行すると思われる土器群を一括した。第Ⅱ群は、出土点数が少ないが、口縁部に平行沈線文と三角形の刺突文、あるいは平行沈線文または山形沈線文が施文されるなど、縄文時代中期前葉に見られる大木7式に併行すると思われる土器群を一

括した。第Ⅲ群は、出土している破片数が極めて少ないが、縄文時代後期に属すると思われる土器群を一括した。

弥生時代の土器は、器種別に分類し、それを器形の特徴と施文方法により項目を設けて細分類した。そのなかで、鉢形土器と浅鉢形土器としたなかには台付鉢形土器、台付浅鉢形土器の可能性が含まれるものもある。事実、台部だけが出土しているものもある。出土した土器は、図上で一部復元したものもあるが、完形の土器は遺構内から出土した壺形の袖珍土器と接合により復元された甕形土器の2点のみである。器種別に見ると、鉢形土器・甕形土器の順になり、この時期に特徴的な高坏は器面観察で判断したものであり、口縁部と脚部を含めて3点のみと極めて少ないことは興味深い。

弥生時代を特徴付ける遺物として蓋形土器が3点出土している。いずれも完形のものはないが、2点は身部である。そのうちの1点は2個の穿孔痕をもつ。口縁部に蓋受けの穿孔痕をもつ壺形土器も出土している。本遺跡から出土している土器のなかで、甕形土器に特徴が見られる。甕形土器は、口縁部に縄文を地文として施文した後に、口縁部から頸部にかけて篋状工具によりケズリ調整がされている。口縁部は直立気味から緩やかに外反し、口唇部付近でやや内湾するものと、口縁部が強く外反し、肩部が膨らむものがある。器厚はいずれも厚くなる傾向がある。器表面に縄文が施文されるものは、口縁部が直立気味に立上り、肩部が緩やかに膨らむ土器は、器厚が比較的薄くなる傾向がある。甕形土器群のなかで、128は口縁部を指頭押圧による調整が行われた痕跡が、口縁部内側に瘤状の隆帯痕がある。さらに、器表面は頸部から肩部にかけては左上から右下へ、体部上半は左から右へやや斜めに篋状工具によってケズリ調整され、条痕状の文様を表している。器厚は極めて薄い。施文方法については、大渡野遺跡に見られる器表面にハケメ調整のある土器とモチーフは近いものと思われるが、施文方法についても類例が少ないため、詳細については不明である。時期的には、131・132の土器と近いものと思われるが、共伴して出土した甕形土器などから推測すると、時間的に遡る可能性が考えられる。132は器厚は極めて薄く、口縁部に楕円形に2本の浅い沈線を描き、その内側に刺突文を施文する。このようなモチーフは類例としては少ないが、縄文を施文する方法と極似しているものと考えられる。131・132は天王山式に比定されるものと思われる。弥生時代の土器については、鉢形土器などに見られる変形工字文と磨消縄文のモチーフから谷起島式・天王山式の時期が考えられる。

## (2)陶磁器

陶磁器は、5点出土している。磁器3点、陶器2点であり、いずれも小破片である。調査区の北側平坦部から出土している。201は青磁碗の胴部破片（明代の舶載品）であり15～16世紀



の範疇でとらえることができる。202は染付碗の口縁部破片（伊万里系）であり、時期的な幅をとらえて遡ってみても17世紀以降であると思われる。203は染付碗の胴部破片（明代の舶載品）であり、同様に遡ってみても16世紀以降であると思われる。204は緑釉陶器の口縁部破片（唐津系）であり、時期的な幅を考えても16世紀末葉以降は降らないものと思われる。205は白濁釉皿の胴部破片（志野系）であり、時期的な幅をとらえて遡ってみても16世紀末葉以降であると思われる。陶磁器の器種は碗であり、用途は不明であるが、おそらく供膳用に使用されたものと思われる。

陶磁器片の出土は、中世二子城館跡としての痕跡を示唆する遺物であろうと思われる。

### (3)土 偶

出土した302の土偶は、縄文時代晩期末葉大洞A'式期以降にみられる結髪形土偶である。文様の特徴は、頭髪部はアーチ状に作られ、沈線による施文があり、体部全体に円形状の棒状工具による刺突文と腹部付近などには磨消と刺突文が施文される、中空の土偶である。頭部は顔の部分が欠落しているが、斜め上を向くものと思われる。305の体部に施文される磨消部分の刺突文は斜位方向にやや引っ掻くように上から下に押圧状に施文される。出土している各部位の個体の法量から推測すると、かなりの法量をもつ大きな土偶となるようである。腕部とした部分は、304の腕部の縁辺の下に深い沈線に区画された部分が磨消され、そこに刺突文がみられることから、303・304はこの時期にみられる特徴である。所謂婦人服にみられる肩パットの部分で、この下に腕部が下に向かってつけられるものと推測される。北上市周辺からの出土例は、九年橋遺跡第3次調査で1個体（頸部～胴部～左足部出土）が出土している。また、県内においては、戸類家いこくつなみ貝塚（種市町）・豊岡遺跡（岩手町）・鼠入たん洞遺跡（岩泉町）・山王茶屋遺跡（矢幅町）・樋ノ懸遺跡（江刺市）・瀬沢貝塚（陸前高田市）と出土例は少ない。306は胸部または胴部であると思われるが、上記の土偶とは別個体であり、器厚は0.8cmと薄く、全体に円形状の棒状工具による刺突文のみが施文され、円形状か楕円状の沈線が施文される。沈線部分はあるいは胸部付近から腕部に移る脇の下の部分である可能性をもつが、詳細は不明である。土偶の基本的なモチーフとしては、体部を刺突文または縄文で埋めつくし、沈線をもって最低限に必要な不可欠な部位を表現する施文法であると考えられる。今回の調査で出土している部位は胸部または胴部であると思われ、頭髪部・肩部などの部位がないことから土偶の形式分類については明確なことはいえないが、施文方法や文様の特徴などから302の土偶と同一時期に比定されるものと思われる。

### 3. まとめ

調査の結果、本遺跡からは、当初予想された中世和賀氏の居城二子城館跡を、直接的に示唆する遺構は発見されなかった。しかし、縄文時代前期から、居住区域として使用され、その後縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭には再び居住区域として使用された。さらに、中世に至って和賀郡一帯に勢力を持った和賀氏の居城二子城の「物見ヶ崎館」として重要な役割を担うこととなり、土塁状の土盛りやそれに伴う溝跡が構築され、防衛地点として使用されたものと思われる。

両遺跡は、縄文時代の古くから中近世にいたるまでの永い時間に渡り、生活の場として、また、防衛拠点として利用され、歴史の一端にその足跡を残している。

#### 《参考・引用文献》

- 加藤普平・鶴丸俊明共著（1980）「図録石器の基礎知識Ⅰ～Ⅲ」柏書房
- 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正（1982）「岩手の土器」岩手県立博物館
- 石野博信（1990）「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館
- 会田容弘（1976）「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」山形考古第3巻第2号
- 工藤武久（1977）「北日本の石槍・石鏃について」北奥古代文化第9号
- 江坂輝彌（1960）「土偶」校倉書房
- 米田耕之助（1984）「土偶」考古学ライブラリー21 ニュー・サイエンス社
- 沼館愛三著（1978）「南部諸城之研究（草稿）」みちのく双書第33集 青森県文化財保護協会
- 新人物往来社（1980）「日本城郭大系2 青森・岩手・秋田」
- 加藤普平・小林達雄・藤本強（1982）「縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ」雄山閣出版
- 加藤普平・小林達雄・藤本強（1981）「縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ」雄山閣出版
- 加藤普平・小林達雄・藤本強（1983）「縄文文化の研究5 縄文土器Ⅲ」雄山閣出版
- 金閔恕・佐原眞編集（1986）「弥生文化の研究3 弥生土器Ⅰ」雄山閣出版
- 金閔恕・佐原眞編集（1987）「弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ」雄山閣出版
- 季刊 考古学 「特集 縄文土器の編年」季刊 考古学第17号 雄山閣出版
- 季刊 考古学（1986）「特集 縄文土器の世界」季刊 考古学第30号 雄山閣出版
- 熊谷常正（1983）「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」岩手県立博物館研究報告第1号
- 小田野哲憲（1983）「岩手県出土の「蓋形土器」について」岩手県立博物館研究報告第1号
- 小田野哲憲（1987）「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第5号

- 小田野哲憲 (1988) 「岩手県における弥生時代の住居址」 紀要Ⅶ  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐藤嘉広 (1989) 「東北地方北部における弥生文化受容期の様相」 岩手県立博物館報告第7号
- 北上市史刊行会 (1970) 「北上市史第一巻」
- 北上市史刊行会 (1970) 「北上市史第二巻」
- 北上市史刊行会 (1970) 「北上市史第三巻」
- 北上市教育委員会 (1975～87) 「九年橋遺跡第1次～第10次調査報告書」 北上市文化財調査報告書
- 北上市教育委員会 (1977) 「二子城跡坊館遺跡調査報告書」 北上市文化財調査報告書第21集
- 北上市教育委員会 (1983) 「滝ノ沢遺跡 (1977～1982年調査)」 北上市文化財調査報告書第33集
- 北上市教育委員会 (1986) 「北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ」 (口内地区)  
北上市文化財調査報告書第43集
- 北上市教育委員会 (1990) 「くつわ清水遺跡調査報告書」 北上市文化財調査報告書第51集
- 菊池啓治郎学兄還暦記念会編 「日高見国一菊池啓治郎学兄還暦記念論集一」
- 岩手県教育委員会 (1979) 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一Ⅱ一」 岩手県文化財調査報告書第32集
- 岩手県教育委員会 (1980) 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書一Ⅵ一」  
岩手県文化財調査報告書第50集
- 岩手県教育委員会 (1986) 「岩手県中世城館跡分布調査報告書」 岩手県文化財調査報告書第82集
- 一戸町教育委員会 (1984) 「上野遺跡-昭和58年度発掘調査報告書-」 一戸町文化財調査報告書第7集
- 一戸町教育委員会 (1985) 「上野遺跡-昭和59年度発掘調査報告書-」 一戸町文化財調査報告書第13集
- 江釣子村教育委員会 (1982) 「江釣子遺跡群一昭和56年度発掘調査報告一」
- 江釣子村教育委員会 (1983) 「江釣子遺跡群一昭和57年度発掘調査報告一」  
(鶴岡崎上の台遺跡・蔵屋敷遺跡)」
- 滝沢村教育委員会 (1986) 「耳取遺跡」 滝沢村文化財調査報告書第3集
- 宮城県教育委員会 (1986) 「田柄貝塚Ⅱ 土製品・石器・石製品編」 宮城県文化財調査報告書第111集
- 青森県立郷土館 (1988) 「名川町剣吉荒町遺跡 (第2地区) 発掘調査報告書」  
青森県立郷土館調査報告第22集考古一7
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1986) 「馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1987) 「笹間館跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1987) 「平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書」

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1989）「管波Ⅰ遺跡発掘調査報告書」

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第139集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1989）「坊館跡発掘調査報告書」

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第145集

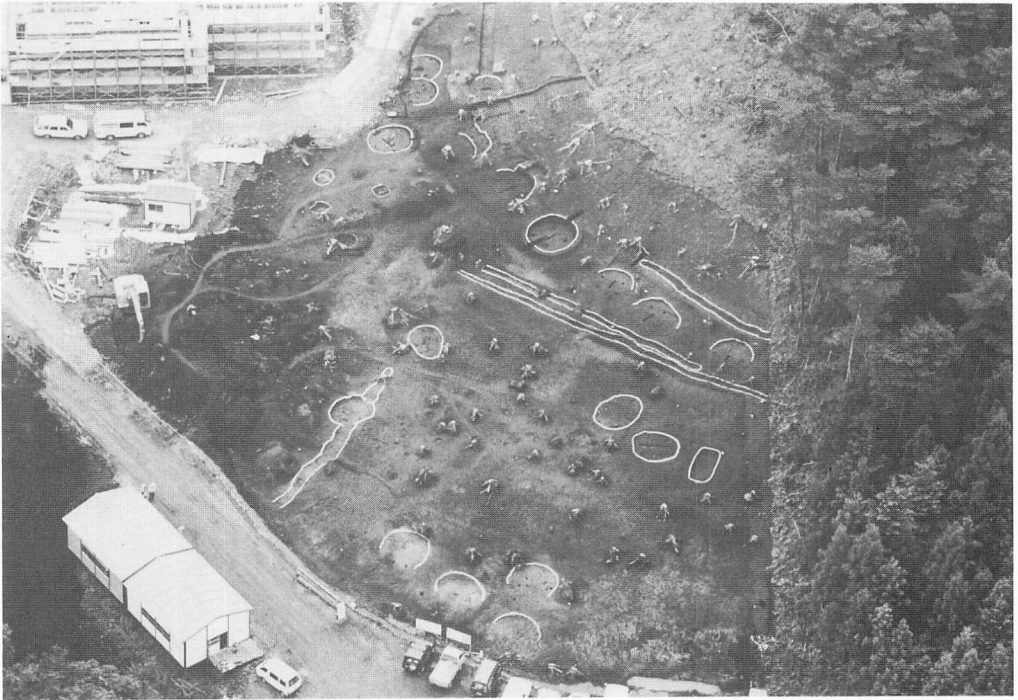
# 写真図版



図版 1 遺跡全景 (南から)

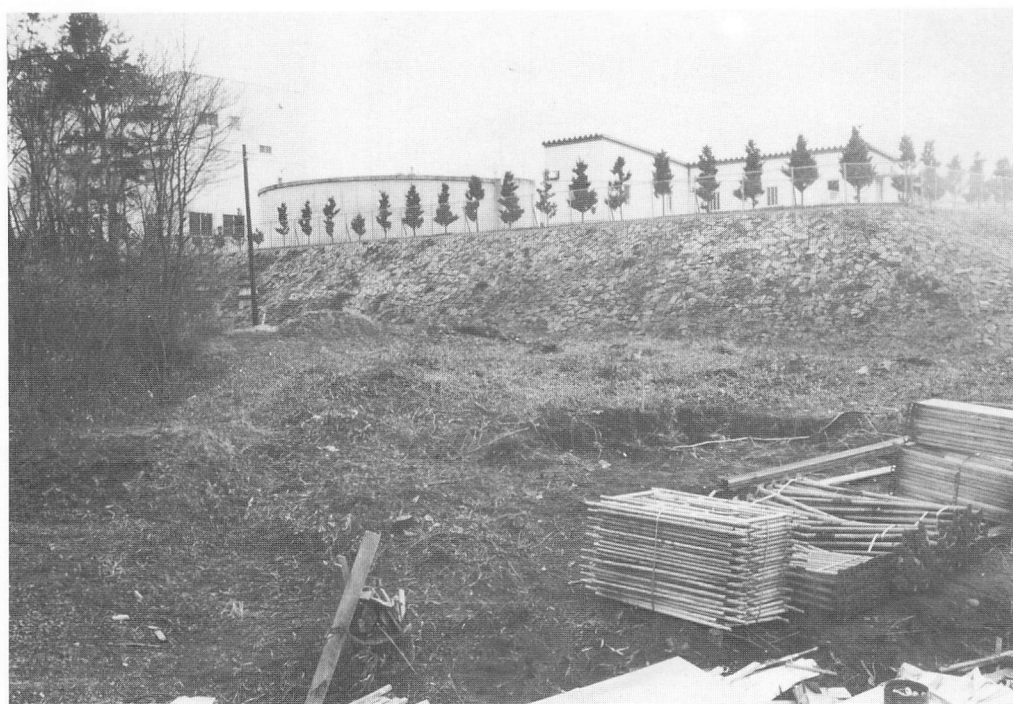


調査前近景（南から）



調査後全景（北東から）

図版2 物見崎遺跡



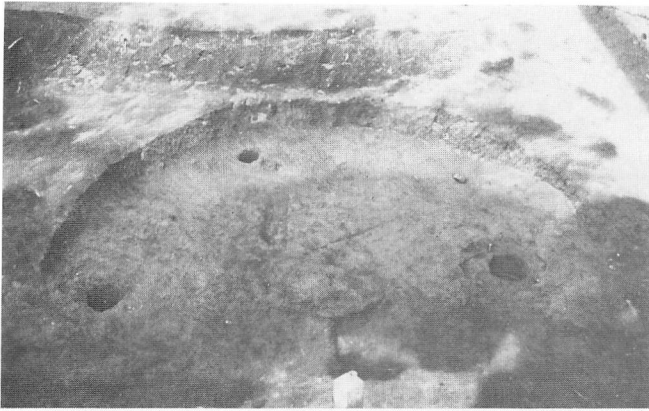
調査前近景（北東から）



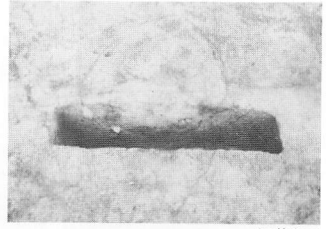
調査後全景（南から）

図版3 監物館跡

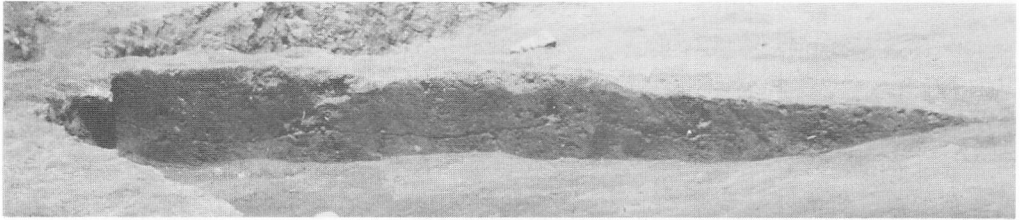




B 11住居跡



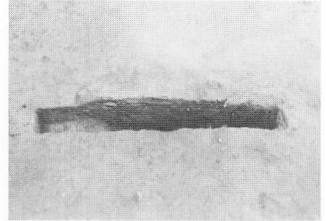
炉断面



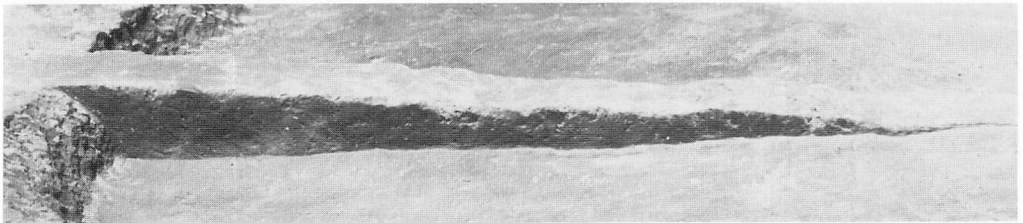
埋土断面



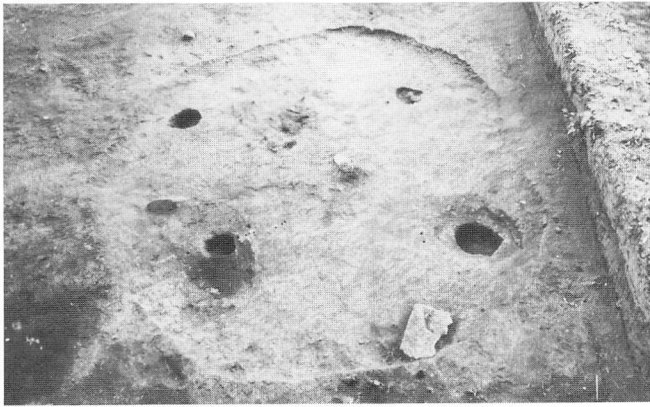
C 10住居跡



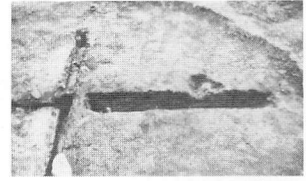
炉断面



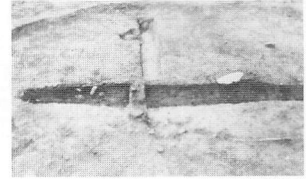
埋土断面



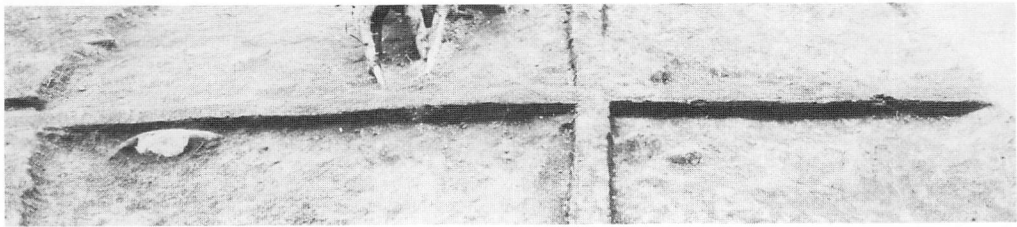
C 13住居跡



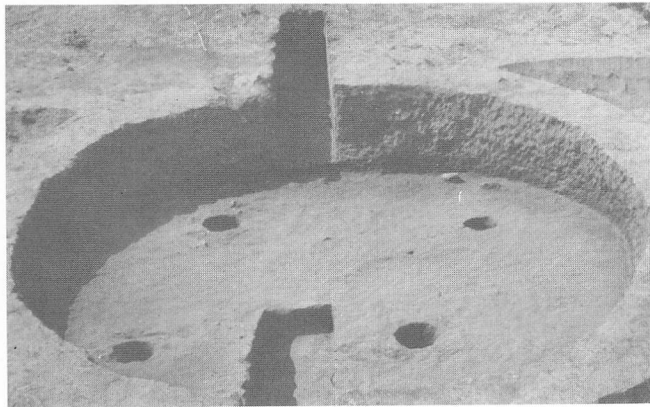
炉断面



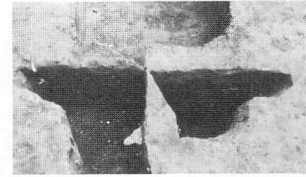
炉断面



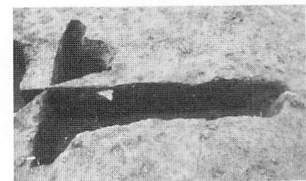
埋土断面



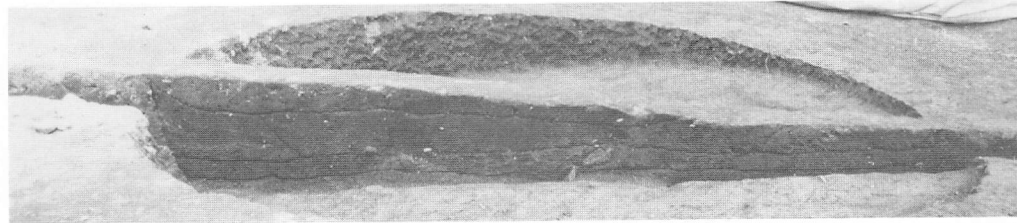
D 8住居跡



炉断面



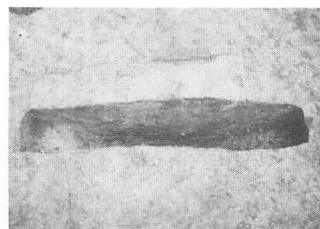
炉断面



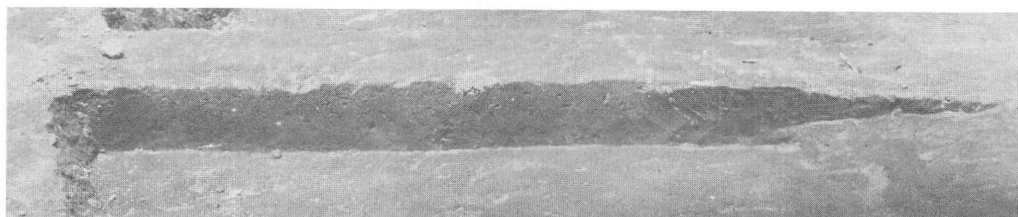
埋土断面



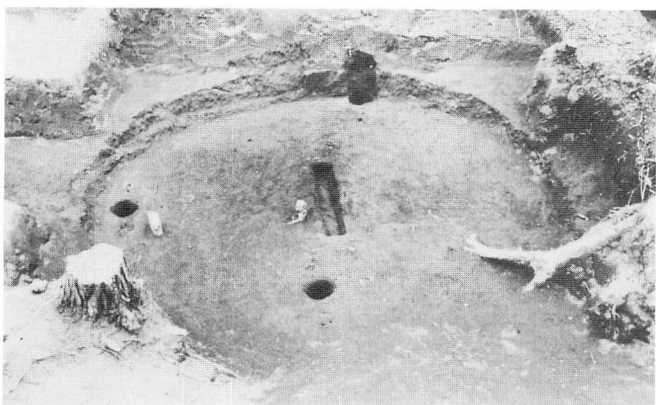
D 9 住居跡



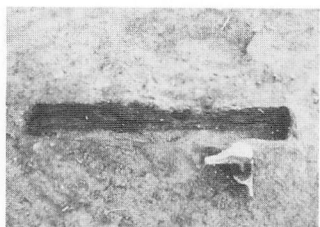
炉断面



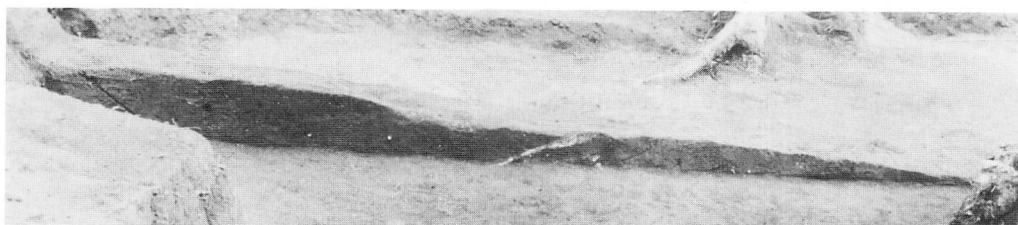
埋土断面



E 4 住居跡



炉断面



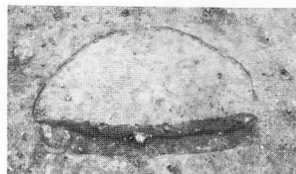
埋土断面



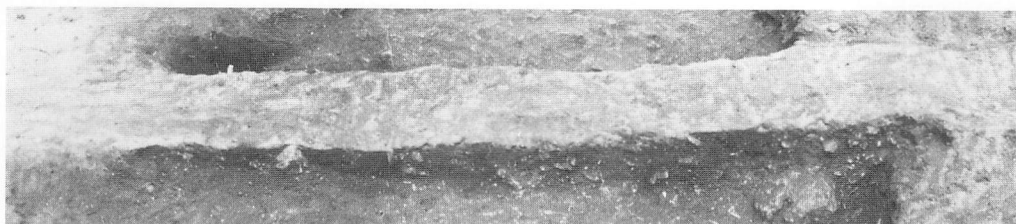
E 6 住居跡



炉平面



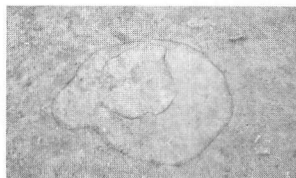
炉断面



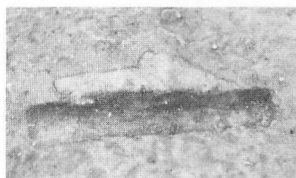
埋土断面



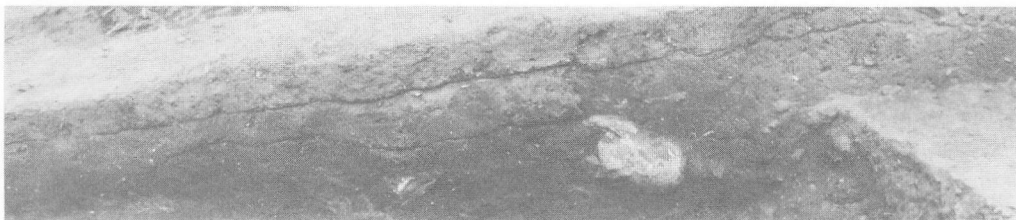
E 7 住居跡



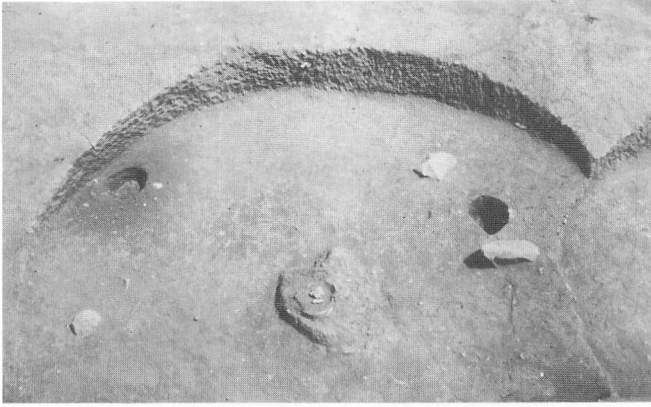
炉平面



炉断面



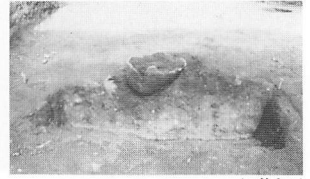
埋土断面



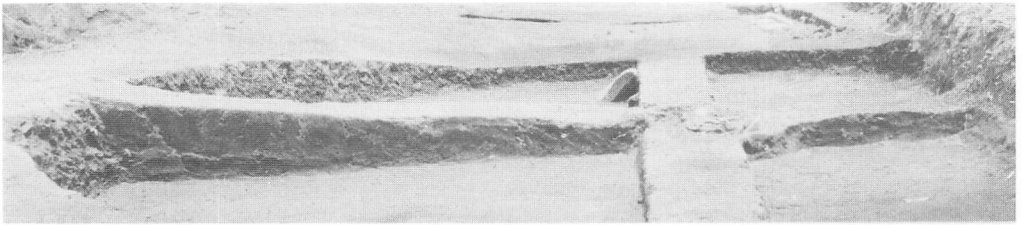
F 4-1 住居跡



炉平面



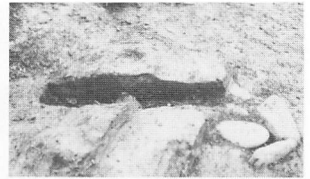
炉断面



埋土断面



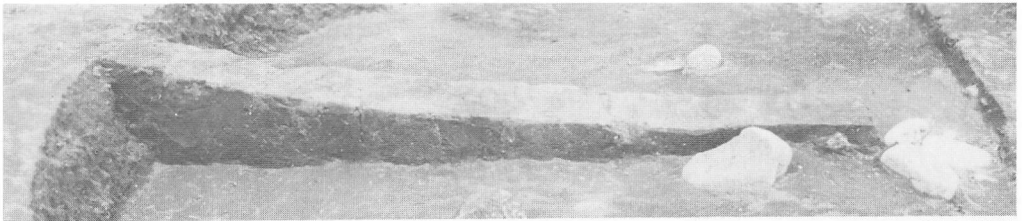
F 4-2 住居跡



炉断面

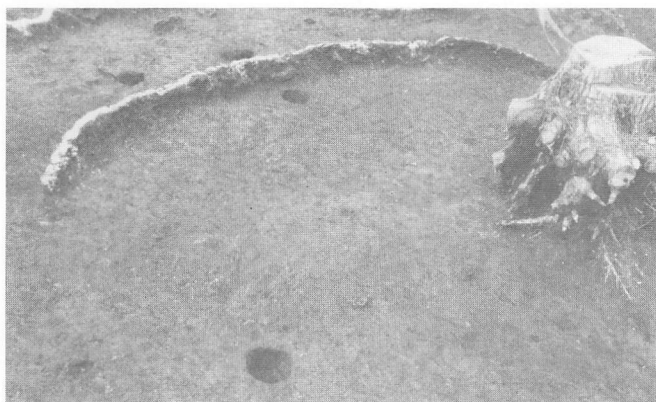


重複狀況



埋土断面

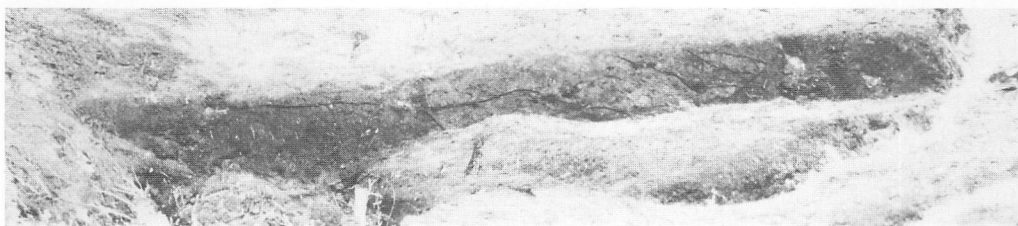
図版 8 F 4-1・F 4-2 住居跡



F 6 住居跡



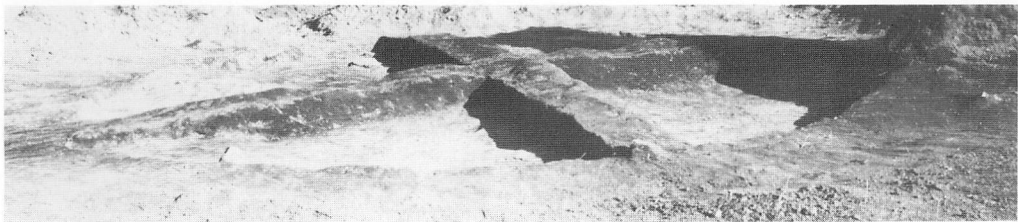
炉断面



埋土断面



F 15 住居跡



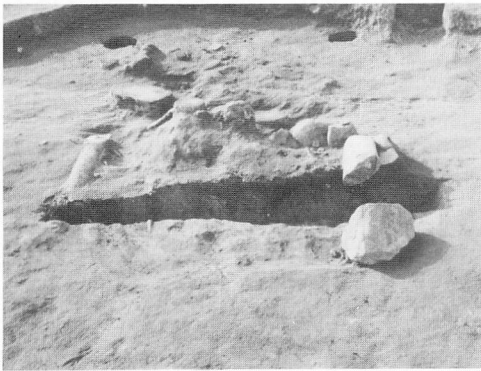
埋土断面



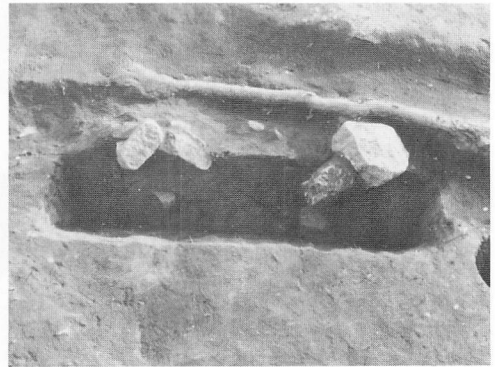
G 5 住居跡



埋土断面



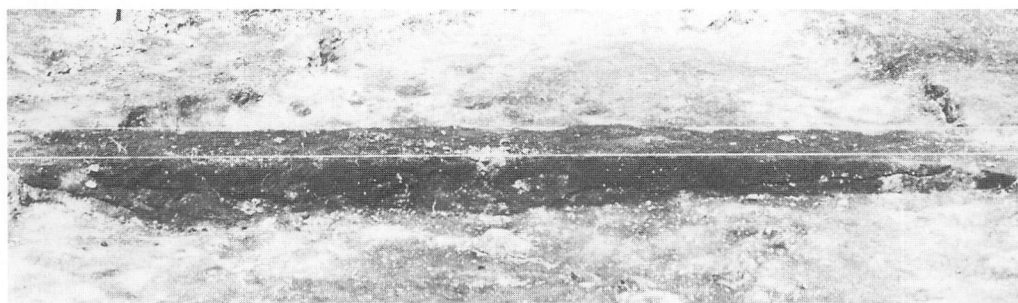
炉断面



出入口状施設断面



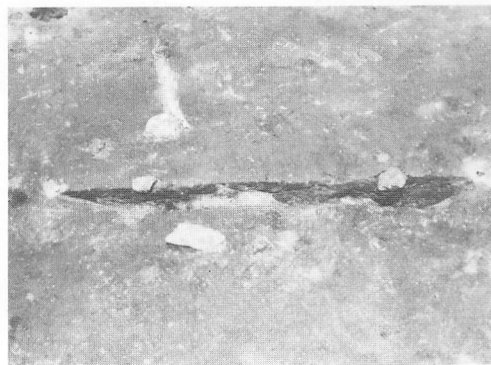
G 10住居跡



埋土断面



炉平面



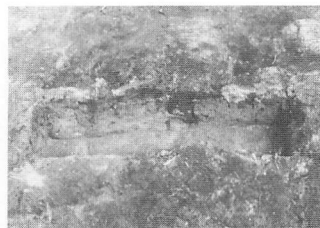
炉断面

図版11 G 10住居跡





F 16住居跡



炉断面



埋土断面



G 14住居跡



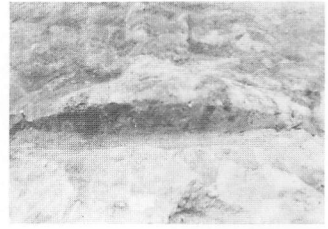
炉断面



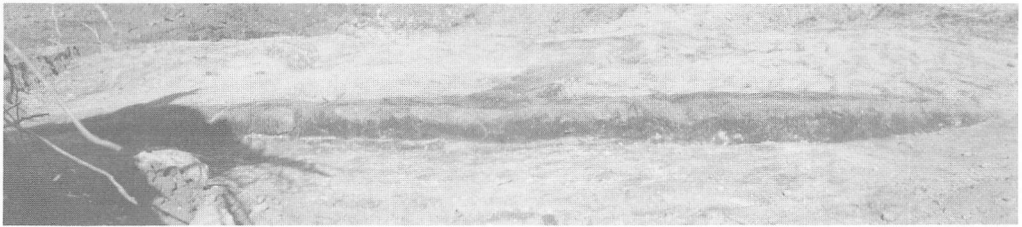
埋土断面



G 15住居跡



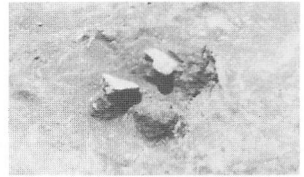
炉断面



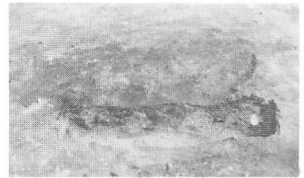
埋土断面



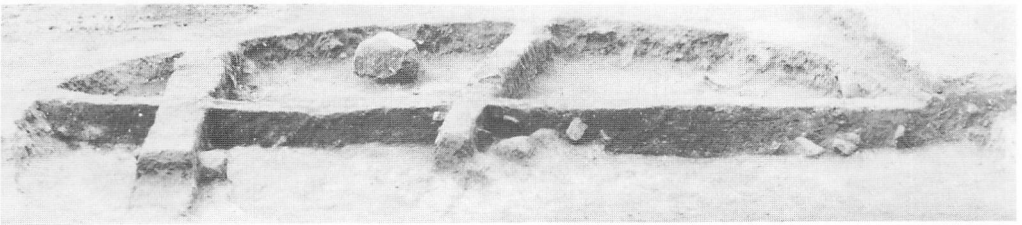
H 11住居跡



炉平面



炉断面



埋土断面

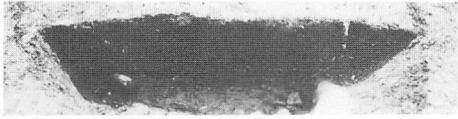
图版13 G 15 · H 11住居跡



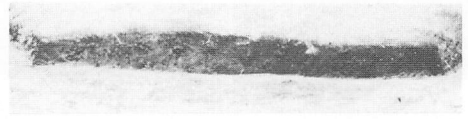
H 8 土坑



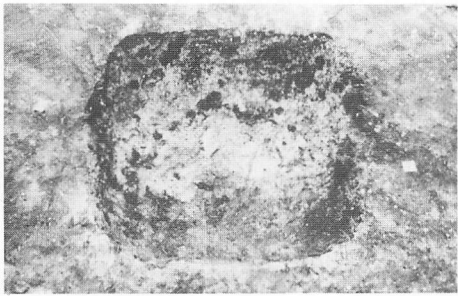
C 13 炭窯跡



埋土断面



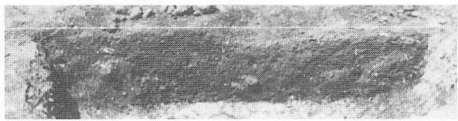
埋土断面



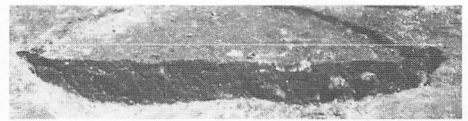
G 7-1 炭窯跡



G 7-2 炭窯跡



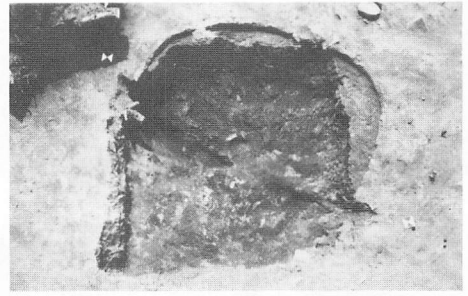
埋土断面



埋土断面



H 6 炭窯跡



H 7 炭窯跡



埋土断面



埋土断面

图版14 土坑·炭窯跡



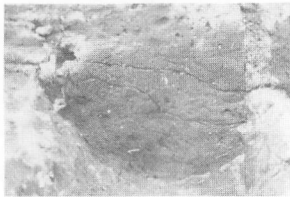
B 11溝跡



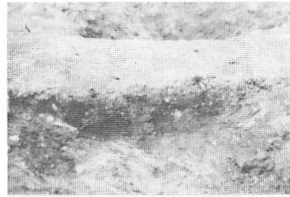
B 12-2 (左) · B 12-1 (右)溝跡



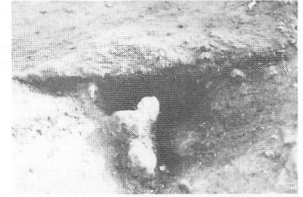
G 11溝跡



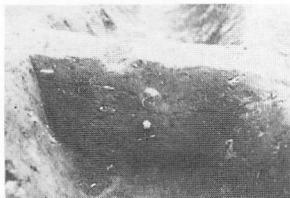
B 11溝跡北側断面



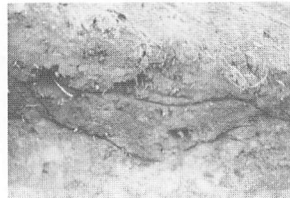
B 12-1 溝跡南側断面



B 12-2 溝跡南側断面



B 11溝跡南側断面



B 12-2 溝跡北側断面



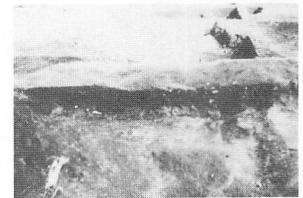
G 11溝跡東側断面



B 12-1 溝跡北側断面

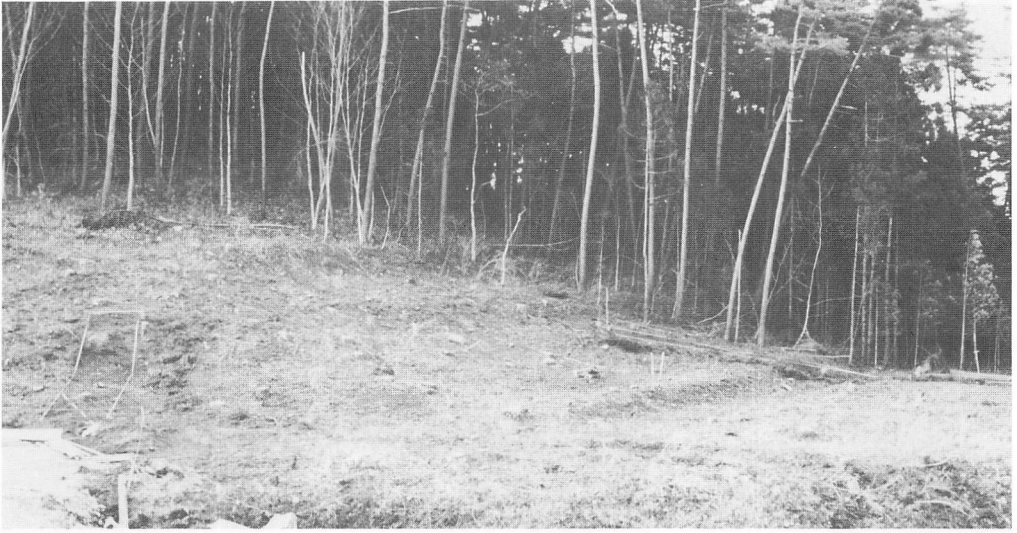


B 12-2 溝跡中央部断面

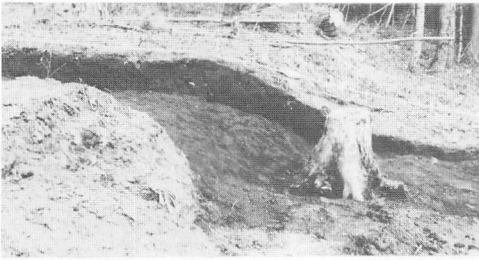


G 11溝跡南側断面

図版15 溝跡



土壘状遺構



盛土状況



断面



集石状況

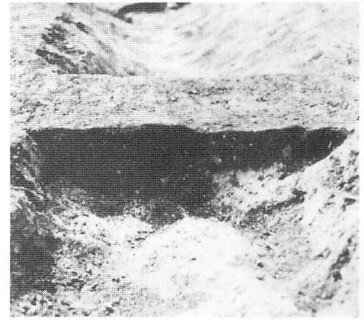
図版16 土壘状遺構・集石状遺構



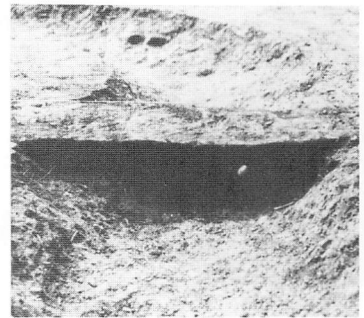
調査後近景（南西から）



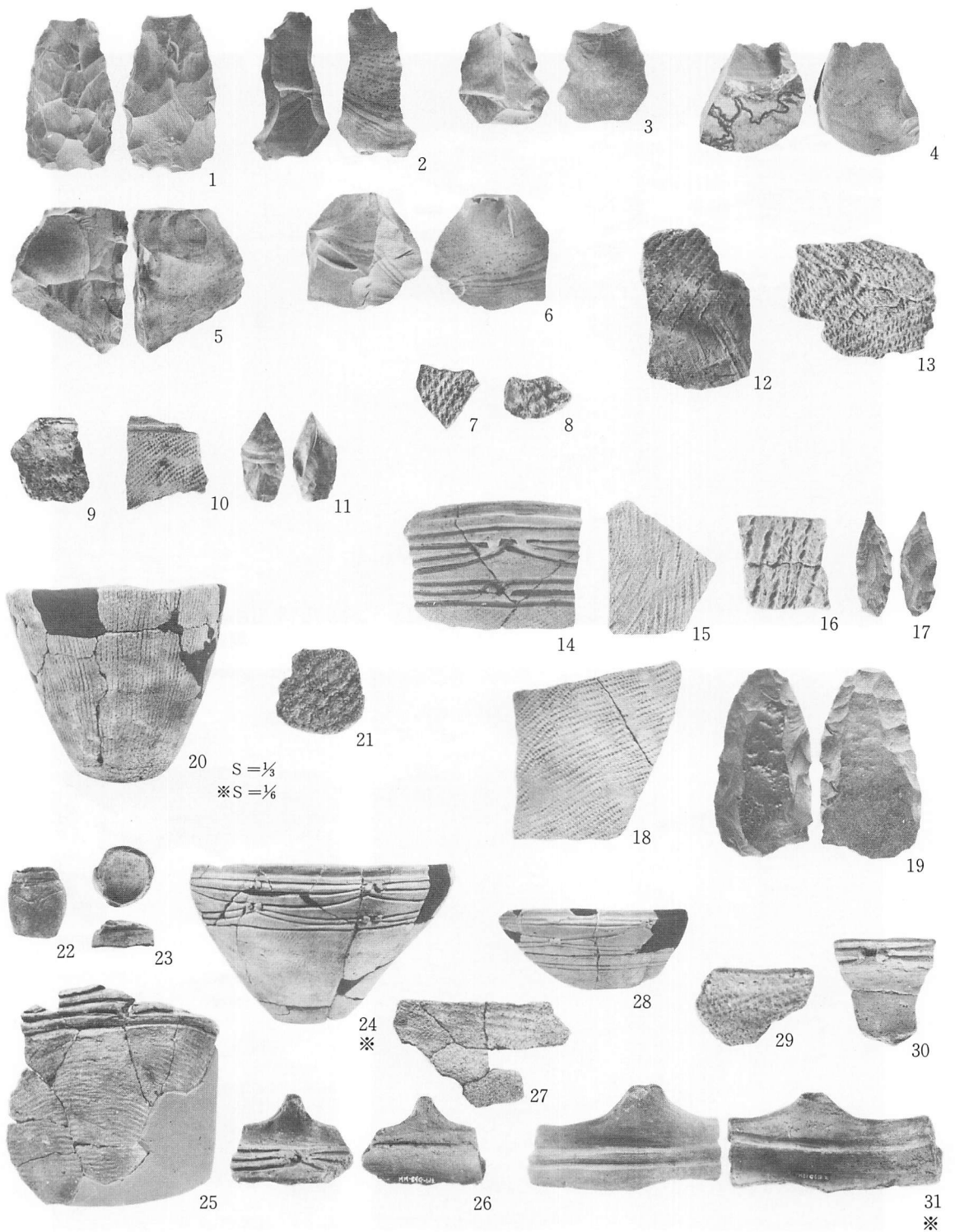
溝跡



埋土断面

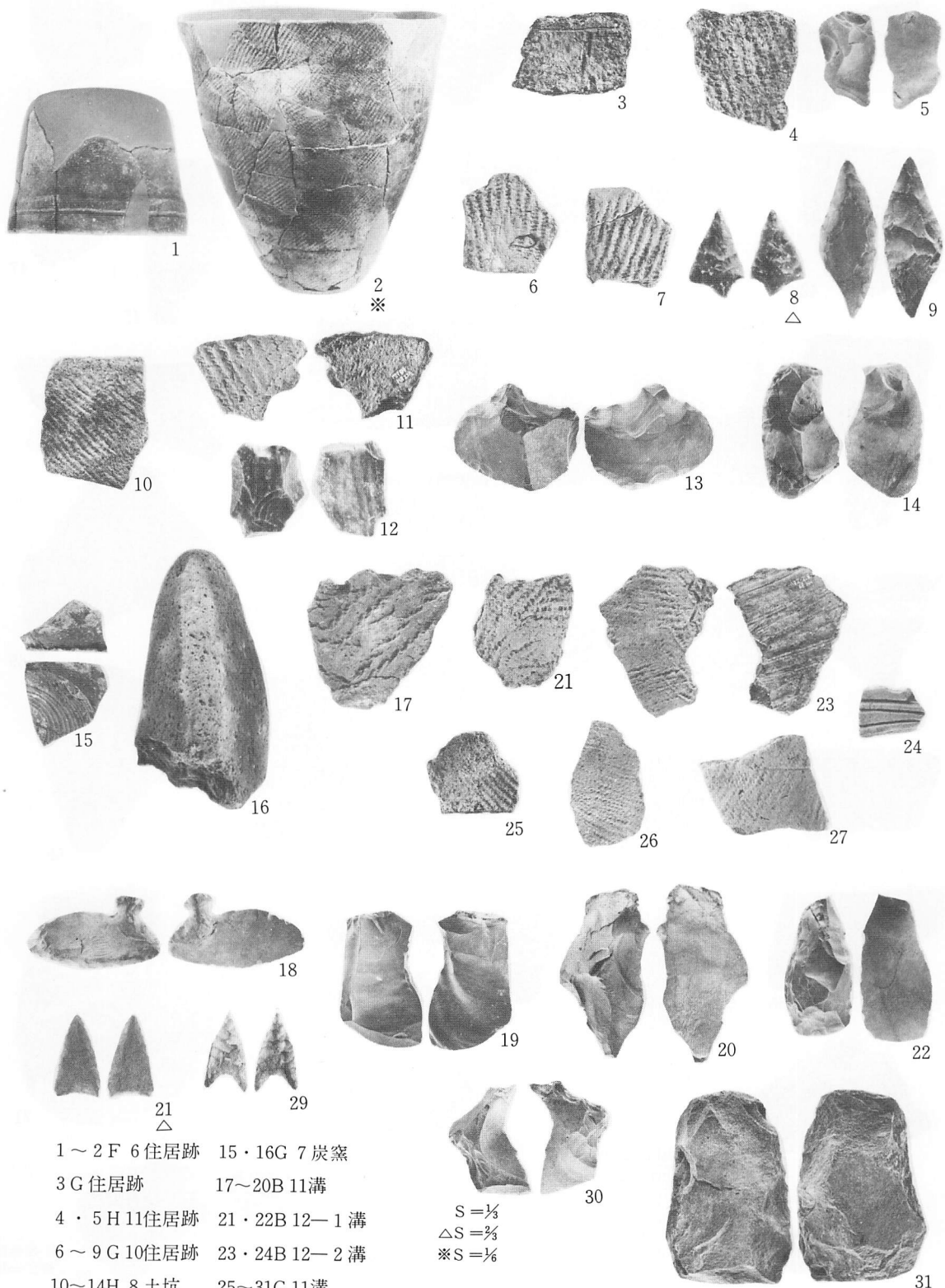


図版17 監物館跡・溝跡



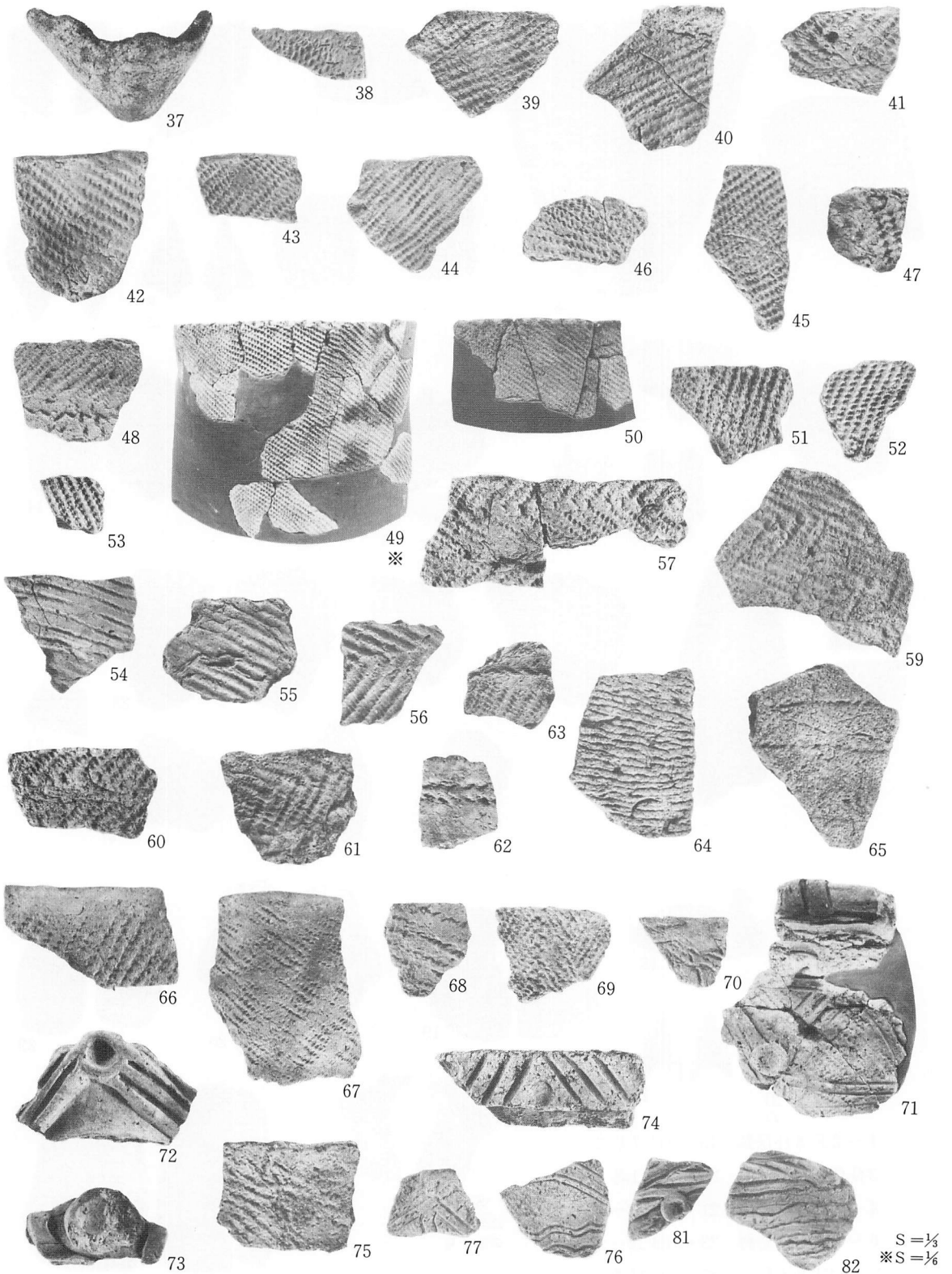
1 ~ 6 B 11住居跡 7 · 8 C 13住居跡 12 · 13 D 9住居跡 14 ~ 19 E 7住居跡  
20 F 4住居跡 21 F 16住居跡 22 ~ 31 G 5住居跡

図版18 遺構内出土遺物

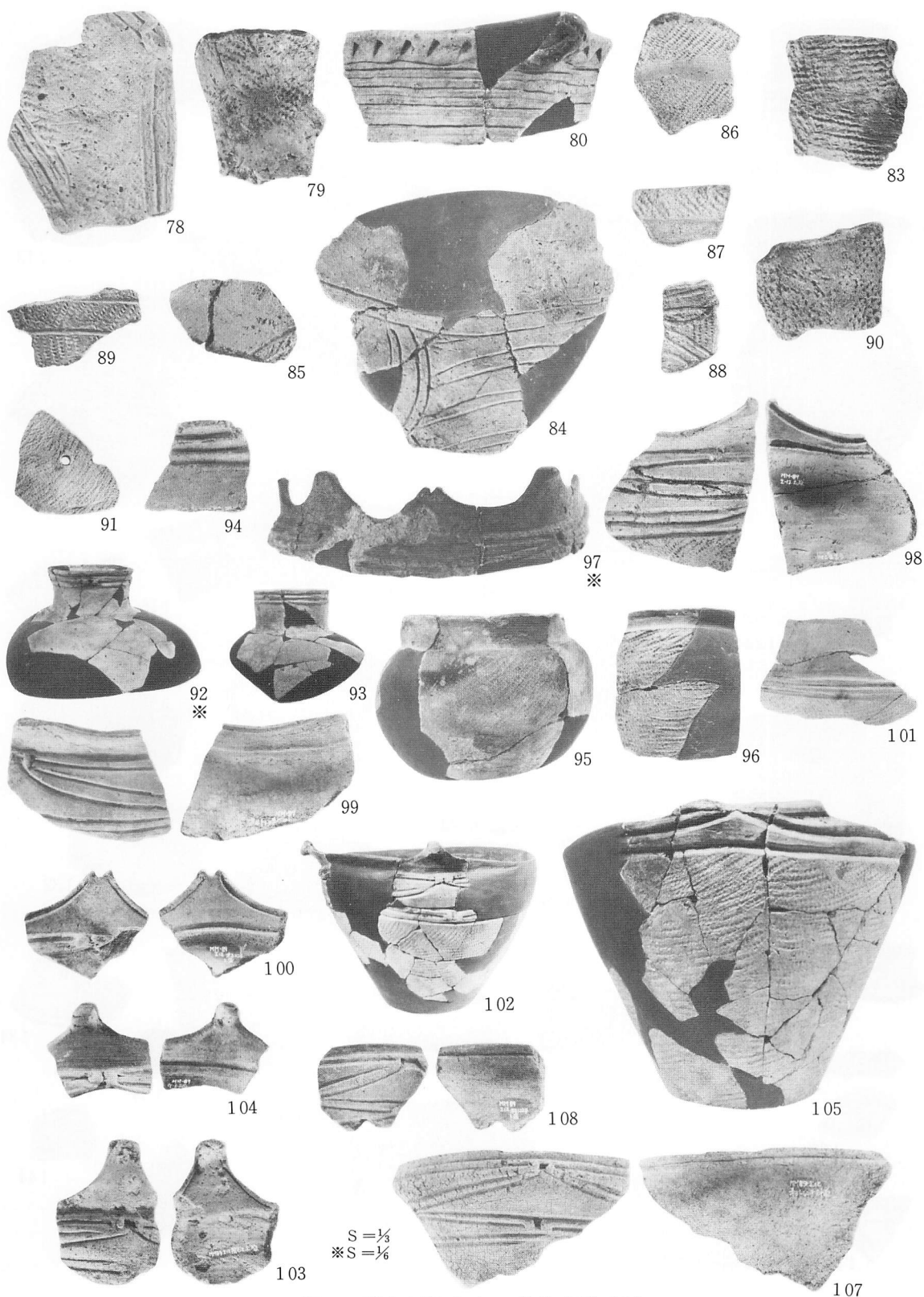


図版19 遺構内出土遺物

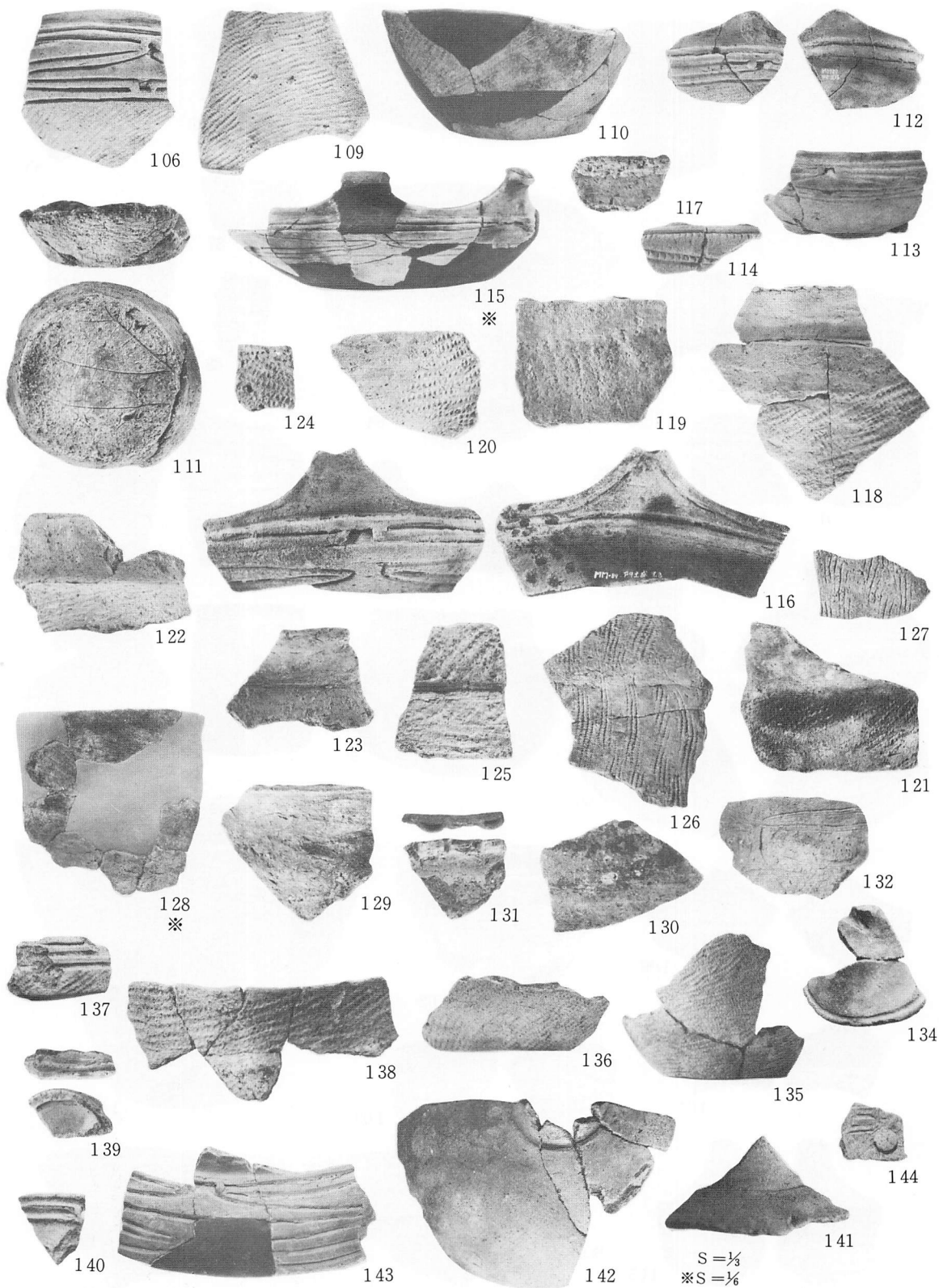




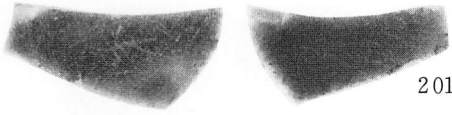
図版20 縄文土器 (1)



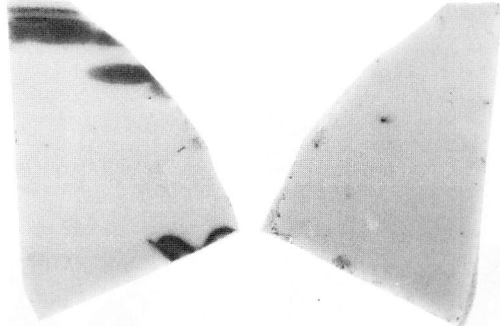
図版21 縄文土器 (2) ・弥生土器 (1)



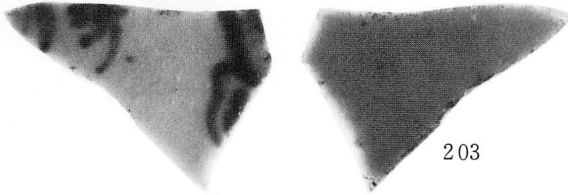
图版22 弥生土器 (2)



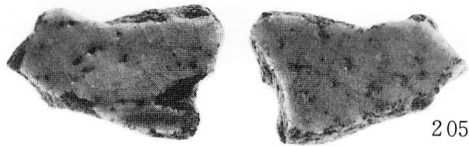
201



202



203

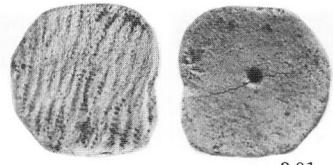


205



204

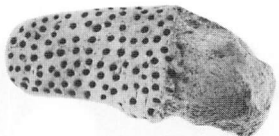
S=1/2



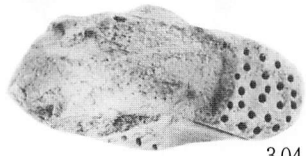
301



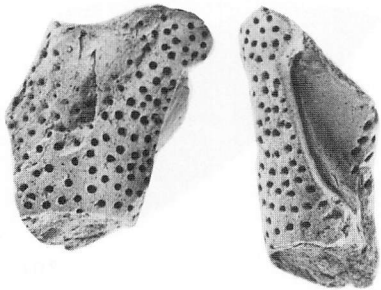
302



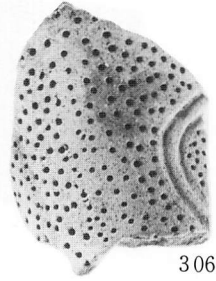
303



304



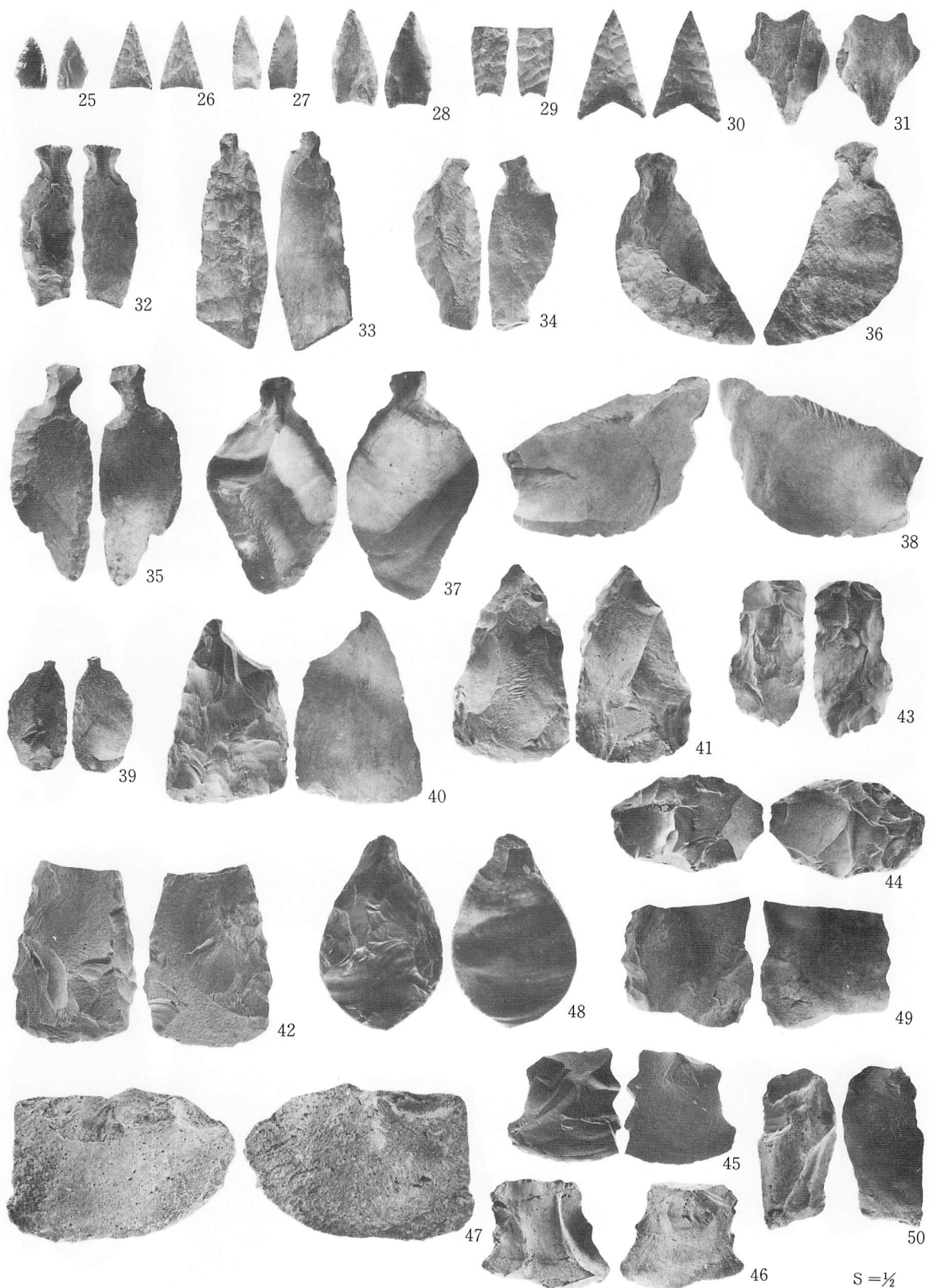
305



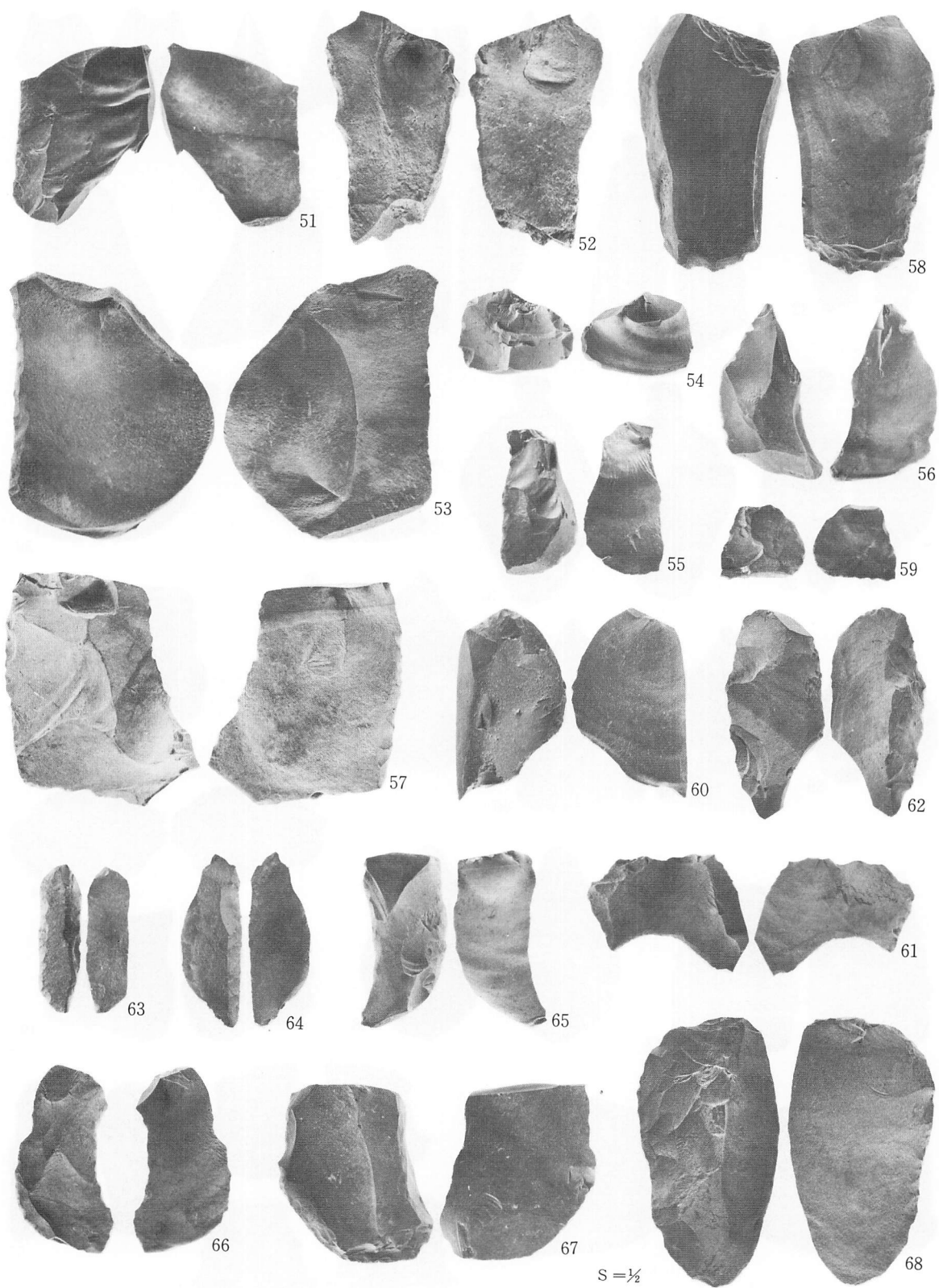
306

S = 1/2

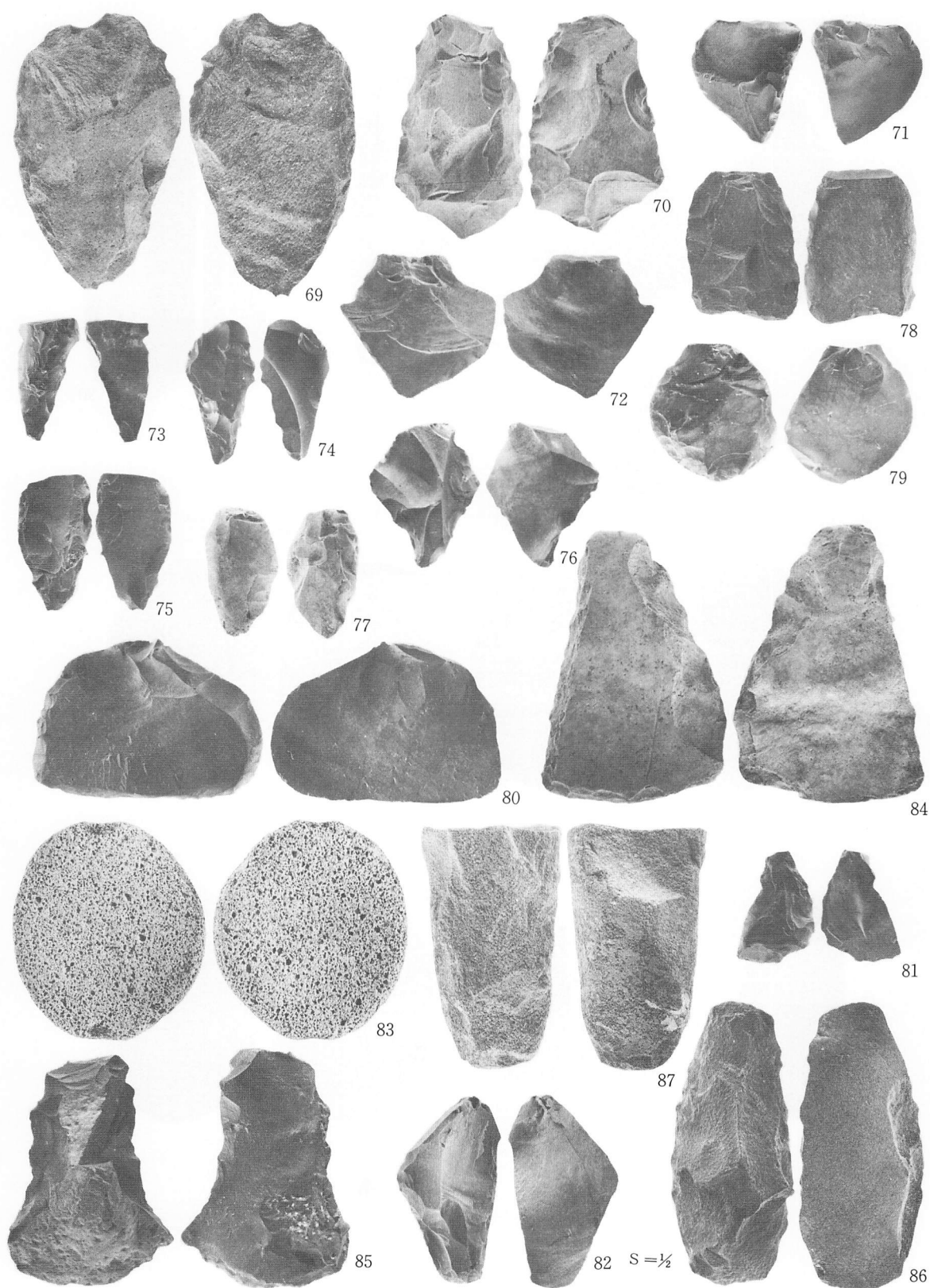
図版24 土製品



図版25 石鏃・石錐・石匙・石篋・ピエスエスキーユ・不定形石器 (1)



图版26 不定形石器 (2)



图版27 不定形石器 (3) 石锤·打製石斧





图版28 礮器・磨石・凹石・砥石

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 長	小笠原 喜 一		
副所長	米 澤 康 雄		
[管理課]			
管理課長(兼)	米 澤 康 雄	嘱 託	吉 田 一 男
課長補佐	森 岡 陽 一	運 転 技 師	山 館 春 男
主 事	阿 部 隆 広	兼 員	佐 藤 春 男
[調査課]			
調査課長	昆 野 靖		
課長補佐	佐々木 嘉 直		
主任文化員	小田野 哲 憲	文 化 財	佐々木 信 一
専門調査員	三 浦 謙 一	調 査 員	小 原 上 修
〃	工 藤 利 幸	〃	村 上 宗 孝
〃	高橋 與右衛門	〃	酒 井 本 建
〃	平 井 進 一	〃	松 本 子 昭
〃	中 村 良 一	〃	金 濱 田 彦
〃	中 川 重 敏	〃	濱 菅 常 久
〃	藤 村 橋 義 介	期 限 調 査 員	菅 相 原 伸 靖
文 化 財	高 齋 藤 實 隆	專 門 調 査 員	及 阿 部 勝 則
専門調査員	佐 藤 孝 雄	〃	阿 菊 池 明 芳
〃	千 齋 藤 博 司	〃	菊 及 川 雅 之
〃	東 海 林 隆 幹	〃	星 森 下 宏
〃	佐々木 弘 均	〃	森 鈴 木 知 幸
〃	川 村 貞 行	〃	鈴 菊 地 村 葉
〃	鈴 木 貞 格	〃	藤 千 保 悟
〃	伊 東 藤 邦 雄	〃	千 久 保 茂
〃	遠 齋 藤 敏 明	〃	大 久 保 博 由
〃	齋 神 敏 明	〃	熊 谷 博 由
[資料課]			
資料課長	高 橋 薫 夫		
主任文化員	田 鎖 寿		
専門調査員			

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第157集

**物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書**

**第三北上中部工業用水道施設関連遺跡発掘調査**

印刷 平成2年8月25日

発行 平成2年8月31日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185  
電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 株式会社 熊谷印刷  
〒020 盛岡市上田一丁目6番49号 電話 (0196) 53-4151